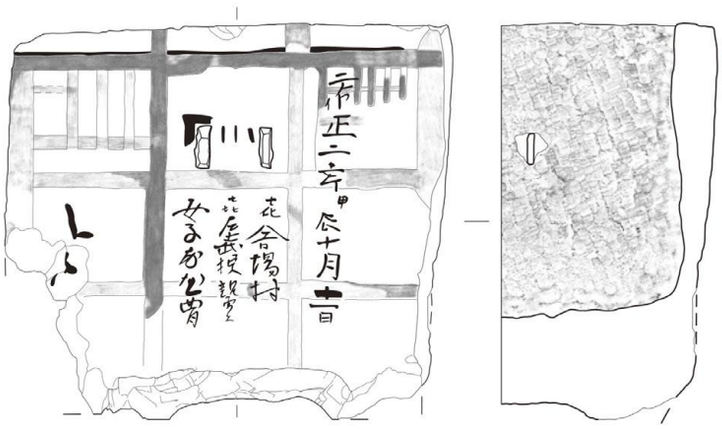
宜野湾市文化財調査報告書　第59集

安仁屋・新城イシジャー流域古墓群
喜友名山川原丘陵古墓群

令和元年度

西普天間住宅地区土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査



２０２２（令和４）年９月

沖縄県　宜野湾市教育委員会

宜野湾市文化財調査報告書　第59集　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群　喜友名山川原丘陵古墓群　二〇二二（令和四）年九月　沖縄県　宜野湾市教育委員会

宜野湾市文化財調査報告書　第59集

安仁屋・新城イシジャー流域古墓群
喜友名山川原丘陵古墓群

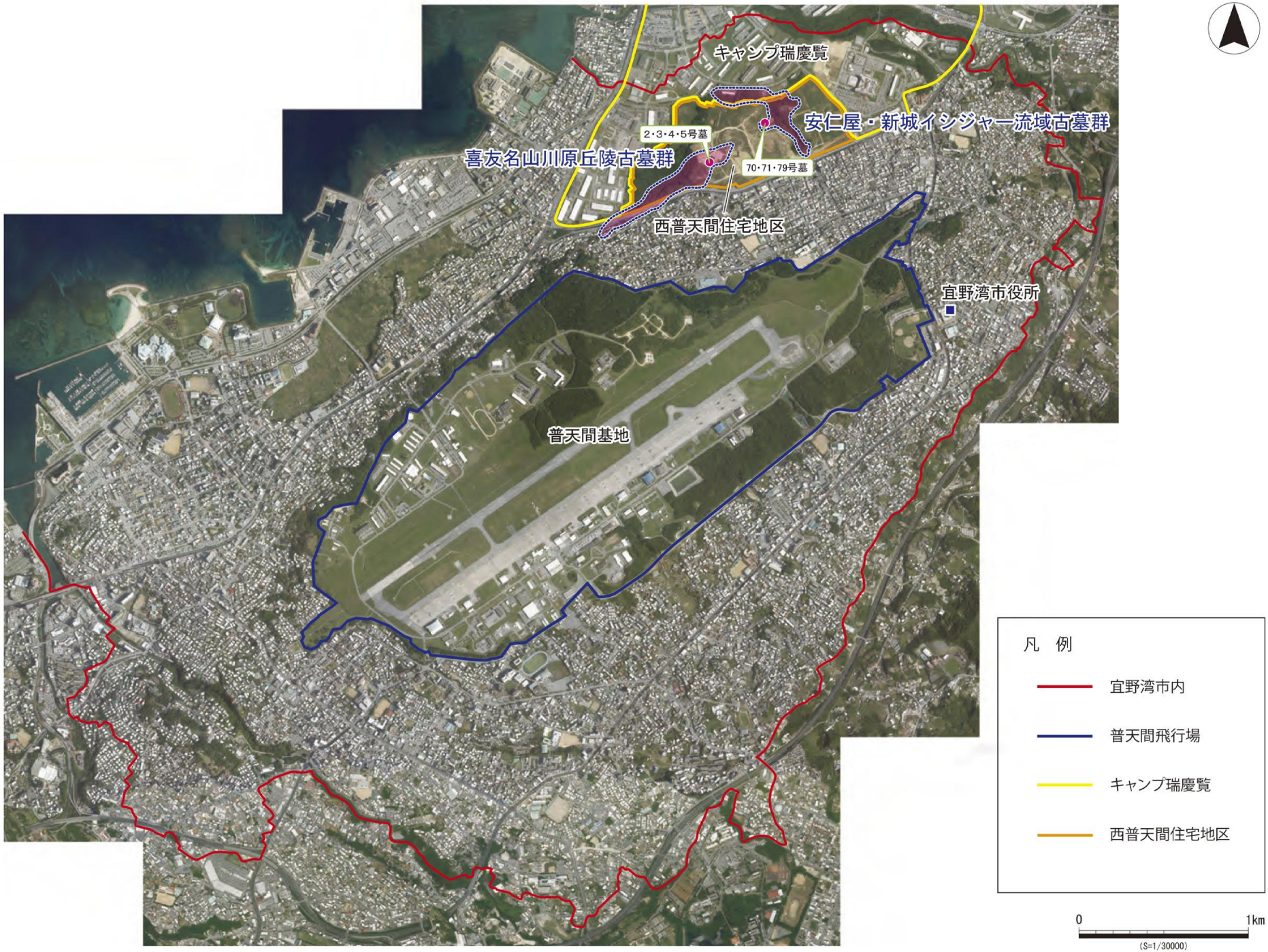
令和元年度

西普天間住宅地区土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査

２０２２（令和４）年９月

沖縄県　宜野湾市教育委員会

巻頭図版 1　報告書所収調査地位置



巻頭図版２　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群　調査区遠景

巻頭図版３　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群　70 号墓検出状況

巻頭図版４　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群　71 号墓仮墓検出状況

巻頭図版５　喜友名山川原丘陵古墓群　調査区遠景

巻頭図版６　喜友名山川原丘陵古墓群　調査風景

巻頭図版７　喜友名山川原丘陵古墓群　ドローン撮影

序

本報告書は令和元年９月から同年 12 月にかけて宜野湾市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものであります。

今回、発掘調査が行われた喜友名山川原丘陵古墓群と安仁屋・新城イシジャー流域古墓群は今から約 250 年前の近世期～近代に位置づけられる遺跡であり、喜友名・安仁屋地域の墓域でもあります。米軍基地によって接収され、基地の造成で埋もれてしまった古墓が平成 29 年度に行われた防衛局による支障除去で発見され調査をするに至りました。

今回の発掘調査の成果が市民の歴史的教材及び文化財保護・活用資料として広く活かされ、また宜野湾市及び周辺地域の歴史研究の学術的資料として検討いただければ幸いに存じます。

末尾になりますが、調査を実施するにあたりご協力を賜りました関係者各位に対して深く感謝の意を表します。

2022（令和４）年９月

沖縄県　宜野湾市教育委員会
教育長　仲　村　宗　男

例　言

1．本報告書は、西普天間住宅地区区画整理に係る開発行為に伴い、宜野湾市教育委員会が建設部市街地整備課より執行依頼を受けて、令和元（平成 31）年度に実施した安仁屋・新城イシジャー流域古墓群と喜友名山川原丘陵古墓群の緊急発掘調査の成果を収録したものである。

2．本書に掲載した地図は、基本的に宜野湾市都市計画課発行の都市計画図（1：2,500）を使用しており、他の情報図については、宜野湾市教育委員会が管理・運営している GIS データを主に使用している。

3．本書で使用した土色は、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

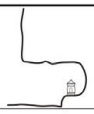
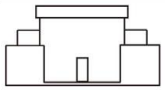
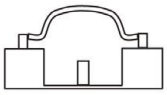
4．本文中における遺跡の基準方位は、国土座標系（旧座標系）第ＸＶ座標系の座標北を用い、層位・遺構は海抜高（那覇）を基準とした高さである。

5．本書の編集は、翁長和佳子の協力を得て金城りおが行った。

6．現地調査で得られた実測図・写真・画像デジタルデータ・地形測量図等の各種調査記録は、全て宜野湾市教育委員会に保管している。

凡　例　1

1 墓型式

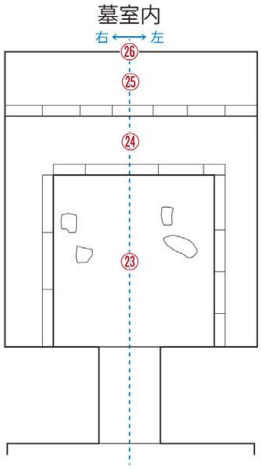
分類		墓型式	特徴	代表例／市内例	模式図
I	a	ガマバカ 洞穴墓	自然洞穴を利用する墓。 洞穴開口部を石積みによって塞ぐものを「洞穴囲込墓」と呼ぶ。	・久米島町ヤッチのガマ ・宜野湾市喜友名山川原丘陵古墓群 フトゥキャアブ洞窟	
	b	岩陰墓	自然の岩陰を利用する墓。 岩陰前面を石積みによって塞ぐものを「岩陰囲込墓」と呼ぶ。	・浦添市伊祖の高御墓 ・宜野湾市喜友名前原第一古墓群 岩陰A・D	
II	a	フィンチャー 掘込墓 （正面装飾なし）	斜面や岩盤を掘り込んだ墓。 概ね、石積みや漆喰で入口が塞がれるのみで、正面は装飾されない。ただし、屋根を構築するものや、例外的に正面のみを亀甲墓状に飾るものもある。	・宜野湾市小禄墓 ・宜野湾市奥間ノロ墓	
	b	ファーフー 破風墓	正面を装飾した掘込墓で、屋根が破風形(切妻形)になるもの。 墓の背面が露出するものもある。	・那覇市玉陵 ・糸満市幸地腹門中墓	
	c	ヒラフチバカ 平葺墓	正面を装飾した掘込墓で、平屋根を構築するもの。 眉石は直線状。	・浦添市伊祖の入め御拝領墓 ・浦添市内間西原近世墓群1号墓	
	d	カーミナクーバカ 亀甲墓	正面を装飾した掘込墓で、屋根が亀甲形になるもの。平地に建てられるものもある。 袖回りが省略されて、亀甲の盛り上がりが強調されるものを「ボージャーバカ」と呼ぶ。	・那覇市銘苅古墓群 「伊是名御殿内の墓」 ・宜野湾市大山東方第Ⅴ丘陵古墓群 「大山上江家古墓」	
III	a	ヤーグァバカ 家形墓	平地に建てられた墓で、外観が家の形を呈するもの。 屋根は概ね破風形(切妻形)であるが、中には亀甲形のものや塔を建てるものがある。	—	
	b	カリハカ 仮墓	平地に建てられた簡易的な墓。 概ね小型で、市販のものと構築されたものがある。中にはやや大きなものもあり、「箱形墓」と呼称されるものもある。	—	

『宇地泊西原丘陵古墓群』（宜野湾市教育委員会編 2008）より転載

2 亀甲墓の部位名称

宜野湾市史編集委員会編 1985『宜野湾市史』第5巻 資料編4 参考

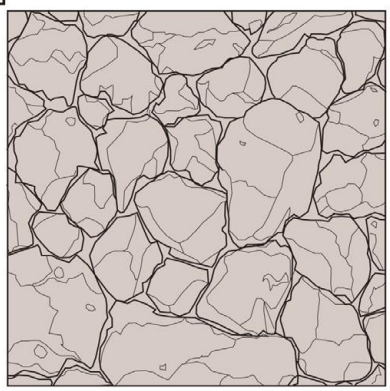
墓室内



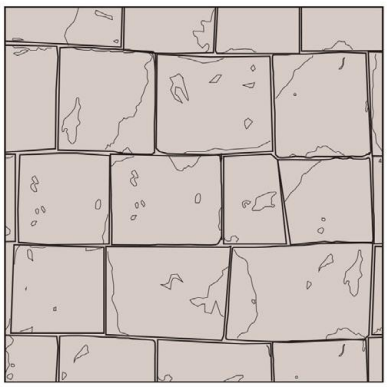
①御香炉石（ウコールイシ）
②門石（ジョウイシ）
③隅石（シミイシ）
④脇隅石（ワキシミイシ）
⑤門冠い（ジョウカブイ）
⑥鏡石（カガミイシ）
⑦眉（マユ）
⑧臼（ウーシ）
⑨子臼（ツクウーシ）
⑩ヌンチャ
⑪ボージ
⑫童の手（ワラビヌテイ）
⑬袖回り（ヤジョマーイ）
⑭袖石（ソデイシ）
⑮庭積み（ナージミー）
⑯庭囲い（ナーガケイ）
⑰三味台（サンミデー）
⑱カビアンジ
⑲墓庭（ハカナー）
⑳墓の門（ハカヌジョウ）
㉑仮墓（カリバカ）
㉒墓道*
㉓シルヒラシ*
㉔一番ダナ*
㉕二番ダナ*
㉖イケ

＊本報告では、この称とする

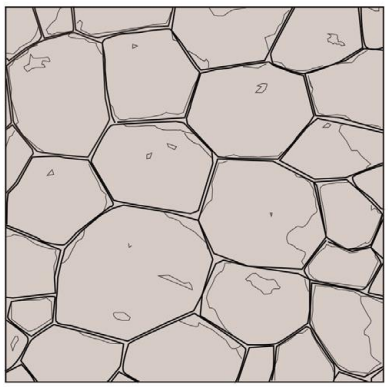
3 石積み技法



野面積み



布積み



相方積み

凡　例　2

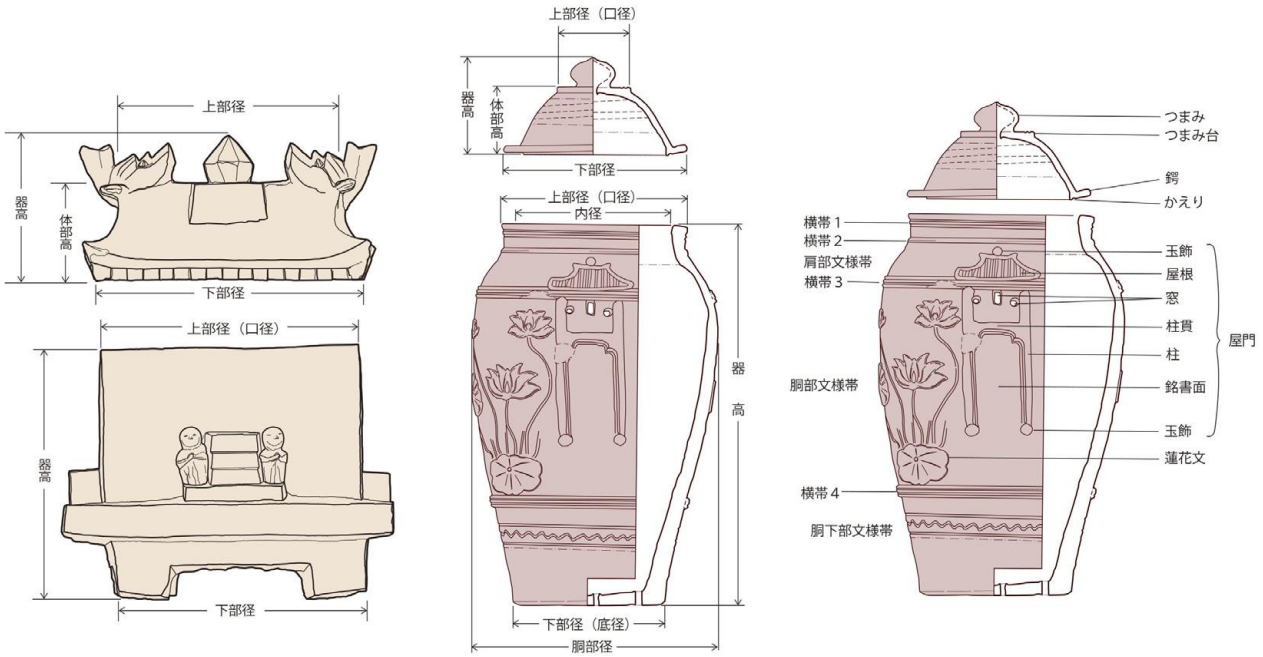
・沖縄では、洗骨後の骨を納めておく甕のことを一般にジーシガーミ（厨子甕）というため（上江洲1980）、本書でも蔵骨器に「厨子」の表記を用いている。

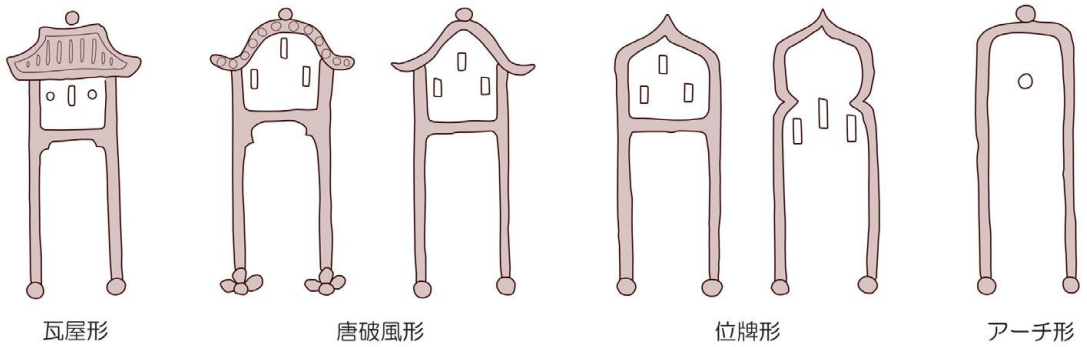
・厨子の分類は、基本的に上江洲均（上江洲1980）・浦添市教育委員会（浦添市教育委員会1997、2006）に倣った。

・諸般の事情により、実測が出来なかった遺物などに関しては、オルソ画像や写真を用いている。

・遺物の集計表や実測図などは紙幅の都合上、割愛したものもある。

・各厨子の計測位置および部位名称は以下のとおりである。





屋門の分類

『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』
（浦添市教育委員会 1999）より抜粋の上、一部加筆

目　次

巻頭図版
序
例言
凡例

第Ⅰ章　事業概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1

第Ⅱ章　位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 4
　第３節　位置と環境 …… 6
　　1. 安仁屋 …… 6
　　2. 喜友名 …… 7

第Ⅲ章　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群の調査成果（70・71・79号墓）
　第１節　調査の経過 …… 9
　第２節　調査の概要 …… 9
　　1. 基本層序 …… 10
　　2. 遺構 …… 11
　　3. 遺物 …… 27

第Ⅳ章　喜友名山川原丘陵古墓群の調査成果（２・３・４・５号墓）
　第１節　調査の経過 …… 45
　第２節　調査の概要 …… 45
　　1. 基本層序 …… 45
　　2. 遺構 …… 46
　　3. 遺物 …… 58

第Ⅴ章　結語 …… 79

引用・参考文献 …… 80
報告書抄録

巻頭図版

巻頭図版１　報告書所収調査位置
巻頭図版２　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群 調査区遠景
巻頭図版３　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群 70 号墓検出状況
巻頭図版４　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群 71 号墓仮墓検出状況
巻頭図版５　喜友名山川原丘陵古墓群 調査区遠景
巻頭図版６　喜友名山川原丘陵古墓群 調査風景
巻頭図版７　喜友名山川原丘陵古墓群 ドローン撮影

挿図目次

第Ⅱ－１図　宜野湾市の位置 …… 3
第Ⅱ－２図　宜野湾市の地質図 …… 4
第Ⅱ－３図　宜野湾市地形分布図 …… 5
第Ⅱ－４図　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群・喜友名山川原丘陵古墓群の位置と周辺の文化財 6
第Ⅱ－５図　昭和 20 年航空写真 …… 7
第Ⅱ－６図　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群・喜友名山川原丘陵古墓群の位置と周辺の文化財 8
第Ⅲ－１図　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群 昭和 20 年航空写真 …… 9
第Ⅲ－２図　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群 古墓配置図 12
第Ⅲ－３図　70 号墓 平面図 …… 13
第Ⅲ－４図　70 号墓 …… 14
第Ⅲ－５図　71 号墓 平面図 …… 15
第Ⅲ－６図　71 号墓 …… 16
第Ⅲ－７図　79 号墓 平面図 …… 17
第Ⅲ－８図　79 号墓 縦断・横断トレンチ壁面図 …… 18
第Ⅲ－９図　79 号墓 …… 19
第Ⅲ-10 図　70 号墓 厨子（蔵骨器：身） …… 31
第Ⅲ-11 図　70 号墓 厨子（蔵骨器：身） …… 32
第Ⅲ-12 図　70 号墓 厨子（蔵骨器：身） …… 33
第Ⅲ-13 図　70 号墓 厨子（蔵骨器：蓋） …… 35
第Ⅲ-14 図　79 号墓 石厨子（蔵骨器：身） …… 37
第Ⅲ-15 図　79 号墓 石厨子（蔵骨器：身） …… 39
第Ⅲ-16 図　79 号墓 厨子（蔵骨器：身・蓋） …… 41
第Ⅲ-17 図　70 号墓 瓦 ⑴・磚 ⑵ / 71 号墓 本土産磁器 ⑶　43
第Ⅳ－１図　喜友名山川原丘陵古墓群 昭和 20 年航空写真　45
第Ⅳ－２図　喜友名山川原丘陵古墓群 古墓配置図 …… 47
第Ⅳ－３図　２号墓 …… 48
第Ⅳ－４図　３号墓 …… 49
第Ⅳ－５図　４号墓 …… 50
第Ⅳ－６図　５号墓 …… 51
第Ⅳ－７図　２号墓 厨子（蔵骨器：身・蓋） …… 62
第Ⅳ－８図　２号墓 厨子（蔵骨器：身・蓋） …… 63
第Ⅳ－９図　３号墓 厨子（蔵骨器：身・蓋） …… 65
第Ⅳ-10 図　３号墓 厨子（蔵骨器：身） …… 66
第Ⅳ-11 図　４号墓 厨子（蔵骨器：身・蓋） …… 68
第Ⅳ-12 図　４号墓 厨子（蔵骨器：身・蓋） …… 69
第Ⅳ-13 図　４号墓 厨子（蔵骨器：身・蓋） …… 70
第Ⅳ-14 図　５号墓 厨子（蔵骨器：身・蓋） …… 72
第Ⅳ-15 図　２号墓 簪（ジーファー） …… 74
第Ⅳ-16 図　４号墓 簪（ジーファー）（４～６）・煙管（キセル）（7）・金属製品（8） …… 76

図版目次

図版Ⅱ－１　喜友名の石獅子 …… 8
図版Ⅱ－２　喜友名泉 …… 8
図版Ⅲ－１　70 号墓－１ …… 20
図版Ⅲ－２　70 号墓－２ …… 21
図版Ⅲ－３　70 号墓－３ …… 22
図版Ⅲ－４　71 号墓－１ …… 23
図版Ⅲ－５　71 号墓－２ …… 24
図版Ⅲ－６　79 号墓－１ …… 25
図版Ⅲ－７　79 号墓－２ …… 26
図版Ⅲ－８　銘書 …… 27
図版Ⅲ－９　70 号墓 厨子（蔵骨器：身） …… 34
図版Ⅲ-10　70 号墓 厨子（蔵骨器：蓋） …… 36
図版Ⅲ-11　79 号墓 石厨子（蔵骨器：身） …… 38
図版Ⅲ-12　79 号墓 石厨子（蔵骨器：身） …… 40
図版Ⅲ-13　79 号墓 厨子（蔵骨器：身・蓋） …… 42
図版Ⅲ-14　70 号墓 瓦 ⑴・磚 ⑵・煙管（キセル）（4）/ 71 号墓 本土産磁器 ⑶ /79 号墓 金属製品 ⑸ …… 44
図版Ⅳ－１　４号墓・５号墓 半裁作業状況 …… 46
図版Ⅳ－２　２号墓 検出状況 …… 52
図版Ⅳ－３　３号墓 検出状況 …… 52
図版Ⅳ－４　４号墓 検出状況 …… 53
図版Ⅳ－５　５号墓 検出状況 …… 53
図版Ⅳ－６　２号墓 …… 54
図版Ⅳ－７　３号墓 …… 55
図版Ⅳ－８　４号墓 …… 56
図版Ⅳ－９　５号墓 …… 57
図版Ⅳ-10　２号墓 厨子（蔵骨器：身・蓋） …… 64
図版Ⅳ-11　３号墓 厨子（蔵骨器：身・蓋） …… 67
図版Ⅳ-12　４号墓 厨子（蔵骨器：身・蓋） …… 71
図版Ⅳ-13　５号墓 厨子（蔵骨器：身・蓋） …… 73
図版Ⅳ-14　２号墓 簪（ジーファー） …… 75
図版Ⅳ-15　４号墓 簪（ジーファー）（４～６）・煙管（キセル）（7）・金属製品（8） …… 77
図版Ⅳ-16　５号墓　指輪 …… 78

挿表目次

表Ⅲ－１表　遺構観察表 …… 11
表Ⅲ－２表　厨子観察表－１ …… 28
表Ⅲ－３表　厨子観察表－２ …… 29
表Ⅲ－４表　その他の遺物観察表 …… 29
第Ⅲ－５表　遺物集計表 …… 30
第Ⅳ－１表　遺構観察表 …… 46
第Ⅳ－２表　厨子観察表－１ …… 59
第Ⅳ－３表　厨子観察表－２ …… 60
第Ⅳ－４表　その他の遺物観察表 …… 61
第Ⅳ－５表　遺物集計表 …… 61

第Ⅰ章　事業概要

第１節　調査に至る経緯

西普天間住宅地区土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査は、西普天間住宅地区において不時発見された古墓７基について緊急発掘調査を行ったものである。

古墓は平成 29 年度に行われた沖縄防衛局による支障除去で不時発見されたものであり、宜野湾市教育委員会文化課が確認したところ、周知の遺跡である「喜友名山川原丘陵古墓群」に４基、「安仁屋・新城イシジャー流域古墓群」の隣接地に３基が所在していることがわかり、また複数の古墓に厨子等が安置されていることが確認された。これらの結果に基づき、市教育委員会は、沖縄防衛局に対し、掘削の中止と現状保護を依頼するとともに、古墓が発見された区域を開発予定であった宜野湾市建設部市街地整備課に対して、文化財保護法に基づく埋蔵文化財の取扱い及び発掘調査の必要性を説明し、法定された所定の手続きを伝えた。その後、市建設部市街地整備課と協議し、令和元（平成 31）年度に古墓７基の発掘調査を実施した。

また、古墓内の人骨については協議の結果、市建設部市街地整備課によって手続きを経たのちに、改葬が行われることとなった。

第２節　調査体制

西普天間住宅地区土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査は令和元（平成 31）年度に実施し、資料整理及び報告書作成に係る整理業務は令和２、３年度に実施した。その調査体制は下記の通りである。

事業主体	沖縄県宜野湾市教育委員会		
事業責任者	教育長		知念　春美（令和元～３年度）
	〃		仲村　宗男（令和４年度）
事業総括	教育部	教育部長	比嘉　　透（令和元年度）
	〃	〃	嘉手納貴子（令和２～４年度）
	〃	教育次長	真志喜若子（令和元～３年度）
	〃	〃	宮城　葉子（令和４年度）
	文化課	文化課長	比嘉　　洋（令和元～２年度）
	〃	〃	津波古良幸（令和３年度）
	〃	〃	浜里　吉彦（令和４年度）
事業事務	〃	文化財保護係長	仲地　真俊（令和元～２年度）
	〃	〃	長濱　健起（令和２年度）
	〃	〃	比嘉　高志（令和３～４年度）
	〃	文化財保護係担当主査	長濱　健起（令和元～３年度）
	〃	〃	伊藤　　圭（令和４年度）
	〃	文化財保護係主任主事	仲村　　毅（令和元～４年度）
	〃	〃	森永　穣英（令和４年度）
	〃	〃	田中　　梓（令和元～３年度）
	〃	〃	金城　りお（令和元～４年度）

事業事務	〃	文化財保護係主事	末吉　飛鳥（令和２～４年度）
	〃	臨時職員	前里　謙伍（令和元年度）
	〃	会計年度職員	前里　謙伍（令和３年度）
調査業務	〃	文化財保護係長	仲地　真俊（令和元年度）
調査業務	〃	文化財保護係主任主事	金城　りお（令和元年度）
資料整理業務	〃	文化財保護係長	仲地　真俊（令和２年度）
	〃	〃	長濱　健起（令和２年度）
	〃	〃	比嘉　高志（令和３年度）
	〃	文化財保護係主任主事	金城　りお（令和２～３年度）

委託業務

令和元年度　発掘調査支援業務委託　㈱アーキジオ　パシフィック支店

令和２年度　出土資料整理業務委託　㈱島田組　宜野湾営業所

第Ⅱ章　位置と環境

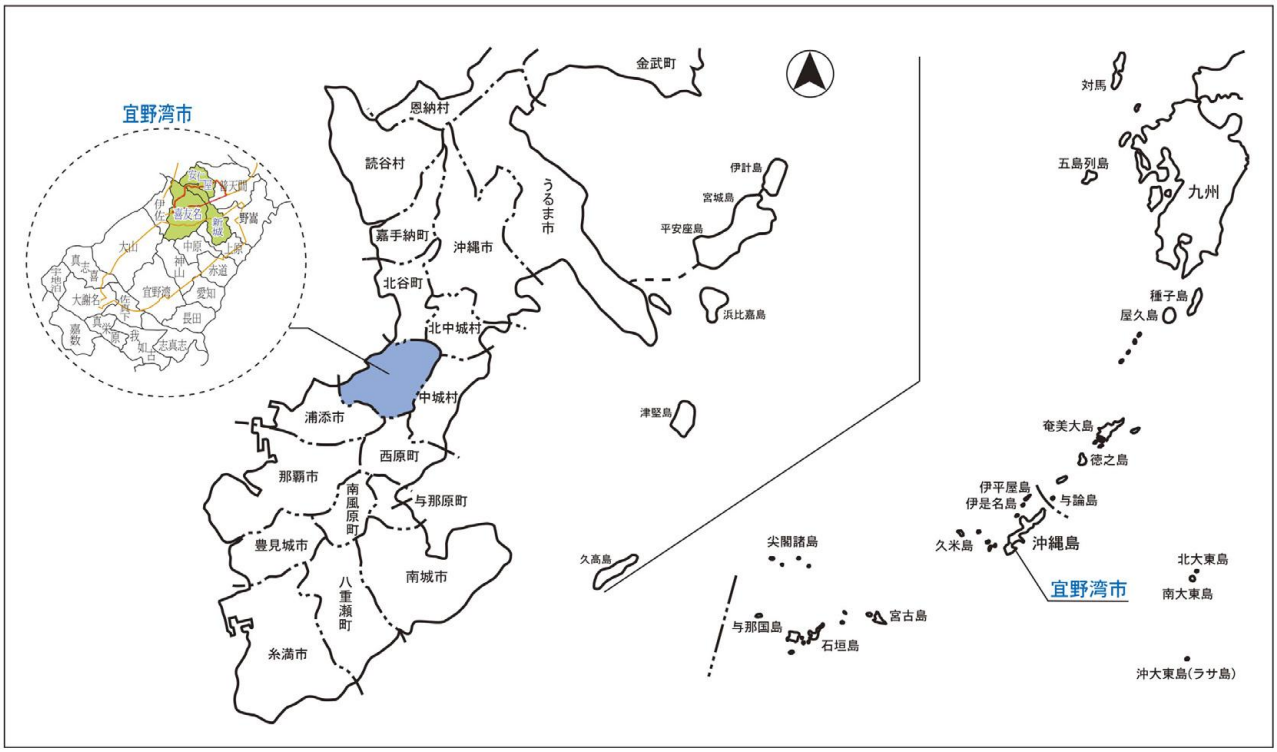
第１節　地理的環境

宜野湾市は、沖縄本島の中部西海岸にあって、東シナ海に面し、北は北谷町、北東は北中城村、東は中城村、東南には西原町、南は浦添市が隣接する。市域の総面積は、約 19.8 ㎢で、市域北西にはキャンプ瑞慶覧、中央には普天間飛行場基地が占有し、米軍基地の面積は市面積の 29.4%を占めている（2020 年３月時点）。市域には沖縄本島を縦断する国道 58 号や 330 号が通り、市域を横断する道路は沖縄自動車道北中城 IC・西原 IC へのアクセス道路としても利用され本島北部、中部と南部地域を繋ぐ交通の要となっている。

本市の主な地質は琉球石灰岩で、土壌はクチャと呼ばれる島尻層群を基盤としている。不透水層の島尻層の上に不整合に琉球石灰岩が覆っており、その境界を地下水が流れ湧泉として湧き出している。また、東シナ海に面した海岸低地である西側は、砂層である沖積層から成り、内陸部の丘陵地では島尻層群が風化してできたジャーガル土壌や台地上には島尻マージと呼ばれる土壌が広く分布している。

地形をみると、西側の海岸から東側の内陸に向かって雛壇状の海岸段丘から成り、市域の段丘は中位段丘（約 20 万年前に形成）と低位段丘（約 12 万年前に形成）に大別され、それぞれに下位面と上位面に区別する４つの段丘面を有している（宜野湾市市史編集委員会編 2000）。低位段丘下位面（第１面）は、比屋良川河口から宇地泊、真志喜、大山、伊佐に連なる標高３～ 30 mの海岸低地である。低位上位面（第２面）は、国道 58 号周辺と普天間基地に挟まれた標高 30 ～ 40 mの石灰岩段丘で、中位段丘下位面（第３面）は、国道 330 号周辺からなる標高 90 m以上の高地となる。

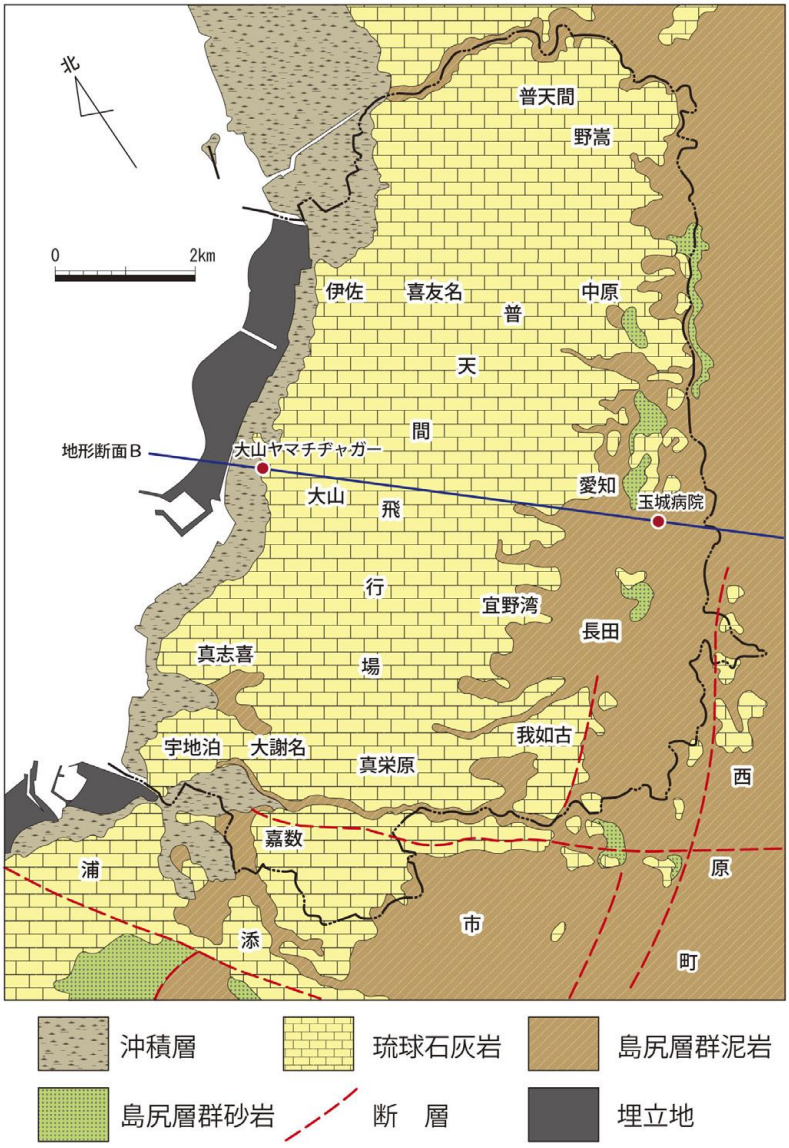
また、市内には 133 か所の洞穴があり、県内でも有数の洞穴地帯といえる。このような洞穴は石灰岩が雨などの影響を受けて作り上げた「カルスト地形」の一つである。市内では鍾乳洞、ドリーネ、ウバーレなどのカルスト地形が作りだす自然が多くみられる。また、東側の中位段丘面で降った雨水は、地下水として



第Ⅱ - １図　宜野湾市の位置

流れながらカルスト地形を作り出し、西側の低位段丘面で琉球石灰岩と島尻層群の境界から湧水として流れ出している。その量は豊富で、戦前の西海岸一帯には湧水を利用した水田が広がっていた。

西普天間住宅地区の所在する地域は、字普天間、字安仁屋、字新城、字喜友名の４つの地区にまたがっており、県道 80 号線に面した中位段丘の縁辺部（標高 60m 前後）から、海岸低地（標高 10m 前後）へと至る斜面地となっている。特に喜友名グスクの所在する西側の縁辺部分は、急傾斜地となっており、基地接収後からほとんど開発等の影響を受けずに、戦前からの地形が良好に保存されている場所である。緑地帯北側の標高 14 ～ 16 m ラインには、不透水性の島尻層と透水性の琉球石灰岩との境があり、その不整合面からは地下水が湧き出し、多数の湧泉が形成されている。市の国指定文化財である喜友名泉もこれらの湧泉と同じ標高レベルに位置する湧泉であり、宜野湾市の自然地形・地質を象徴する場所といえる。



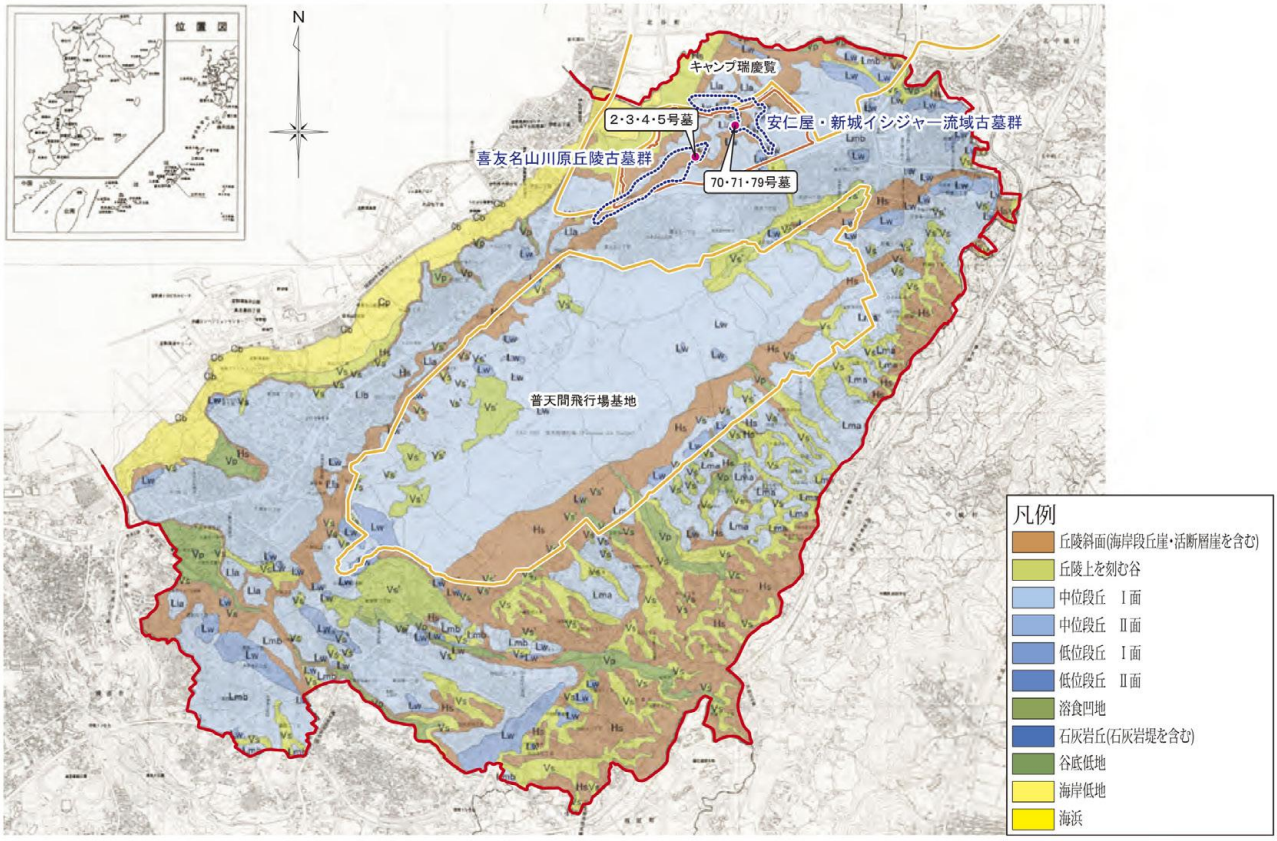
第Ⅱ－２図　宜野湾市の地質図

地区南東から北西側に伸びるイシジャーは、「河川渓谷状の地形を示し、一部流水も見られ、他の琉球石灰岩地域では見られない、珍しい地形」（宜野湾市教育委員会 2015）であり、地形形成について学術上貴重な地形とされている。特に中流域は両岸が高さ 10 ～ 14 m程の琉球石灰岩の切り立った崖となっており、両崖面には、多数の小洞窟やそれらを利用した掘込墓がある。これらの存在からイシジャーの形成は、「かつて鍾乳洞の天井が崩れてできたドリーネの可能性が示唆され、河床部の岩塊は落盤した天井部の岩盤の可能性がある」（宜野湾市教育委員会 2015）。

イシジャーを除く地区中央から東側一体は、戦前から近隣集落の田畑として利用されていた場所であるが、基地接収後に米軍の住宅地として大規模な造成工事によって地形改変がなされている。

第２節　歴史的環境

沖縄諸島に人々が住み始めたのは今から３万年程前に遡り、旧石器時代と呼称される時代で宜野湾市においても大山洞穴から「大山洞人」と称される 20 歳前後の男性の下顎骨が発見されている（高宮ほか 1975、鈴木 1975）。また、普天満宮洞穴遺跡等では、リュウキュウムカシキョン等のシカ類の化石が多数発見され



第Ⅱ－３図　宜野湾市地形分布図

ている（宜野湾市教育委員会 1989）。

現在からおよそ 6000 ～ 7000 年前から 1000 ～ 800 年前までの数千年に及ぶ時代を沖縄貝塚時代と称する狩猟・採集の時代となる。沖縄貝塚時代は、遺跡の立地・出土遺物等の違いから早期・前期・中期・後期に大別されている。前期は市域を含め、沖縄諸島域に当時の土器型式が広く分布していることから、定着的な集団により各地域に遺跡が形成される時期と考えられる。貝塚時代中期は、拠点的な大規模集落が平地に展開し、小規模遺跡がその周縁に点在しており市域では、西側琉球石灰岩地帯で顕著にみられる。後期には、前述の西側琉球石灰岩地帯に加えて、海岸低地の砂地にも居住域が拡散しており、その規模も一律的に大きくなっていくようである（宜野湾市教育委員会 1989）。

12 世紀から 15 世紀に及ぶグスク時代は、沖縄において初めて農耕を基礎とする社会が形成・発達した時期である。市域のグスク時代の遺跡は、迫地や河川流域の谷底低地を控える平地・丘陵斜面・段丘縁の高所に立地しており、市域の伝統的集落である近世の“村”の形態がこの時期に形成され始める。生産的農耕社会を基盤とした社会が展開されていく中で、農耕の基盤である土地・その生産を支える道具の入手や制作・同時期に展開された日本や中国・朝鮮・東アジア地域との交易などを通して各地域の集団は共同化したと考えられ、その中から“按司”と称される在地支配者層が出現する。

按司を中心とした各地域の集団は、相互に抗争を繰り返しながら次第に淘汰され、14 世紀ごろには、中山・山北・南山の３つの小国家が成立する。市の真志喜区に所在する県指定文化財の森の川には、中山の王として 1372 年に明朝に朝貢した「察度」の出自が記された石碑が残されている。その後 1429 年には尚巴志が三山を統一し、琉球王国誕生へと至る。グスク時代から第二尚氏王朝前期の 1609 年島津侵入までを歴史学では古琉球と称し、中世に相当する。

琉球王国は島津の支配を受けながらも王国としての体裁は保ちつつ、中国（明・清）との交易を行ってい

た。近世琉球と称される時代である。市域の集落は、碁盤型の集落と屋取集落が存在していた。この集落形態は、近世に開始され、耕作地を増やすために小規模に転々と存在した集落を一箇所に集め、平地を田畑へと開墾していった。さらに18世紀以降、首里や那覇の士族の移住により屋取集落が形成されていった。

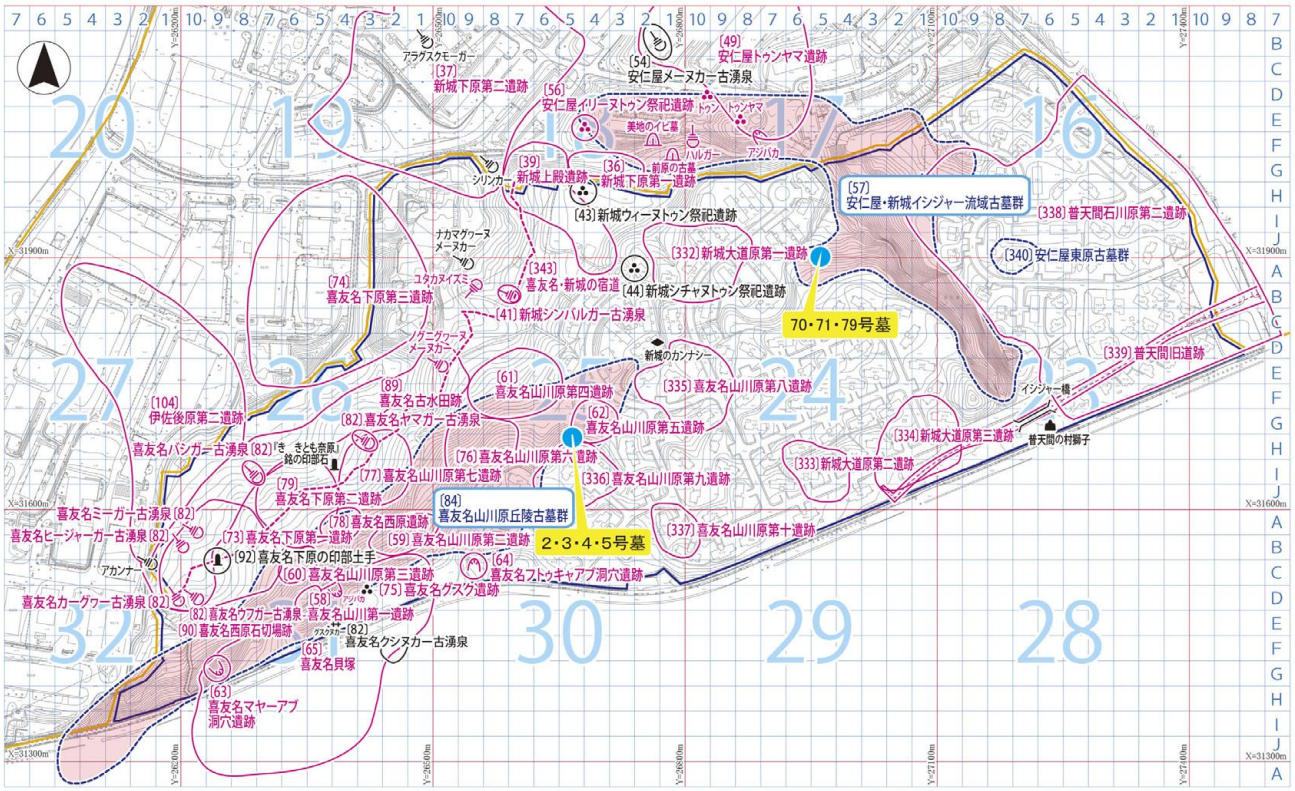
近代以降は、1872（明治5）年に琉球藩、1879（明治12）年には沖縄県の設置が強行され、1881（明治14）年6月には中頭一帯を管轄する中頭役所が宜野湾間切番所内に併設された（宜野湾市史編集委員会編1985）。その後、中頭郡教育事務所、中頭郡組合農事試験場などの官公署が相次いで設置されたことにより市域は本島中部地域の政治・経済・教育の中心となった。1902（明治35）年には首里から普天間に至る普天間街道、1992（大正11）年には県営鉄道嘉手納線（軽便鉄道）が開通した。1908（明治41）年の「沖縄県及び島嶼町村制」施行により従来により従来の間切は町・村に、村は字に改められ、宜野湾間切は宜野湾村となった。

1945（昭和20）年4月1日、中部西海岸に上陸した米軍に対する日本軍の前線基地として、本市域も壊滅的な打撃を被り、さらには戦後の軍用地接収と度重なる基地造成によって市域の景観は大きく変貌することとなった。他地域に比べ僅かに焼失を免れた野嵩地区が住民の収容所の一つとなった。その後、1946（昭和21）年9月以降、故地ないしはその近傍に帰住が許可され、社会基盤の復活が果たされると米軍基地関連産業の活況により市域の人口も急増した。1962（昭和37）年7月1日には市に昇格した。

第3節　位置と環境

1. 安仁屋

安仁屋は方言でアンナと呼ばれ、宜野湾村の北部、北谷村と接する低地にあった集落である。古くは北谷間切の集落であり、1671（康熙10）年に浦添・中城・北谷の3間切の一部を分割して宜野湾間切りが誕生する際に、北谷間切から分割された。



第Ⅱ－4図　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群・喜友名山川原丘陵古墓群の位置と周辺の文化財

隣接している新城とは集落が近かったが、２つの集落の間にある岩が「アンナグヮークンケーラシ、アラグスクグヮークンタバリ」（安仁屋をひっくり返せ、新城をしばりつけろ）と叫んだため、安仁屋は下（北側）にさがり、新城は現在の普天間飛行場のあたりに移動したという言い伝えがある。

安仁屋の自然環境は沖積低地に立地しており、集落の北側と南側をアンナガーラ（安仁屋川）とイシジャーという２つの川に挟まれ、集落東側の石灰岩台地に浸透した雨水が湧き出す湧水群があり、水が豊富という特徴がある。北谷城から喜友名に至る西海岸に面した沖積低地は北谷ターブックヮと呼ばれ、一面に田んぼが広がっており、その南側に安仁屋は位置していた。

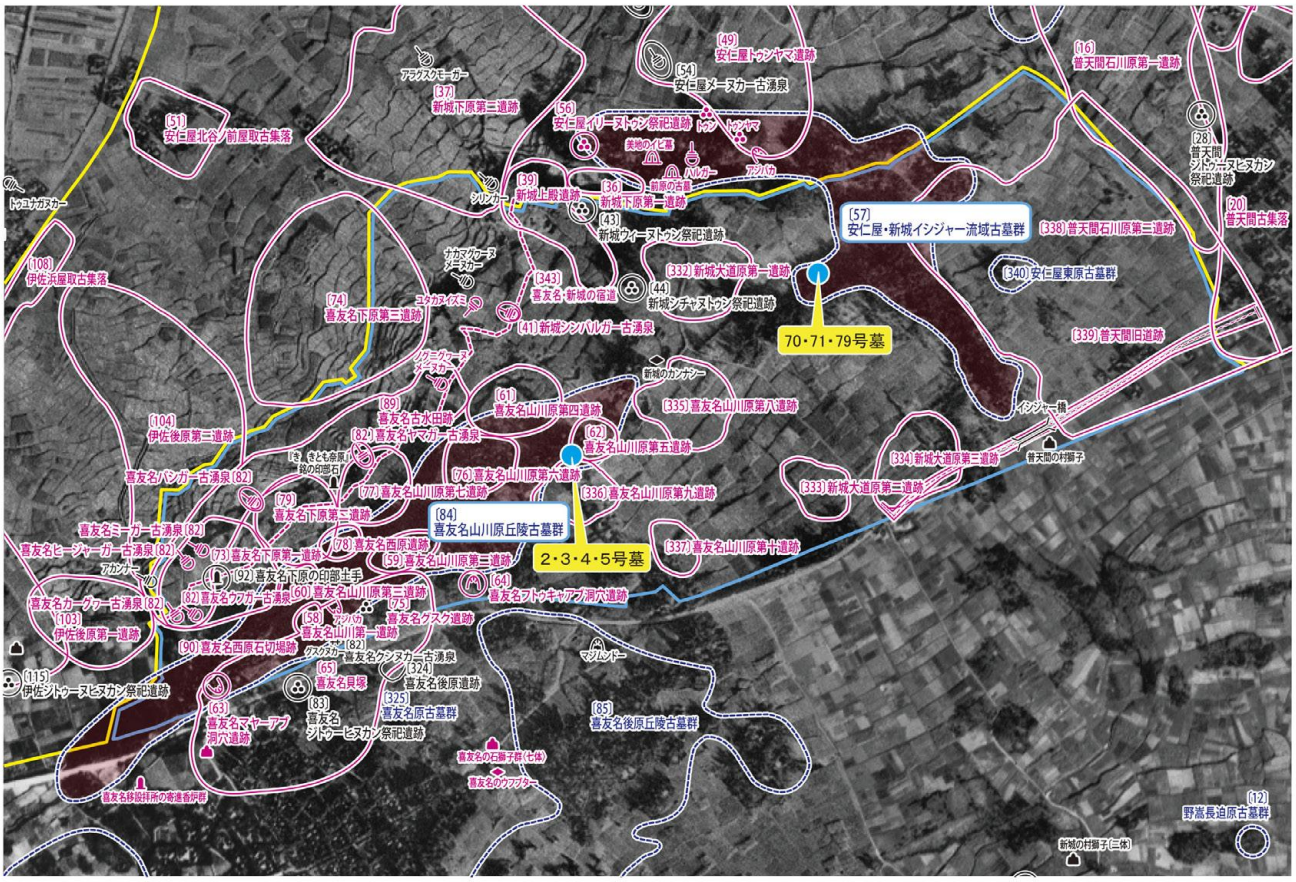
戦後は集落すべてを基地に接収されており、基地を作る際に集落は敷きならされてしまったが、安仁屋トゥンヤマやメーヌカー（前の泉）などの地域の拝所や湧水が今も基地の中に残っている。

今回発掘調査を行った安仁屋・新城イシジャー流域古墓群は安仁屋と新城にまたがるイシジャーと呼ばれる川沿いに構築された古墓の一つである。古手の墓は川の両岸の斜面に沿って構築されており、横穴を掘って石積みで閉じただけの簡素な掘込墓が主体である。斜面の上部に行くにつれ、亀甲墓が増えていく。調査地は川沿いからは大きくそれた斜面の上部に位置し、古墓群の端のほうにあたる。

1964（昭和 39）年の行政区再編で行政区としての安仁屋は消滅した。一方で 1963（昭和 38）年には安仁屋郷友会を結成しており、地域の文化・交流を途絶えさせないよう現在も活動を行っている。

２. 喜友名

喜友名は方言でチュンナーと呼ばれる。宜野湾市の北側に位置し、キャンプ瑞慶覧と普天間飛行場に挟まれた地域である。集落は丘陵上に位置し、眼下には北谷町の街並みや西海岸が見渡せる風光明媚な地域でもある。現在は県道 81 号線と普天間飛行場との間に住宅地が広がっている。



第Ⅱ - ５図　昭和 20 年航空写真

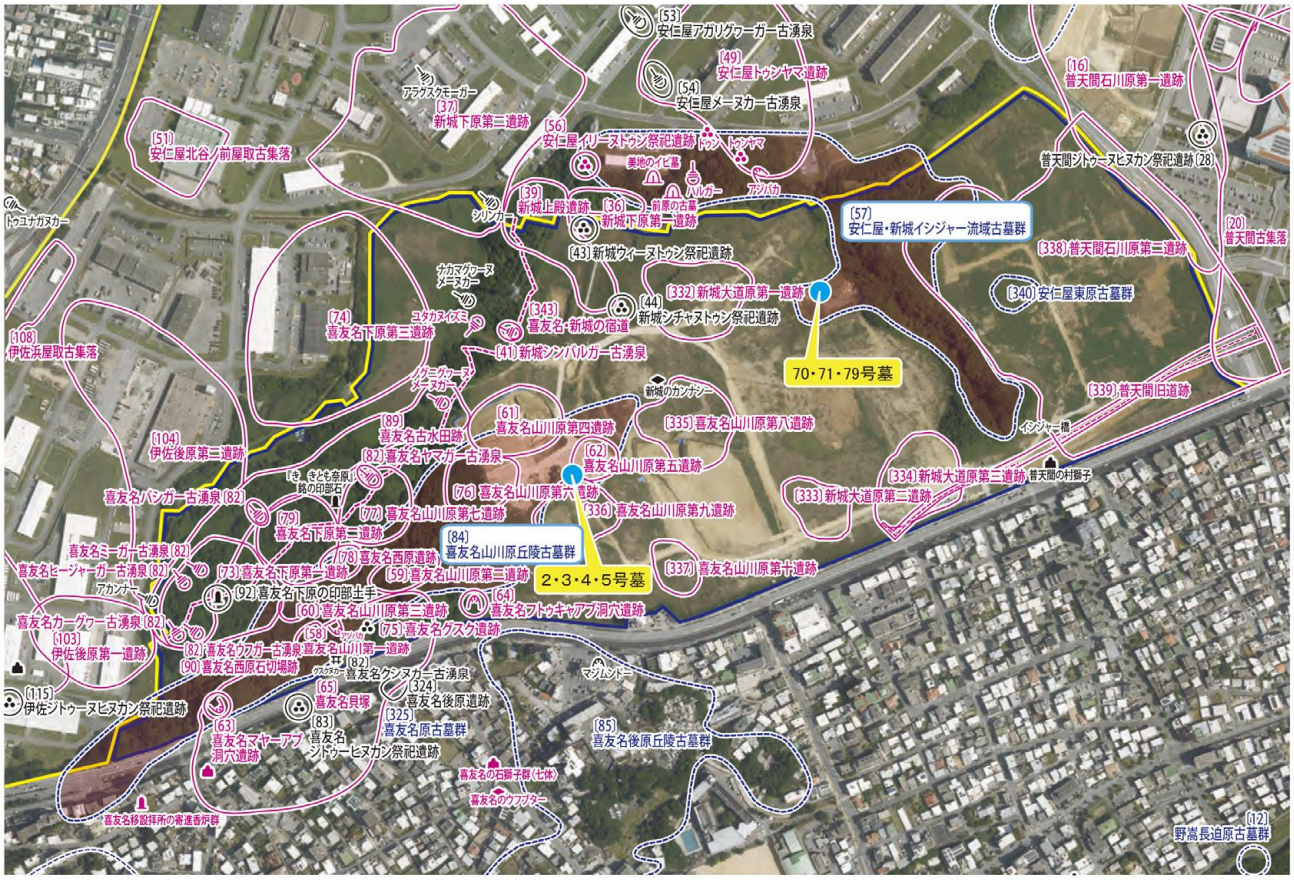
喜友名の地形は北側の沖積低地と南側の石灰岩台地の高台からなり、台地の麓沿いには豊富な湧水が湧き出している。戦前の喜友名は集落の北側では豊富な湧水を利用した水田、集落の南側ではサトウキビ畑があった。しかし、水は豊富な一方で利用しにくく、北側の湧水から斜面を往復して集落までの水汲みは重労働だったという。

また、集落の北側、高台の縁辺部には喜友名グスクが所在しており、北谷町にある北谷グスクと抗争したとい言い伝えが残っている。戦前には拝所もあったが現在は合祀されている。発掘調査を行った喜友名山川原丘陵古墓群は、グスクがある高台の縁辺部下の斜面一帯に位置している。

戦後の喜友名地域は集落以外がほとんど基地に接収されたが、集落は基地接収を免れ、現在も喜友名区の住宅地中央部には旧集落の屋敷や道路の区画が残っており、集落を囲むように配置されたフーチゲーシ（邪気反し）の７体の石獅子群が、市指定有形民俗文化財とされている。また、西普天間住宅地区返還跡地内にあるチュンナーガー（喜友名泉）は国指定重要文化財（建造物）に指定されている。

図版Ⅱ－１　喜友名の石獅子

図版Ⅱ－２　喜友名泉



第Ⅱ－６図　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群・喜友名山川原丘陵古墓群の位置と周辺の文化財

第Ⅲ章　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群の調査成果（70･71･79 号墓）

第１節　調査の経過

当遺跡の本発掘調査は、西普天間住宅地区土地区画整理事業予定地に含まれる古墓を対象とし、令和元年９月９日より着手した。調査の対象となったのは平成 26 年度の分布調査で確認した 70 号墓・71 号墓と、平成 29 年度の沖縄防衛局による支障除去作業で不時発見された 79 号墓（調査時は１号墓と仮称）の計３基である。いずれも、持ち主が不明であったため、平成 30 年度に官報にて墓地公告を掲載後に調査を実施した。

初めに、70 号墓と 71 号墓は全体の３分の１が土に埋もれた状態であったため、流れ込んだ土砂や米軍基地の造成土を取り除く作業を行った。その結果、70 号墓と 71 号墓に関しては墓庭の大部分が残存していることが確認され、71 号墓は仮墓も検出された。また、当初３基は未改葬と考えられていたが、墓室内を調査し 70 号墓・71 号墓は墓室内に厨子は確認されず、改葬済みとなっていることがわかった。79 号墓については未改葬墓であったが、不時発見されるまで米軍基地の造成で土中に埋もれており、平成 26 年度の分布調査でも確認されていなかった。その後、平成 29 年度の支障除去で破壊を受けたことで露出し不時発見に至ったが、基地造成などで幾度か破壊を受けたと見られ、墓室内の一部が残存するのみとなっている。

墓庭と墓室内の記録を取ったのち、墓庭と墓室内を横断するトレンチを入れて土層の確認を行い、令和元年 12 月 25 日に調査を完了した。

第Ⅲ - １図　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群 昭和 20 年航空写真

第２節　調査の概要

１. 層序

各古墓に墓庭や墓室等にトレンチをいれて層所を確認した。以下層序について概要を記す。

70 号墓トレンチ

Ⅰ層：墓造成土。Hue10YR4/4（褐色土層）しまりが悪く、粘質が強い。墓口の石を置く土台とした土、約 10 ㎝前後の石灰岩が入る。

Ⅱ層：旧表土。Hue10YR4/4（褐色土層）しまり悪く、粘質はほとんどない。約 5 ㎝前後の石灰岩が敷き詰められた層。腐植が見られるため、旧表土で植物が生えていたと考えらえる。

Ⅲ層：墓造成土。Hue10YR4/4（褐色土層）しまり悪く、粘質やや弱い。石灰岩よりも土が多い。5 ～ 10 ㎝の石灰岩が混じる。

Ⅳ層：墓造成土。Hue10YR4/4（褐色土層）石化岩が主体の層である。20 ㎝以上の大きい石灰岩と約 3 ～ 10 ㎝の石灰岩が見られる。

Ⅴ層：墓造成土。Hue10YR4/4（褐色土層）Ⅳ層と比較するとやや土が多くなる。約 5 ㎝の薄い石灰岩が多く入る。

Ⅵ層：墓造成土。Hue10YR4/6（褐色土層）。約 5cm 以下の細かい石灰岩が多く入る。

Ⅶ層：墓造成土。Hue10YR4/4（褐色土層）薄く扁平な石が多い。石灰岩は約 6 ～ 8 ㎝前後。石灰岩の間には隙間もある。

Ⅷ層：風化岩層。

71 号墓

Ⅰ層：腐植土層 Hue10YR4/4（褐色土層）。しまり悪く、粘質やや強い。アフリカマイマイ・ガラスや流れ込みの土、炭化した植物が混ざる。

Ⅱ層：造成土。Hue10YR5/6（黄褐色土層）。しまり悪く粘質やや弱い。墓の造成に伴う土か粘質の土と石灰岩を砕いたようなレキが混ざる。

Ⅲ層：造成土。Hue10YR5/6（黄褐色土層）。しまり悪く、粘質なし。石灰岩レキ約 10 ㎝前後が混ざる。Ⅱ層よりも石灰岩が多い。

Ⅳ層：地山。Hue10YR6/6（明褐色土層）。しまり良く、粘質強い。岩盤の隙間に溜まっている。

79 号墓

下層で石灰岩が見られるも、地山が確認できず石灰岩も転石の可能性がある。Ⅶ層以下は墓を造成するより以前の時代に自然に流れ込んだ土の堆積と見られる。

Ⅰ層：造成土。Hue10YR4/6（褐色土層）。約 5 ～ 10 ㎝の石灰岩レキが多く入る。シルト砂質。しまりやや弱く、粘質弱い。

Ⅱ層：造成土。Hue10YR4/6（褐色土層）。しまりやや弱く、粘質やや弱い。シルト砂質。少量の石灰岩粒（0.5 ㎝）を含む。

Ⅲ層：墓造成土。Hue10YR4/6（褐色土層）。しまり悪く、粘質なし。タナやシルヒラシを造った際の造成土と見られる。10 ㎝未満の石灰岩が多く入り、炭や焼土も 0.5 ㎝未満の大きさのものが多

く混ざる。砂も多く入る。

Ⅳ層：墓造成土。Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土層）。シルト砂質。しまりやや強く、粘質弱い。焼土（0.5㎝未満）が多く入る。Ⅴ層を巻きあげたと見られる土粒が混ざる。

Ⅴ層：墓造成土。Hue10YR4/6（褐色土層）。しまりやや弱く、粘質なし。シルト砂質。炭（0.5㎝未満）が少量混じる。タナを造った際の造成土と見られる。

Ⅵ層：墓造成土。Hue10YR5/6（黄褐色土層）。しまり悪く、Ⅰ～Ⅴ層よりやや粘質は強い。シルト砂質。5㎝未満の石灰岩が少し入る。炭（0.5㎝未満）は少量見られる。

Ⅶ層：流れ込みか。Hue10YR4/6（褐色土層）。しまりやや悪く、粘質やや強い。シルト砂質。0.5㎝未満の炭と焼土が入る。獣骨やローリングを受けた土器が見られる。

Ⅷ層：流れ込みか。Hue10YR5/6（黄褐色土層）。しまりやや悪く、粘質やや強い。シルト砂質。炭（1㎝前後）が入る。焼土はほとんどない。

Ⅸ層：Hue10YR4/6（褐色土層）。しまりやや悪く、粘質やや弱い。シルト砂質。石灰岩粒（0.1㎝）が少量。マージ粒（0.5㎝）が少量。土は固いが削るとほろほろしている。

Ⅹ層：Hue10YR5/6（黄褐色土層）。しまりやや悪く、粘質やや弱い。シルト砂質。炭が少量入る。削るとほろほろする。

Ⅺ層：流れ込みか。Hue10YR5/6（黄褐色土層）。しまりやや悪く、粘質やや弱い。混入物はほとんど見られない。

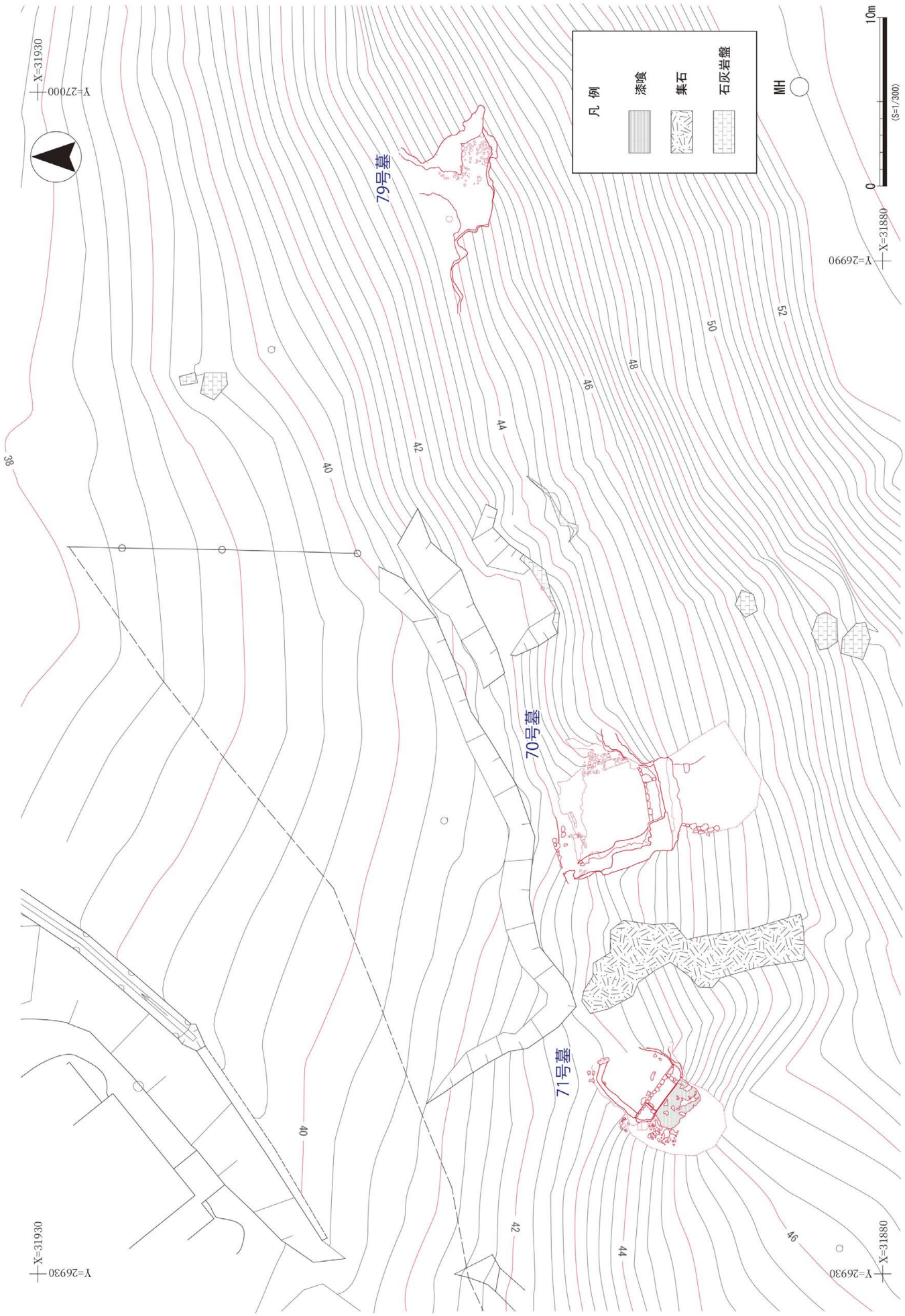
2.遺構

今回の調査で確認した古墓は3基であった。それぞれの墓の向きは北ないし北東方向の丘陵斜面にとなっている。墓室内はシルヒラシとコの字状のタナからなり、タナの高さや段数はそれぞれの墓で違っている。以下に詳細を報告する。

第Ⅲ-1表　遺構観察表

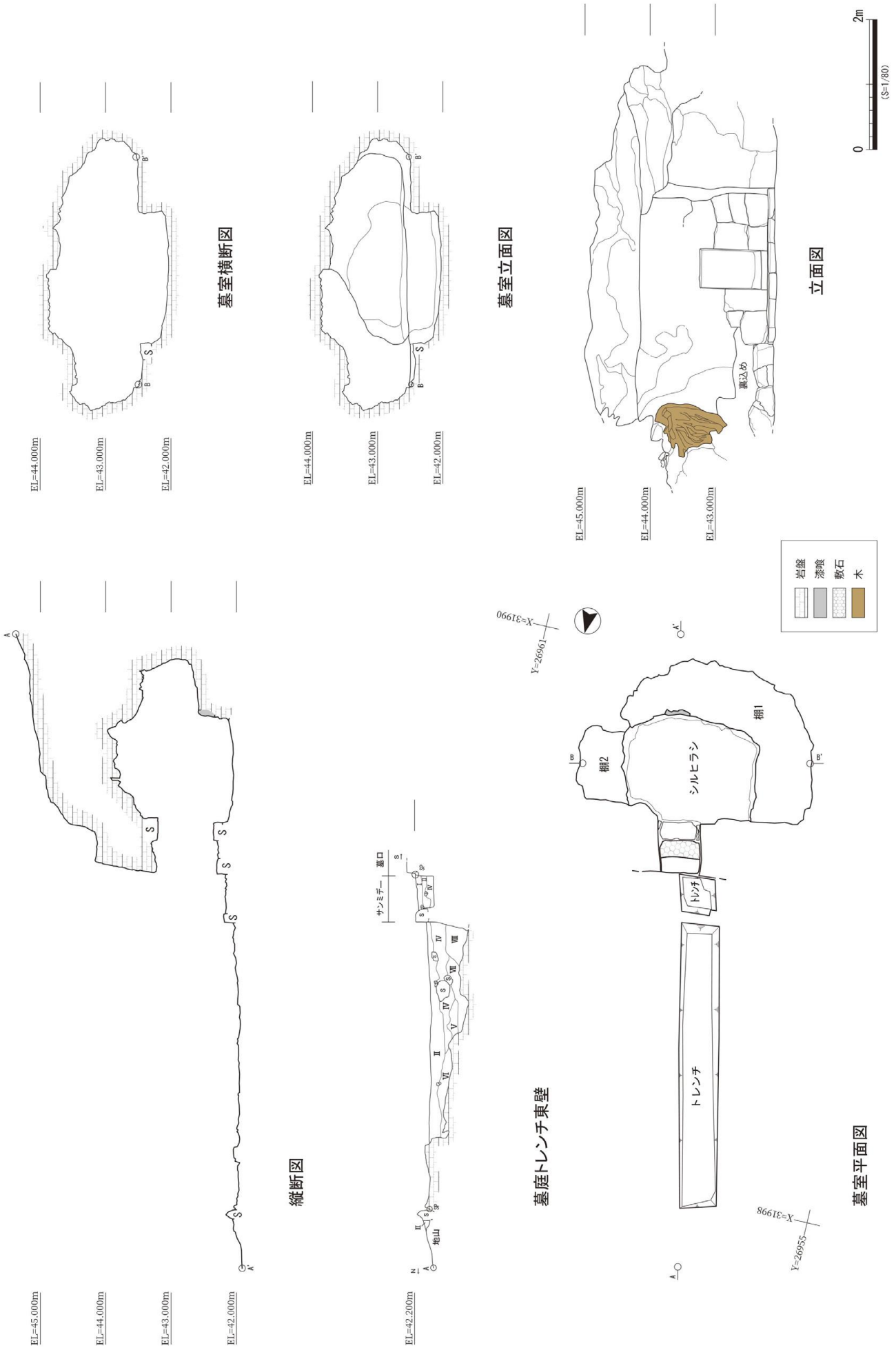
墓番号	墓口	墓室			観察事項
	法量（m）	法量（m）	厨子の有無	タナの有無	
70	高さ　約0.96 幅　約0.60 奥行　約0.80	高さ　約1.84 幅　約3.52 奥行　約2.40	無 ※破片は有	有	向きは北方向。コ状のタナと独立したタナで、コの字状のタナを作るが繋がってはいない。シルヒラシの位置は墓口より低くなっている。墓庭が残存し石灰岩レキを敷いて造成されている。
71	高さ　約0.88 幅　約0.64 奥行　約0.52	高さ　約1.76～2.08 幅　約2.40 奥行　約2.28	無	有	向きは北東方向。墓室内正面に3段のタナが配されており、1段目はコの字状にシルヒラシを囲むように設置されている。墓庭は米軍基地の造成で大きく破壊されているが、左右の袖は残存しており、右袖には仮墓も掘られている。
79※	高さ　－ 幅　－ 奥行　－	高さ　約1.26 幅　約3.60 奥行　－	有	有	向きは北方向。タナは正面に1段見られ、コの字状に配されている。タナは低く約20cmの高さである。自然の岩陰に石積を積んで墓室を形成しており、石積の背後には裏込めと見られる石灰岩レキが地表から天井まで敷き詰められている。

※調査時は1号墓とした。



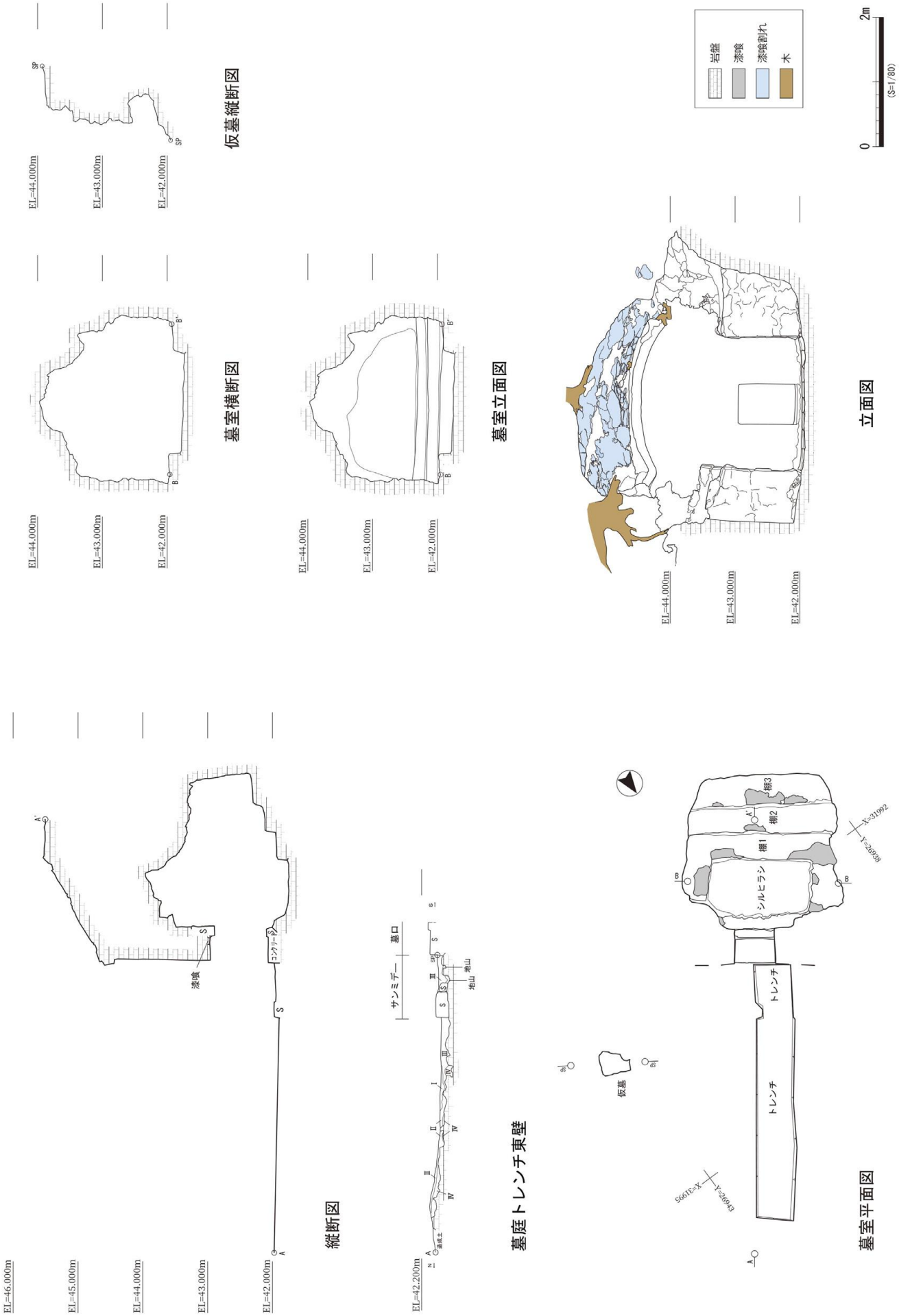
第Ⅲ - ２図　安仁屋・新城イシジャー流域古墓群 古墓配置図

第Ⅲ - 3図　70号墓　平面図

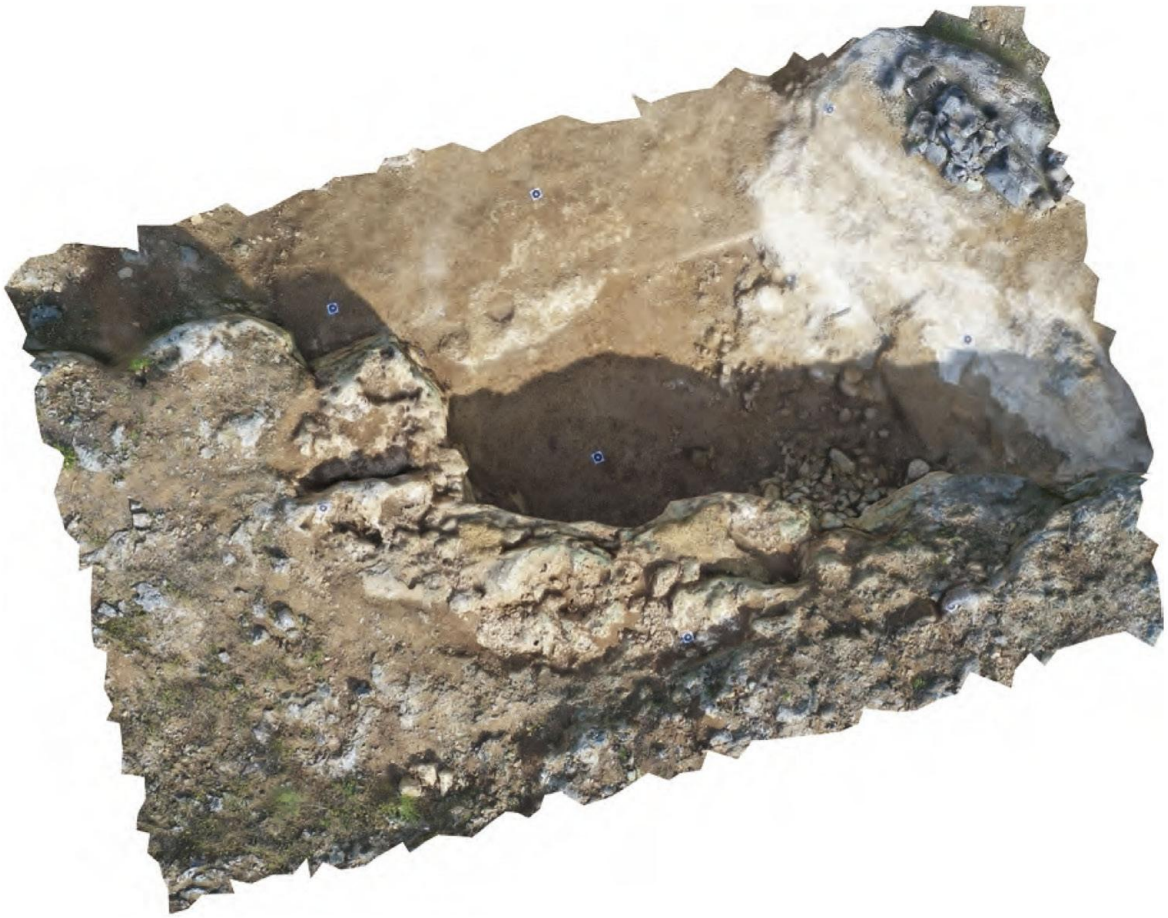

墓室横断図
墓室立面図
立面図
裏込め
岩盤
漆喰
敷石
木
縦断図
墓庭トレンチ東壁
墓室平面図
棚1
棚2
シルヒラシ
トレンチ
サンミチ
墓口
地山
EL=45.000m
EL=44.000m
EL=43.000m
EL=42.000m
EL=42.200m
X=31990
Y=26961
X=31998
Y=26955
0
2m
(S=1/80)

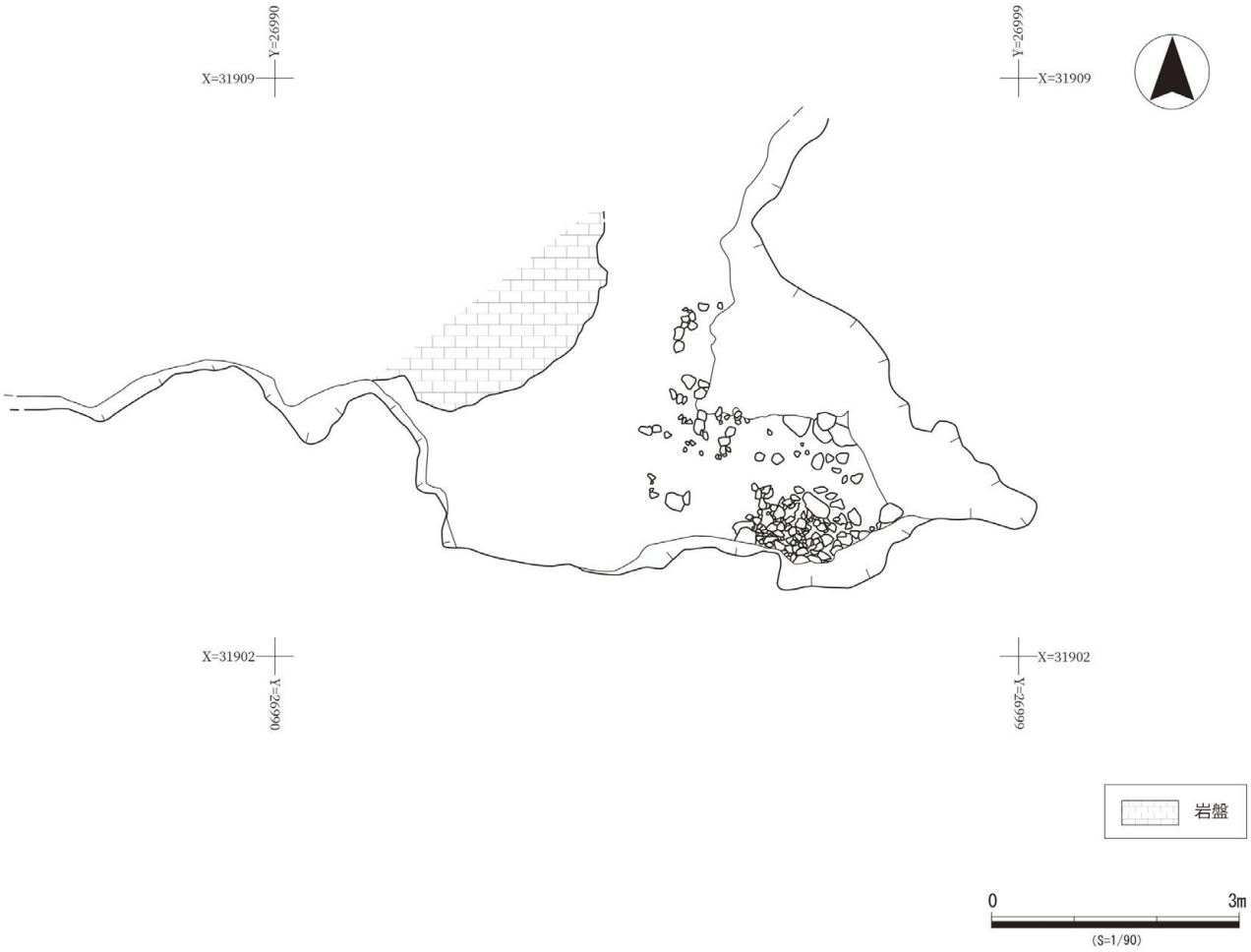
第Ⅲ - 4図　70号墓

第Ⅲ - ５図　71 号墓 平面図


仮墓縦断図
墓室横断図
墓室立面図
立面図
岩盤
漆喰
漆喰割れ
木
0
2m
(S=1/80)
EL=44.000m
EL=43.000m
EL=42.000m
縦断図
墓庭トレンチ東壁
墓室平面図
EL=46.000m
EL=45.000m
EL=44.000m
EL=43.000m
EL=42.000m
EL=42.200m
漆喰
コンクリート
サンミテー
墓口
地山
盛土
シルヒラシ
棚1
棚2
棚3
トレンチ
仮墓
X=31992
Y=26938
X=31995
Y=26943

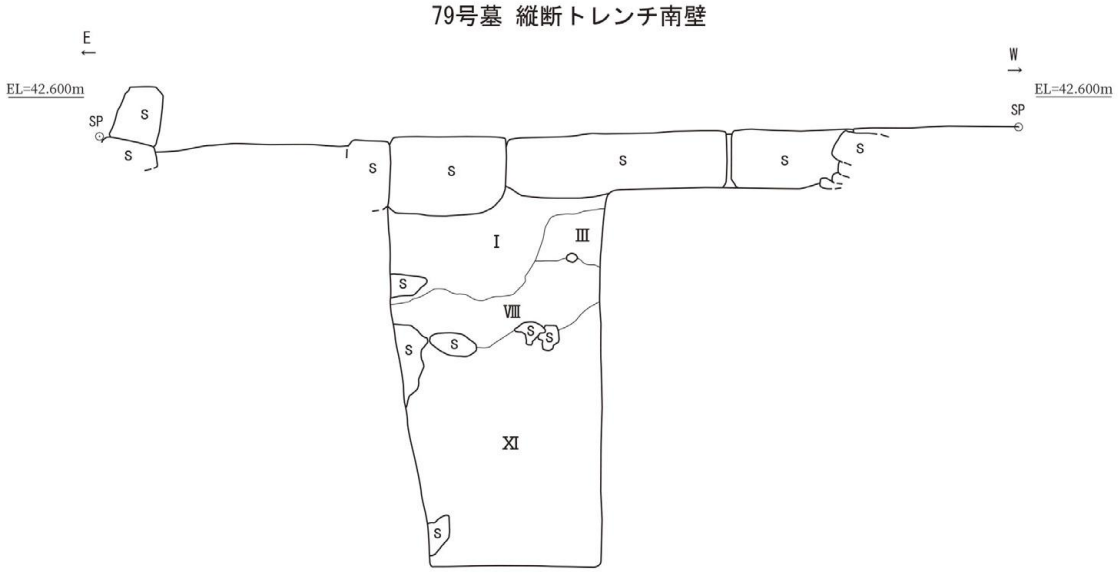
第Ⅲ - 6図　71号墓



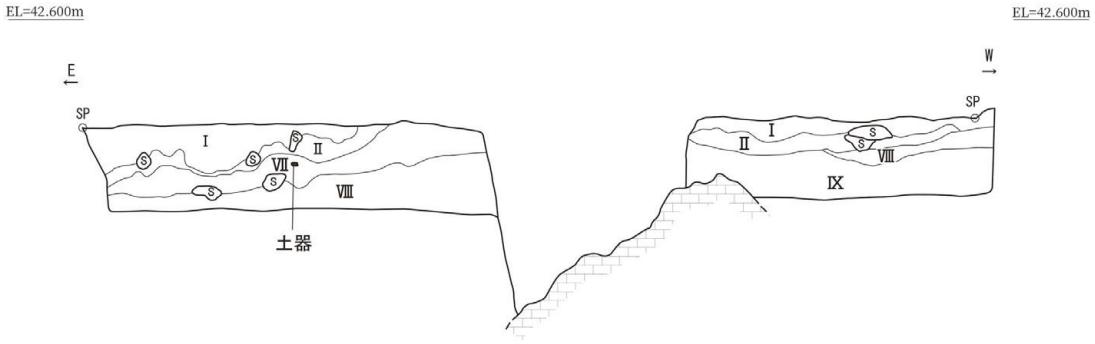


第Ⅲ - 7図　79号墓　平面図

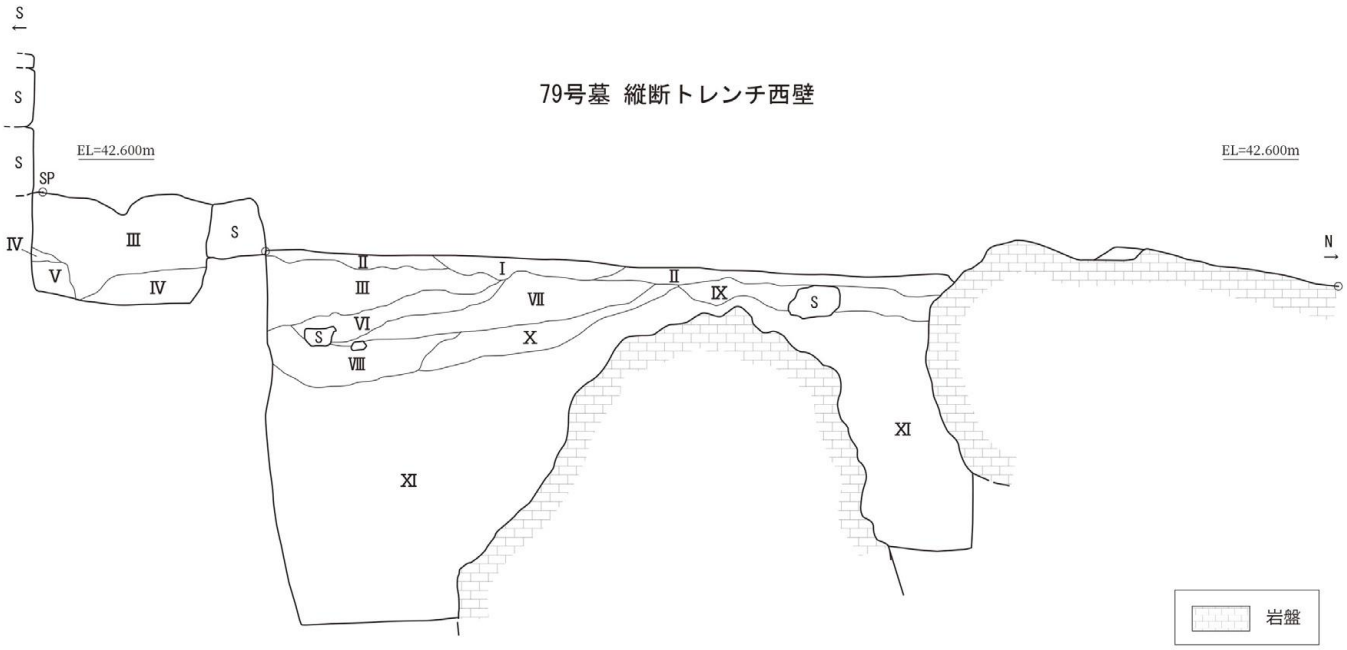
79号墓 縦断トレンチ南壁



79号墓 横断トレンチ南壁

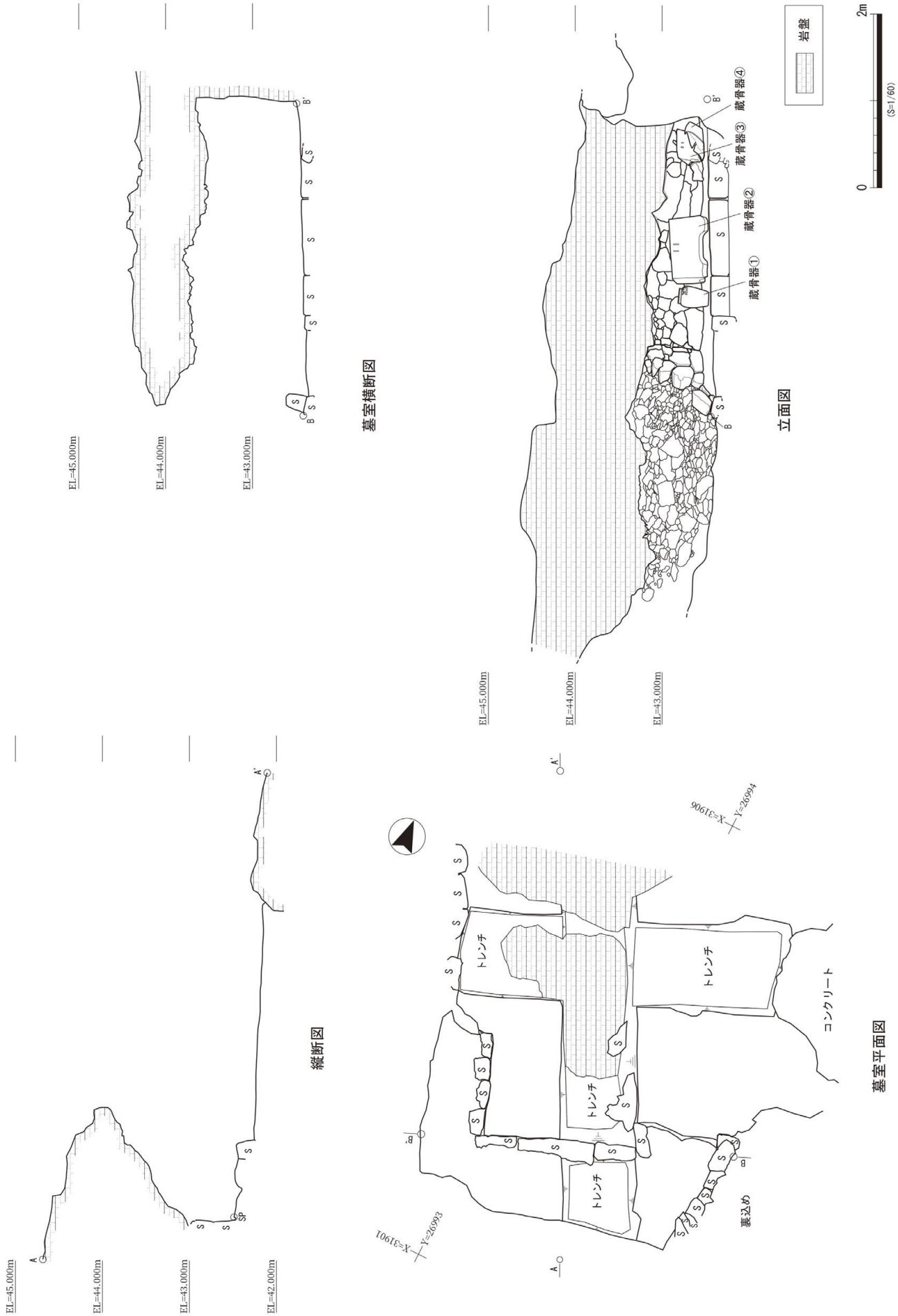


79号墓 縦断トレンチ西壁



0 1m
(S=1/30)

第Ⅲ－８図　79 号墓　縦断・横断トレンチ壁面図


EL=45.000m
EL=44.000m
EL=43.000m
EL=42.000m
縦断図
墓室横断図
立面図
蔵骨器①
蔵骨器②
蔵骨器③
蔵骨器④
岩盤
0
2m
(S=1/60)
トレンチ
コンクリート
裏込め
X=31901
Y=26993
X=31906
Y=26994
墓室平面図

第Ⅲ - 9図　79 号墓

70 号墓 調査前現況

70 号墓 伐採後状況

70 号墓 検出状況

70 号墓 清掃作業状況

70 号墓 墓室内現況

70 号墓 トレンチ掘削作業現況

70 号墓 礫敷検出作業現況

70 号墓 検出状況

図版Ⅲ - 1　70 号墓 -1

70 号墓 検出状況

70 号墓 検出状況

70 号墓 墓庭トレンチ東壁

70 号墓 墓庭トレンチ東壁

70 号墓 墓庭トレンチ東壁

70 号墓 墓庭トレンチ東壁

70 号墓 墓庭トレンチ東壁

70 号墓 墓庭トレンチ東壁

図版Ⅲ - 2　70 号墓 -2

70 号墓 墓庭トレンチ東壁

70 号墓 完掘状況

70 号墓 墓室内シルヒラシ検出状況

70 号墓 墓室内正面

70 号墓 墓室内側面西側

70 号墓 墓室内側面東側

70 号墓 墓室内墓口

70 号墓 墓庭トレンチ埋め戻し完了状況

図版Ⅲ - 3　70 号墓 -3

71 号墓 調査前現況

71 号墓 伐採後状況

71 号墓 墓室内現況

71 号墓 墓室内現況

71 号墓 清掃作業状況

71 号墓 検出状況

71 号墓 仮墓検出状況

71 号墓 墓室内検出状況

図版Ⅲ - 4　71 号墓 -1

71 号墓 墓室内検出状況

71 号墓 トレンチ掘削作業状況

71 号墓 墓庭トレンチ南壁セクション

71 号墓 墓庭トレンチ拡張（サンミデー部）セクション

71 号墓 完掘状況

71 号墓 完掘状況

71 号墓 墓室内シルヒラシ半裁状況

71 号墓 墓庭トレンチ埋め戻し完了状況

図版Ⅲ - 5　71 号墓 -2

79 号墓 調査前現況

79 号墓 伐採後状況

79 号墓 墓室内現況

79 号墓 墓庭確認作業状況

79 号墓 検出状況

79 号墓 検出状況

79 号墓 検出状況

79 号墓 検出状況

図版Ⅲ - 6　79 号墓 -1

79 号墓 蔵骨器取り上げ状況

79 号墓 石厨子取り上げ後状況

79 号墓 墓室内トレンチ掘削状況

79 号墓 墓庭トレンチ西壁セクション

79 号墓 墓庭横断トレンチ南壁セクション

79 号墓 完掘状況

79 号墓 墓室正面壁取り外し後状況

79 号墓 墓庭トレンチ埋め戻し完了状況

図版Ⅲ - 7　79 号墓 -2

3. 遺物

遺物は 70 号墓と 79 号墓から出土している。陶器製の厨子甕の身と蓋が中心で、79 号墓では石製の厨子もみられる。また、墓庭からは瓦や磚、本土産磁器もみられる。

70 号墓

１～６はマンガン掛けの陶製厨子甕でセット関係ははっきりしないが、1・４～６が墓室内で出土し、３が墓庭、２が墓室内と墓庭で出た破片を接合したものとなる。５は墓室内で出土した厨子甕の蓋で縁に沿って円形に「□貳ヵ日　□□□□□　花城」と墨書されており、記号のような墨痕もみられる。６は墓室内で出土した蓋で「□之　／　大正十年辛酉　／　□□□　／　洗骨ヵ　／　花城」と記載されている。３は墓庭で出土した身で屋門に「花城」と墨書されている。年代や被葬者がわかる銘書は少ないが、屋号花城家の墓とみられる。他にも 70 号墓では本土産磁器、キセルが出土している。

79 号墓

７は石厨子で正面中央に朱による２条の縦線で扉を描く。正面・右側面・左側面に墨・朱による蓮華文を施文し、朱で花弁などを表現している背面にも文様あり。銘書は正面左側に縦書きで墨書されており「□谷村ヵ□□□　／　□□□□　／　□□女　□□　／　□□□　か奈　／　□　奈辺　／　□□十年□□」と書かれている。

８は石厨子で正面に墨・朱により文様を描いている。正面を朱で９分割する区画線を描き、一部の線では縁を墨で線引きするものある。左上・右上区画では朱により格子を表現している。また、左中央区画では花の文様と思われるものがみられる。銘書は正面に縦書きで墨書されており、「雍正二年甲辰十月十一日　／　喜舎場村　／　喜屋武掟親雲上　／　女子□□曽」と書かれている。雍正２（1724）年の記述がある銘書は今回調査した不時発見の古墓のなかで最も古いものである。

11 は厨子甕の蓋である。蓋の縁に「上江洲之　／　むた上江洲」と銘書が墨書されている。

5 内面

11 内面

7 正面

8 正面

図版Ⅲ - 8　銘書

第Ⅲ－２表　厨子観察表－１

単位：cm

遺物№		分類	器種	上部径 器高 下部径	所見 （器形・成形手法）	文様・銘書 （銘書凡例　□：釈読不可、／：改行位置）	出土地
第Ⅲ図版・Ⅲ・10・図9	1	マンガン掛	身	(29.3) 55.7 21.8	成形・調整 外面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ、胴部下半板ナデ、底部静止ヘラケズリ後ナデ。 底部孔：11ヶ所・半月形。 屋門：アーチ型。下端は横帯4まで及ばない。柱中央に凹線1条。屋門頂部に1＋3個、柱基部に各1個の玉飾。 窓：3ヶ所。方形。 釉薬：外面口縁部～胴部下半にマンガン釉。	文様 頸部：（上から）線彫りによる下向きの蓮弁文、沈線2条、線彫りによる下向きの蓮弁文。線彫りは2条1組の工具による。 胴部：線彫りによる蓮華文。2条1組の工具による。 胴下部：（上から）櫛描波状文5条、沈線2条、櫛描波状文5条、沈線4条。波状文は書き足しあり。 横帯 1：沈線2条、2：突帯1条、3：沈線5条（書き足しあり）、4：沈線5条 銘書 なし。	70号墓 墓室内
第Ⅲ図版・Ⅲ・11・図9	2	マンガン掛	身	27.7 56.6 19.5	成形・調整 外面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ、胴部下半～底部静止ヘラケズリ。 内面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ。底部静止ヘラケズリ後ナデ。 底部孔：6ヶ所・半円形。 屋門：アーチ型。下端は横帯4まで。柱中央に凹線1条。屋門頂部に推定3個（残存2個）、柱基部に各1個の玉飾。 窓：中央・右に痕跡残存。推定3ヶ所。方形。 釉薬：外面全体にマンガン釉。	文様 頸部：線彫りによるV字状に開く蕉葉文。2条1組の工具による。 胴部：線彫りによる蓮華文。2条1組の工具による。 胴下部：（上から）櫛描波状文6条、沈線4条。 横帯 1：沈線2条、2：突帯1条、3：突帯2条、4：沈線5条 銘書 なし。	70号墓 墓庭埋土 ＋ 墓室内
第Ⅲ図版・Ⅲ・12・図9	3	マンガン掛	身	27.6 (34.5) ―	成形・調整 外面：口縁部～胴部回転ヨコナデ。 内面：口縁部～胴部上半回転ヨコナデ。胴部下半に成形時の工具痕残る。 屋門：アーチ型。柱中央に凹線1条。屋門頂部に1＋3個の玉飾。屋門は横帯3より旧。 窓：1ヶ所（中央）。円形。 釉薬：外面全体にマンガン釉。	文様 頸部：線彫りによるV字状の葉文。3単位。2条1組の工具による。 胴部：線彫りによる蓮華文。2条1組の工具による。 横帯 1：沈線3条、2：沈線1条、3：沈線4条（非常に乱雑）。 銘書 屋門に縦書きで墨書。「花城」。	70号墓 墓庭埋土
第Ⅲ図版・Ⅲ・13・図10	4	マンガン掛	蓋	10.8 9.8 30.2	成形・調整 ミズビキ成形。 外面：つまみ部回転ヨコナデ、胴部上半回転ヘラケズリ、口縁部回転ヨコナデ。 内面：口縁部～胴部上半回転ヨコナデ。口縁部にカエリあり（高さ1mm）。 つまみ：宝珠型、有孔。内部は中空。ヘラによる穿孔。 つまみ台：2段。 釉薬：外面全体にマンガン釉。	文様：つまみ台（上段）の上面に圏線1条、つまみ台（上・下）の基部および胴部上半に圏線各1条。 銘書：なし。	70号墓 墓室内
	5	マンガン掛	蓋	8.0 17.0 22.2	成形・調整 ミズビキ成形。 外面：つまみ部回転ヨコナデ、胴部上半回転ヘラケズリ、口縁部～胴部下半回転ヨコナデ。 内面：回転ヨコナデ。口縁部にカエリあり（高さ2mm）。 つまみ：宝珠型、有孔。内部は中空。ヘラによる穿孔。 つまみ台：2段。 釉薬：外面全体にマンガン釉。	文様：つまみ台（上段）の上面に圏線1条。 銘書：口縁部に沿って円形に書かれる。 「□□貳ヵ日　□□□□□　花城」 この他、記号のような墨書ないし墨痕あり。	70号墓 墓室内
	6	マンガン掛	蓋	10.9 11.0 29.8	成形・調整 ミズビキ成形。 外面：つまみ部回転ヨコナデ、胴部上半回転ヘラケズリ、口縁部回転ヨコナデ。 内面：口縁部・天井部回転ヨコナデ。口縁部にカエリなし。 つまみ：饅頭型、有孔。頂部凹む。内部は中空。ヘラによる穿孔。 つまみ台：なし。但し、強いヘラケズリにより3段の段差を表現する。 釉薬：外面全体にマンガン釉。	文様：口唇上に凹線1条。 銘書：内面に放射状に書かれる。 「□之　／　大正十年辛酉　／　□□□　／　洗骨ヵ　／　花城」	70号墓 墓室内
第Ⅲ図版・Ⅲ・14・図11	7	サンゴ石製	身	66.0 46.0 69.0	形状：箱型。 成形：削り出し後に研磨し平坦に仕上げる。外面胴部下半・内面には縦～斜位のノミの痕跡が明瞭に残る。 窓：正面に2個、方形。 脚：4脚、方形。	文様・彩色： 正面中央に朱による2条の縦線で文様を描く。正面・右側面・左側面に墨・朱による蓮華文を施文。朱で花弁などを表現。背面にも文様あり。 銘書：あり。正面左側に縦書きで墨書。 「□谷村ヵ□□□　／　□□□□　／□□女　□□　／　□□□　か奈　／　□　奈辺　／　□□十年□□」	79号墓 墓室内
第Ⅲ図版・Ⅲ・15・図12	8	サンゴ石製	身	42.1 38.6 (32.0)	形状：箱型。 成形：削り出し後に研磨し平坦に仕上げる。外面胴部下半・内面には縦～斜位にノミの痕跡が明瞭に残る。 窓：正面に2個、方形。 脚：（推定）4脚、方形。	文様・彩色： 正面に墨・朱により屋敷の文様を描く。正面を朱で9分割する区画線を描く。一部の線では縁を墨で線引きするものあり。 左上・右上区画では朱により格子を表現する。 左中央区画では花の文様と思われるものがみられる。 口唇上に部分的に朱が付着する。 銘書：あり。正面に縦書きで墨書。 「雍正二年甲辰十月十一日　／　喜舎場村　／　喜屋武掟親雲上　／　女子□□曽」	79号墓 墓室内

（かっこ内は想定値）

第Ⅲ - ３表　厨子観察表 - 2

単位：cm

遺物№		分類	器種	上部径 器高 下部径	所見 （器形・成形手法）	文様・銘書 （銘書凡例　□：釈読不可、／：改行位置）	出土地
第図版Ⅲ-Ⅲ-16-図13	9	ボージャー	身	18.5 36.9 16.9	成形・調整 外面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ、胴部下半板ナデ、底部静止ヘラケズリ。 内面：口縁部回転ヨコナデ。体部ミズビキ。底部ヘラナデ。 底部孔：5ヶ所・半円形。 屋門：唐破風型。破風・下辺に凹線各1条。 窓：3ヶ所。隅丸方形。	横帯 口縁部：沈線2条、頸部：突帯1条、屋門上：沈線1条、 屋門下：沈線1条 銘書 なし。	79号墓 墓室内
	10	マンガン掛	身	- (35.2) 23.1	成形・調整 外面：胴部上半回転ヨコナデ、胴部下半～底部静止ヘラケズリ。 内面：胴部上半ミズビキ、胴部下半板ナデ、底部静止ヘラケズリ後ナデ。 底部孔：5ヶ所・半月形。 屋門：残存せず。 窓：残存せず。 釉薬：外面胴部下半までマンガン釉。	文様 胴部：貼付（花弁・葉）と線彫り（茎）による蓮華文。 貼付は型押し、線彫りは2条1組の工具による。 胴下部：(上から)波状文1条（太い工具による）、沈線3条。 横帯 4：突帯3条。一部押圧される。 銘書 なし。	79号墓 墓室内
	11	マンガン掛け	蓋	12.2 12.2 30.8	成形・調整 ミズビキ成形。 外面：つまみ部回転ヨコナデ、胴部下半まで回転ヘラケズリ、口縁部回転ヨコナデ。 内面：口縁部回転ヨコナデ。口縁部にカエリあり（高さ2㎜）。 つまみ：宝珠型、有孔。内部は中空。ヘラによる穿孔。 つまみ台：1段。 釉薬：外面全体にマンガン釉。鍔～内面にも釉付着あり。	文様：つまみ台の上面に圏線1条。 銘書：口縁部に沿って書かれる。 「上江洲之　／　むた上江洲」	79号墓 墓室内

（かっこ内は想定値）

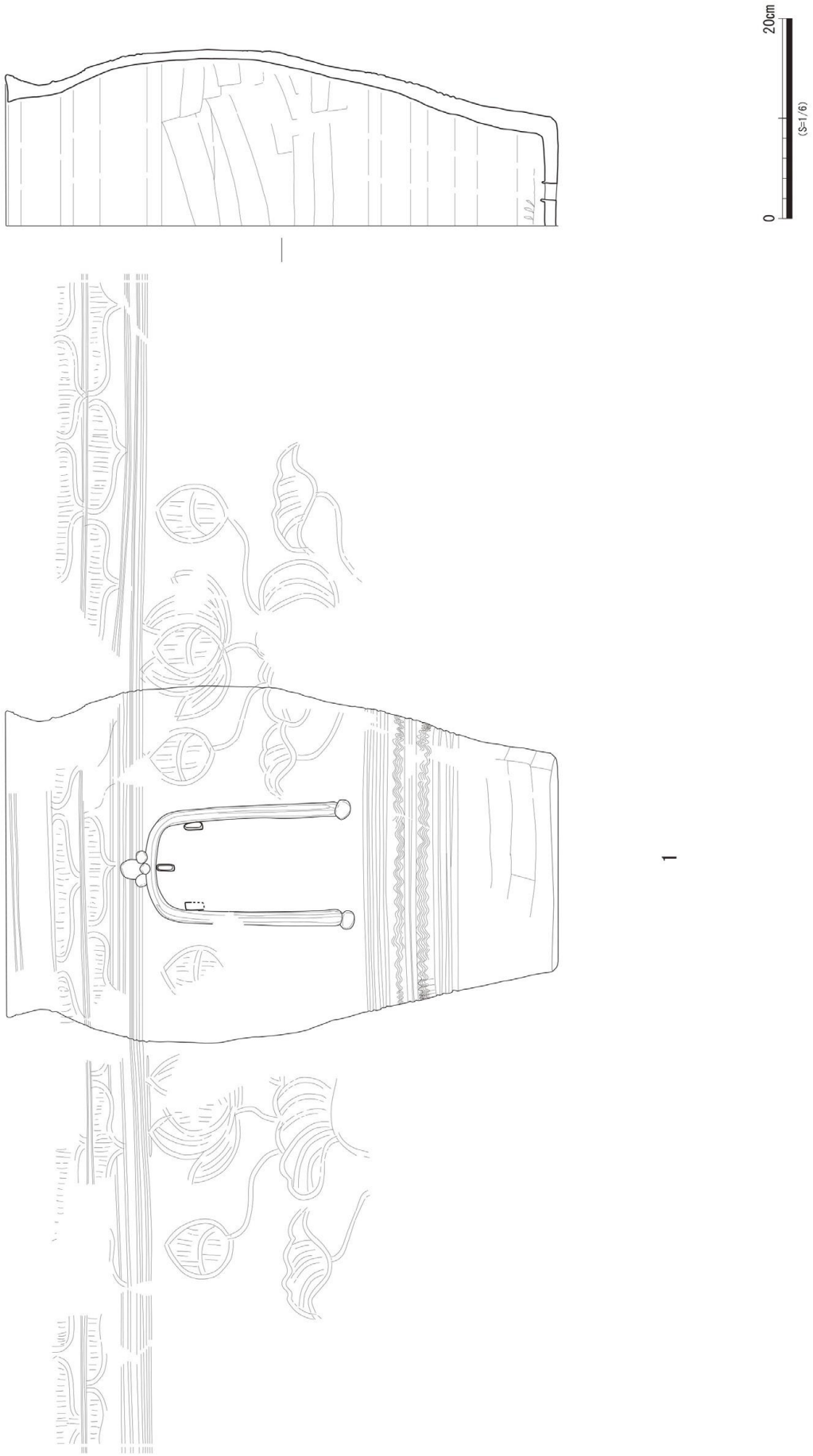
第Ⅲ - ４表　その他の遺物観察表

図版№		種別	器種	部位	観察事項	出土地
第図版Ⅲ-Ⅲ-17-図14	1	瓦	明朝系 平瓦	狭端側	桶巻4枚作りによる。凹面は布目。桶板綴じ紐と吊り紐の圧痕が残る。凸面は上位に板ナデおよびヘラケズリ。下位に指ナデによる横位の凹線3条。狭端面はヘラナデ。側端は分割後無調整。	70号墓 墓庭埋土
	2	磚	—	—	4面残存。各面ともヘラケズリ後に丁寧なミガキ。正面中央に指オサエ。	70号墓 墓庭埋土
	3	本土産磁器	碗	胴～底部	外面胴部・内面回転ヨコナデ。底部削り出し高台。内外面施釉（透明釉）。畳付焼成後研磨。見込みに4ヶ所のハマ痕跡残存（5足のハマを使用）。器高(3.7)㎝、下径部2.3㎝。 文様 外面：胴部に点描地に梅窓、窓内に花文。腰部に剣先文、高台脇に圏線1条、高台に圏線1条。型紙摺りによる染付。型紙の合わせ目残る。 内面：見込みに圏線と松竹梅文。型紙摺りによる染付。	71号墓 墓庭埋土
図版Ⅲ-14	4	金属製品	煙管	—	青銅製の延べ煙管。重量53ｇ、長さ19.1㎝。	70号墓 墓庭客土
	5	金属製品	釘	—	長さ3㎝の鉄釘。錆膨れのため形状は判然としないが丸釘か。重量１ｇ。	79号墓 蔵骨器①

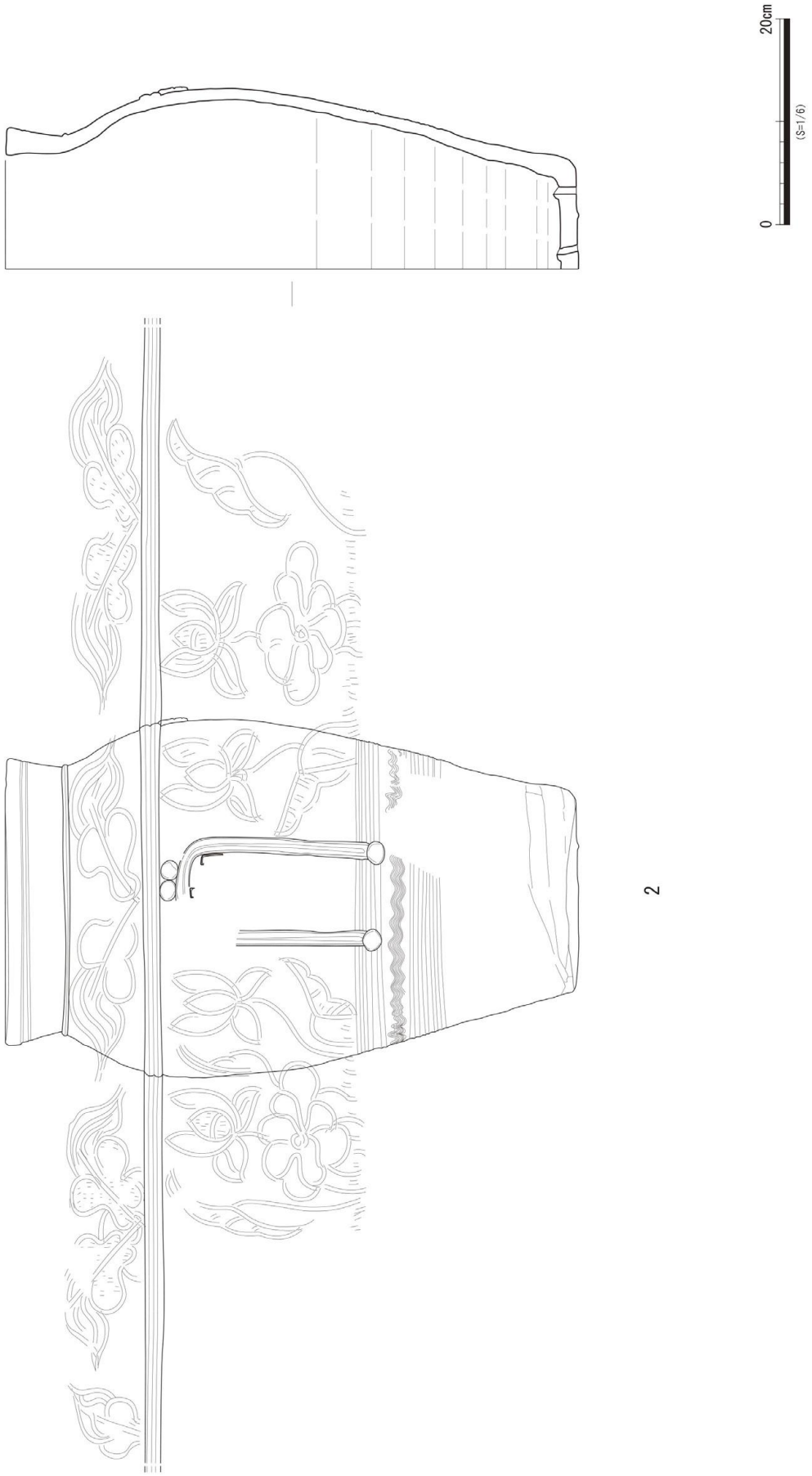
（かっこ内は想定値）

第Ⅲ - ５表　遺物集計表

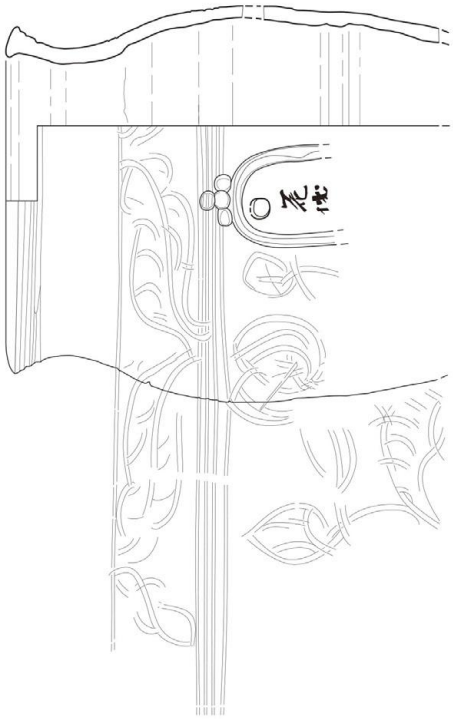
種類	部位	79号墓										70号墓				71号墓		合計
		表採	トレンチⅠ層	トレンチⅦ層	墓室内	墓室内覆土	墓室内シルヒラシ床直上	蔵骨器①	蔵骨器④	客土	石抜け跡	埋土	墓室内	墓庭・埋土	墓庭・客土	墓庭・埋土	客土	
マンガン掛　厨子甕	完形												2					2
	口縁部	1												1	1	1	1	5
	底部				1		1					1						3
	胴部		5				1		1	17					3	1	5	33
	破片		14			3				10	4	2						33
マンガン掛 厨子甕（蓋）	完形				1								3					4
	破片									2						1		3
ボージャー（厨子甕）	完形				1													1
石厨子	破片				2													2
沖縄産無釉陶器	口縁部														1			1
	胴部											2			1			3
沖縄産施釉陶器	口縁部															1	2	3
	胴部															1		1
	底部														1	1		2
本土産磁器	胴～底部															1		1
アカムヌー	破片														1			1
土器	破片		1	2														3
瓦	破片													1			1	2
磚	破片													1				1
近代陶器（不明）	破片														2			2
金属製品（釘？）	完形							1										1
金属製品（四角形）	完形？									1								1
煙管	完形														1			1
泡盛瓶	完形	2																2
不明	―											2						2
合計		3	20	2	5	3	2	1	1	30	4	7	5	3	11	7	9	113



第Ⅲ - 10 図　70 号墓　厨子（蔵骨器：身）



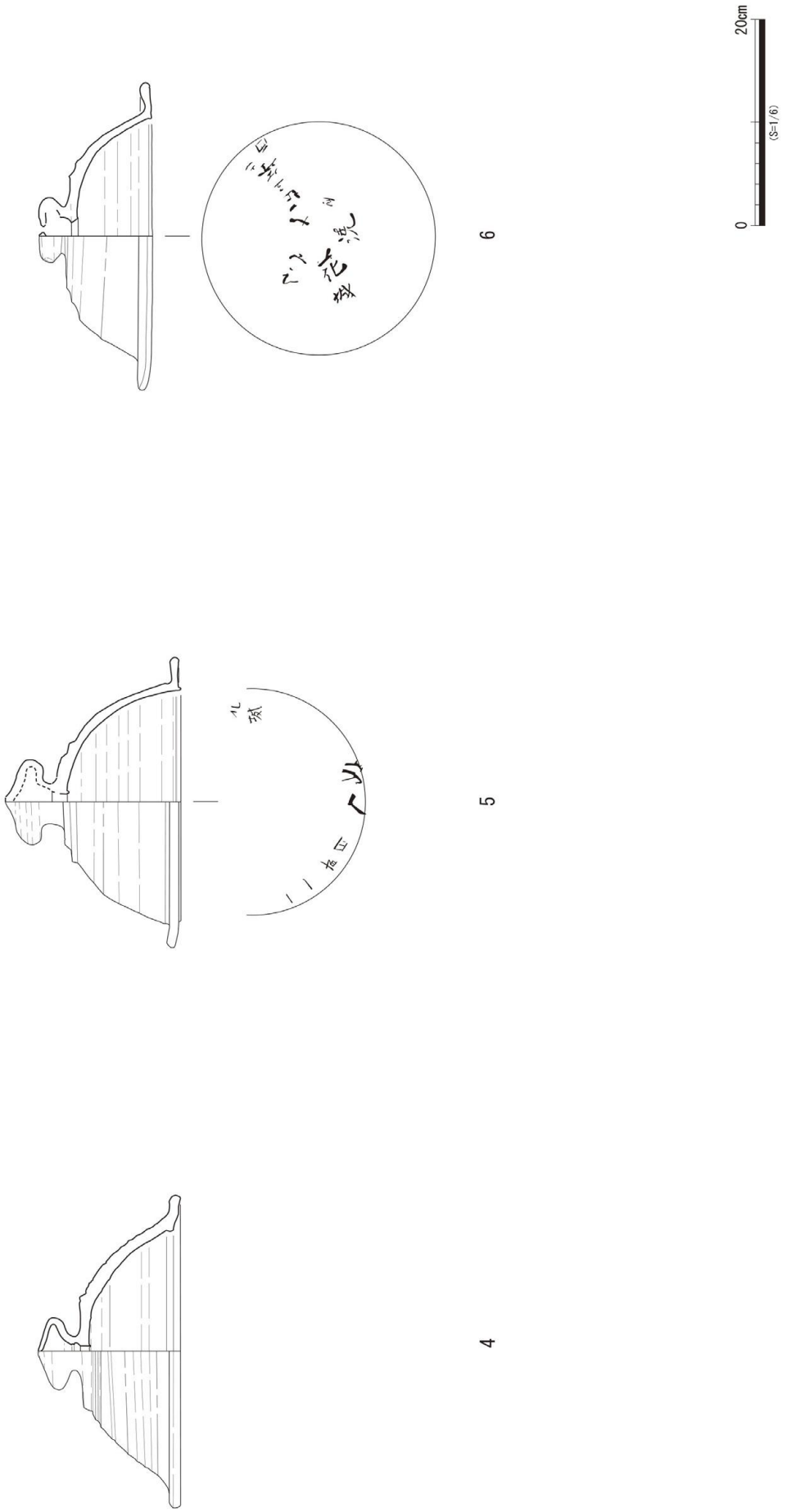
第Ⅲ - 11 図　70 号墓　厨子（蔵骨器：身）



3

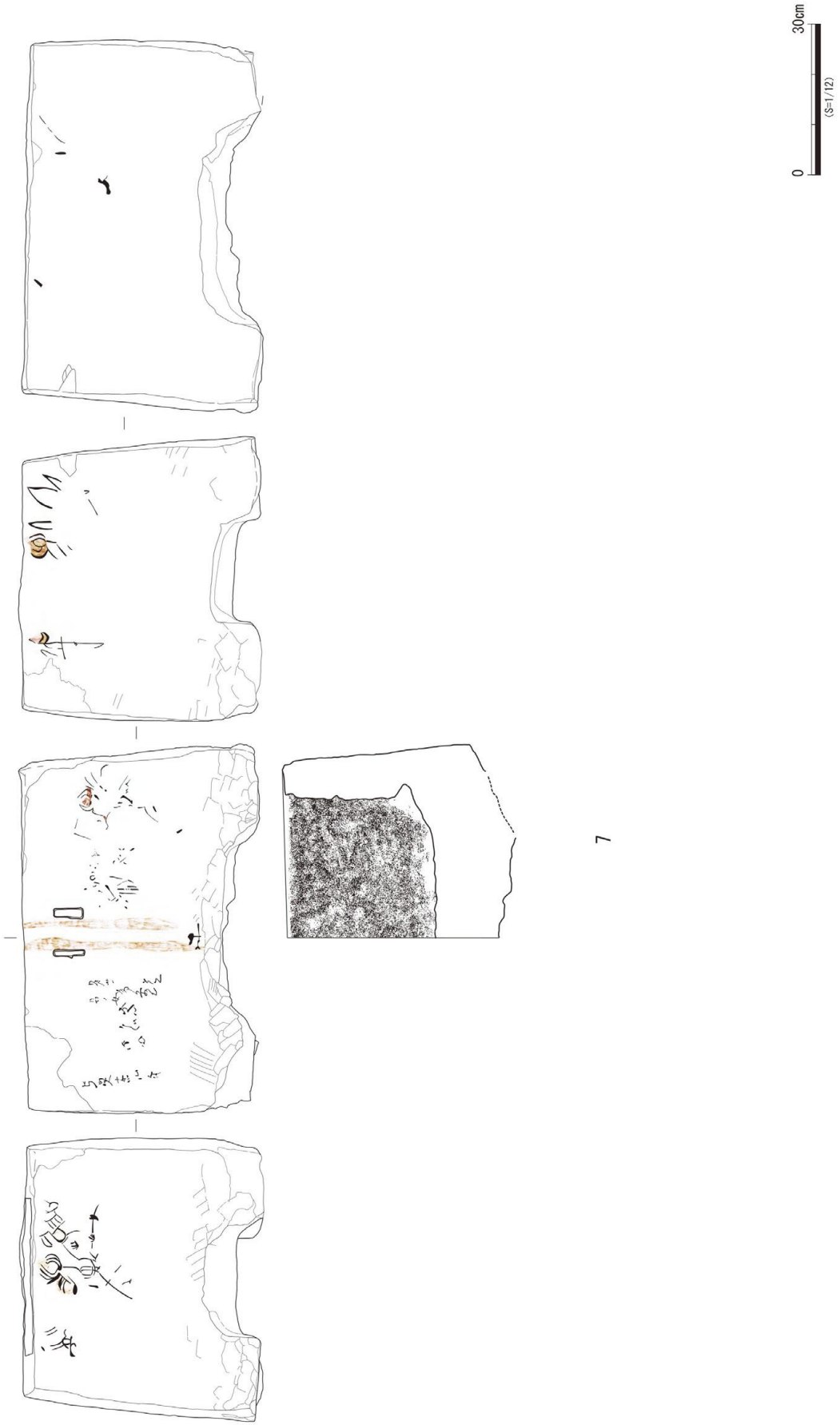
第Ⅲ - 12 図　70 号墓　厨子（蔵骨器：身）

図版Ⅲ - 9　70 号墓　厨子（蔵骨器：身）



第Ⅲ - 13 図　70 号墓　厨子（蔵骨器：蓋）

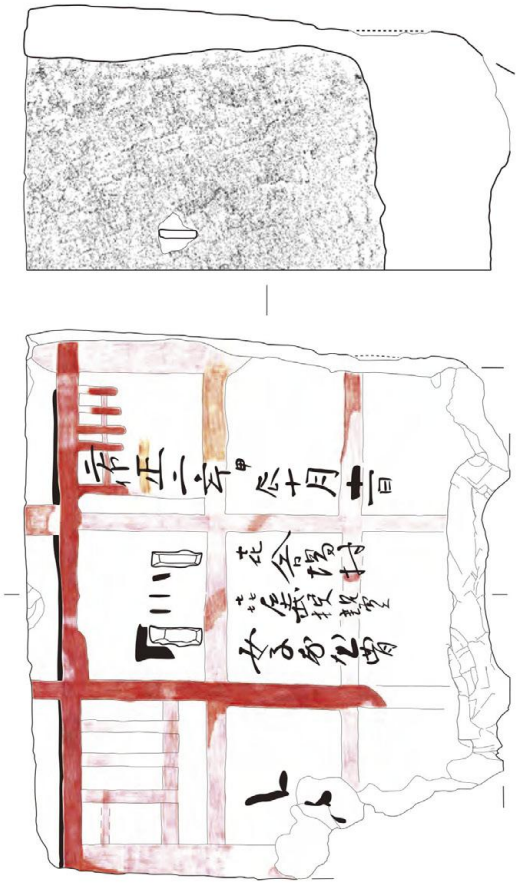
図版Ⅲ - 10　70 号墓　厨子（蔵骨器：蓋）



第Ⅲ - 14 図　79 号墓　石厨子（蔵骨器：身）

7

図版Ⅲ - 11　79 号墓　石厨子（蔵骨器：身）

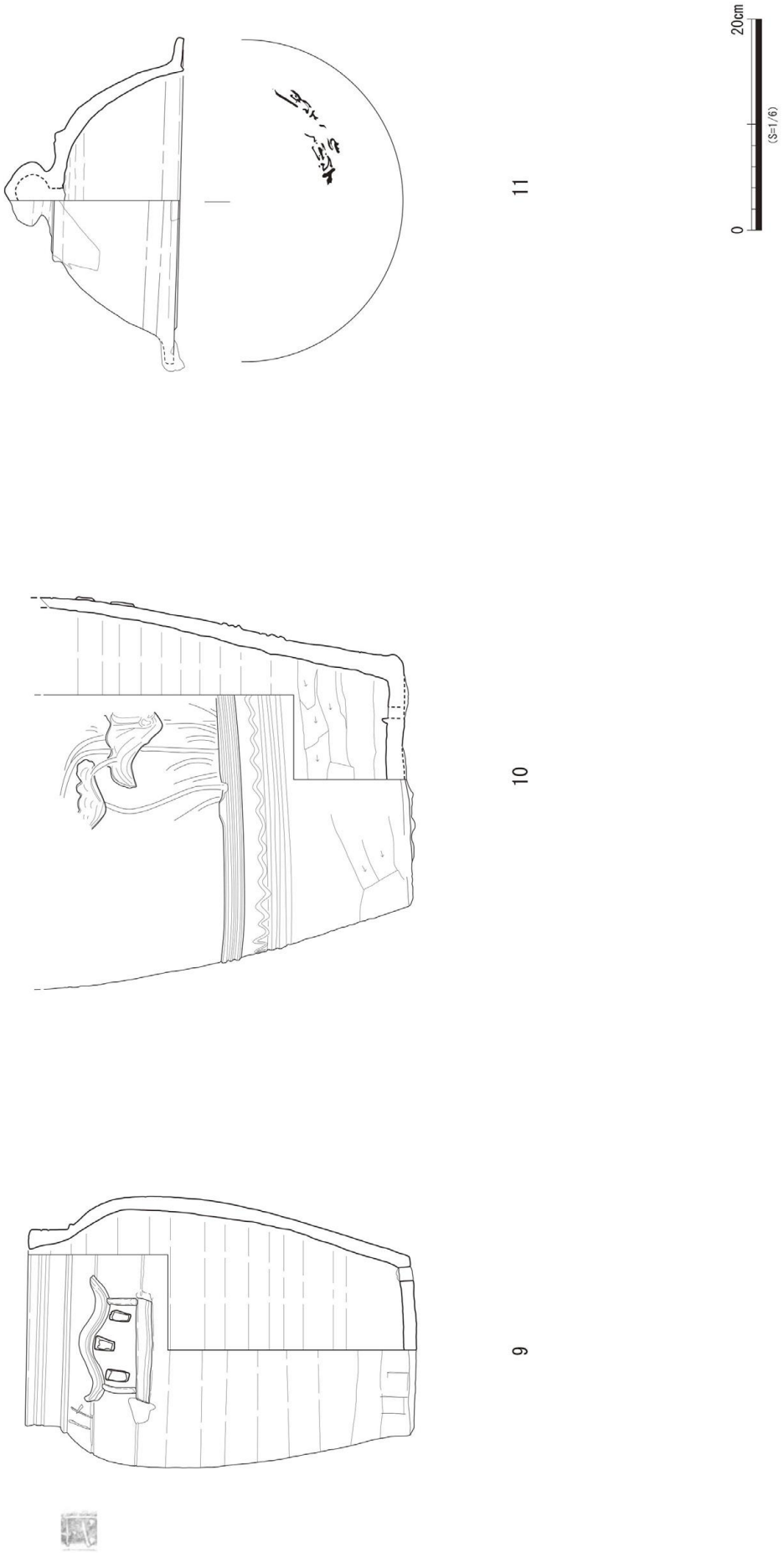


8

第Ⅲ - 15 図　79 号墓　石厨子（蔵骨器：身）

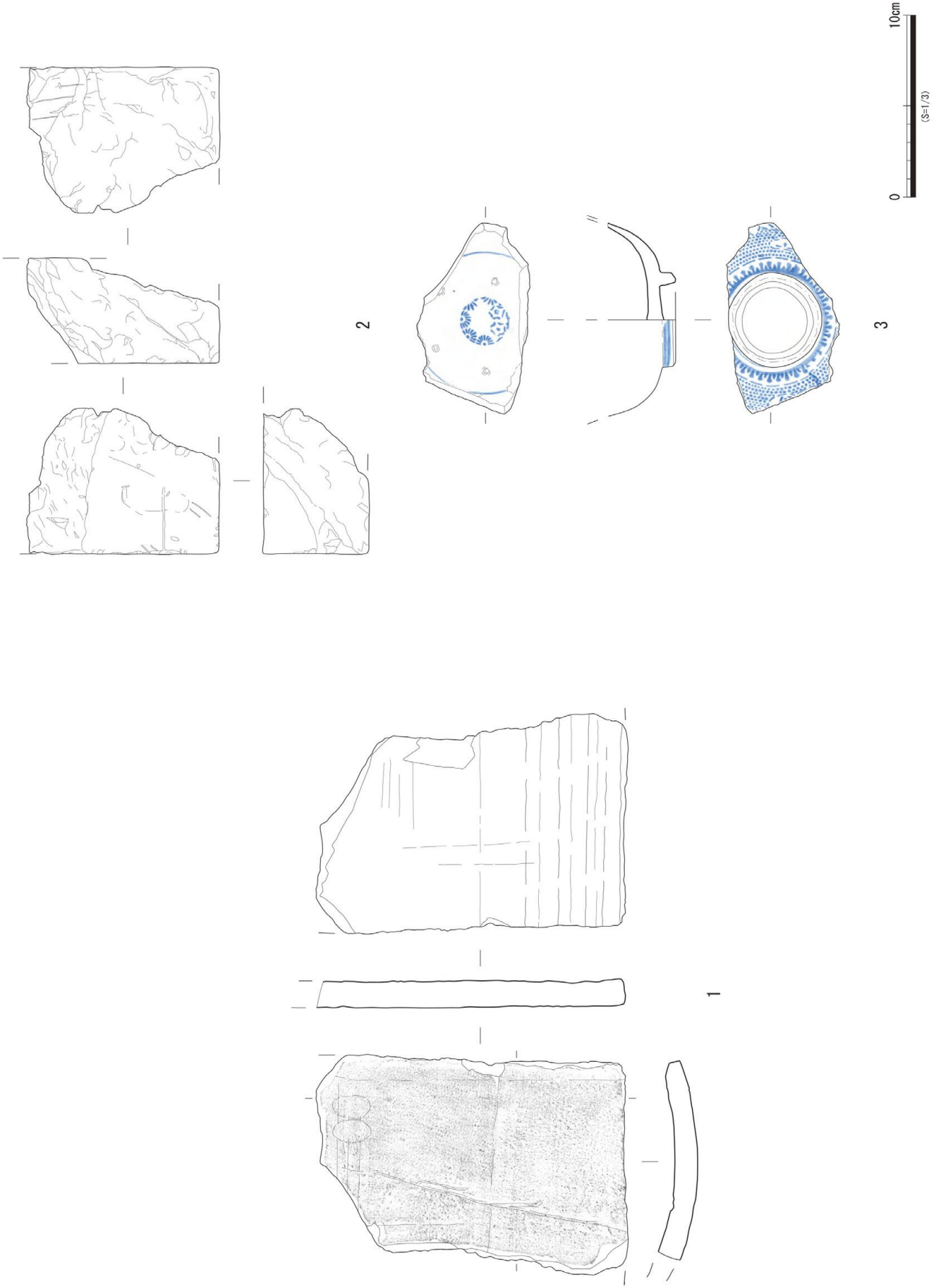
8

図版Ⅲ - 12　79 号墓　石厨子（蔵骨器：身）



第Ⅲ - 16 図　79 号墓　厨子（蔵骨器：身・蓋）

図版Ⅲ - 13　79 号墓　厨子（蔵骨器：身・蓋）



第Ⅲ - 17 図　70 号墓　瓦（1）・磚（2）/71 号墓　本土産磁器（3）

図版Ⅲ - 14　70 号墓 瓦（1）・磚（2）・煙管（キセル）（4）/71 号墓 本土産磁器（3）/79 号墓 金属製品（5）

第Ⅳ章　喜友名山川原丘陵古墓群の調査成果（２・３・４・５号墓）

第１節　調査の経過

今回調査対象となる古墓４基は平成 29 年度の沖縄防衛局による支障除去で不時発見され、区画整理事業に関する開発工事に伴い令和元年９月９日から発掘調査に着手した。

古墓は平成 29 年度に琉球石灰岩やブルーシート等で入口を塞ぎ、土をかけて保存していたため、重機を使用して検出作業を行った。検出後、墓室内に残っていた客土を人力で掘削した。古墓はすべて天井から墓口にかけて大きく破壊されており、墓室内の一部のみが確認できる状況であった。調査は 10 月８日まで行われた。

第２節　調査の概要

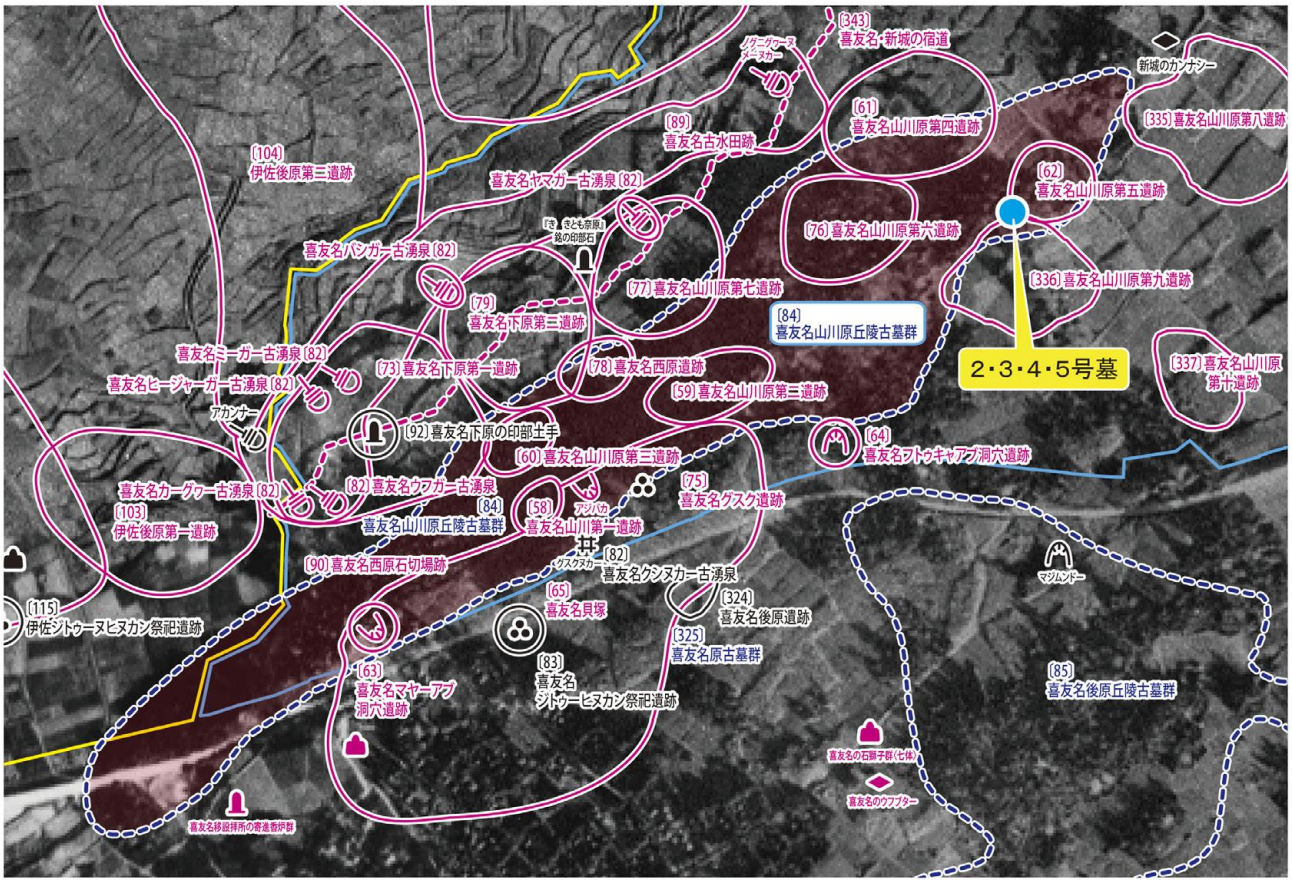
１. 基本層序

古墓は斜面に形成されており、発見時は米軍基地の造成土に埋もれた状態であった。残存状況は悪く、墓の使用時の層がわずかにみられる程度である。以下に今回の調査で確認できた基本層序を遺構毎に記す。

Ⅰ層：造成土。しまりが良く、粘質が強い。米軍基地の造成土とみられる。

Ⅱ層：しまりが悪い褐色土。約１㎝の石灰岩が多く含まれる。墓口の石列が直上にのっており、墓の造成時の土層とみられる。

Ⅲ層：風化した岩の層。手掘りが出来るほど脆い。



第Ⅳ－１　喜友名山川原丘陵古墓群　昭和 20 年航空写真

0　200m
（S=1/5000）

2. 遺構

今回の調査で対象としたのは４基の古墓である。西から北向けにかけての斜面に造営しているため墓口のほとんどは北ないし西を向いている。２号墓・４号墓・５号墓は掘込墓と見られる。墓室内にタナなどは作られておらず、約1.5 m～2.0 mの略方形で、３号墓のみ墓口とみられる部分に１段石積が配されている。発見当初は厨子甕の中に人骨や副葬品が残っていたため未改葬墓と見られたが出土した人骨は細かく、大きい骨はほとんど見られなかったため、改葬済みの可能性も高い。

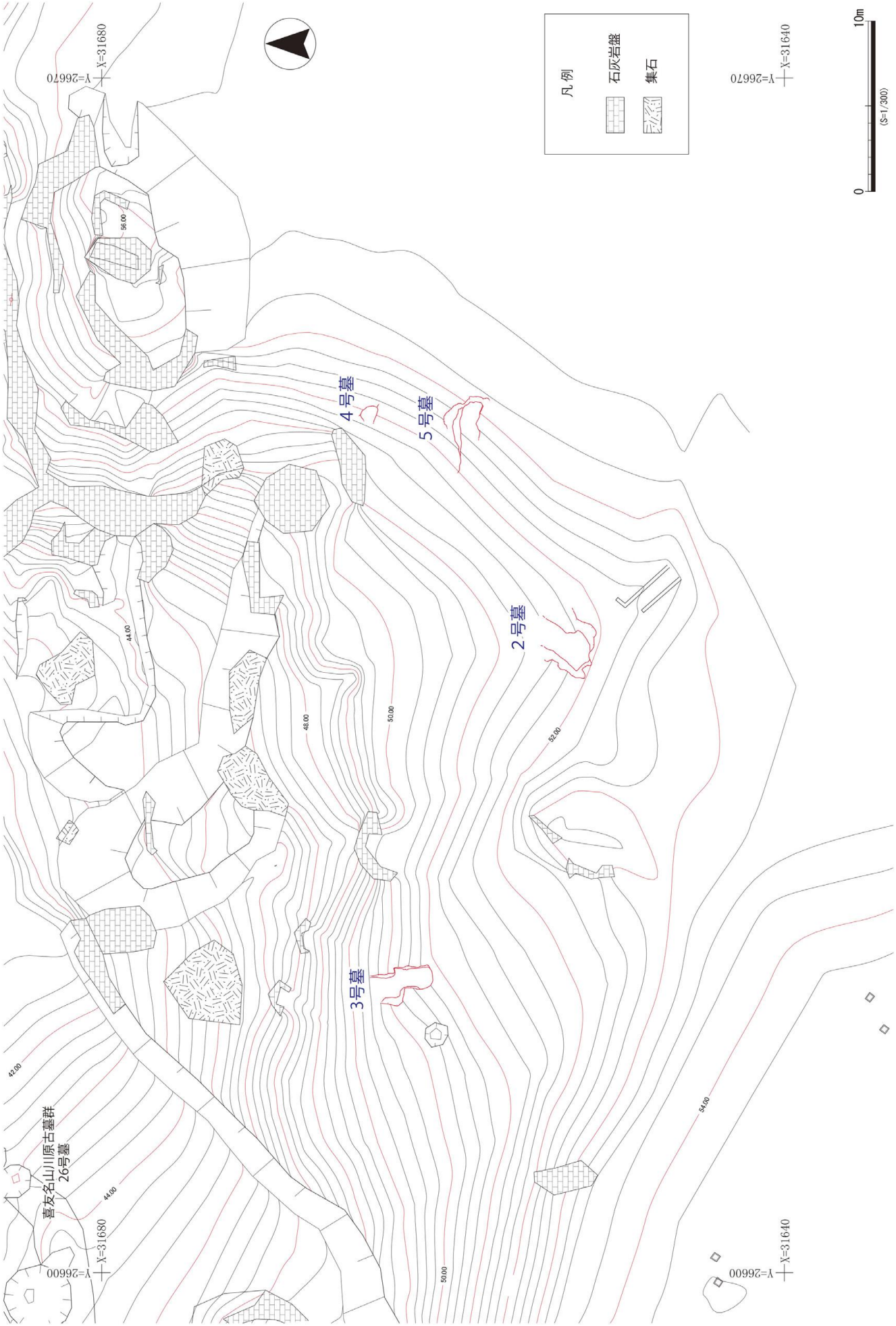
以下に、調査において確認された遺構を紹介する。

図版Ⅳ－１　４号墓・５号墓 半裁作業状況

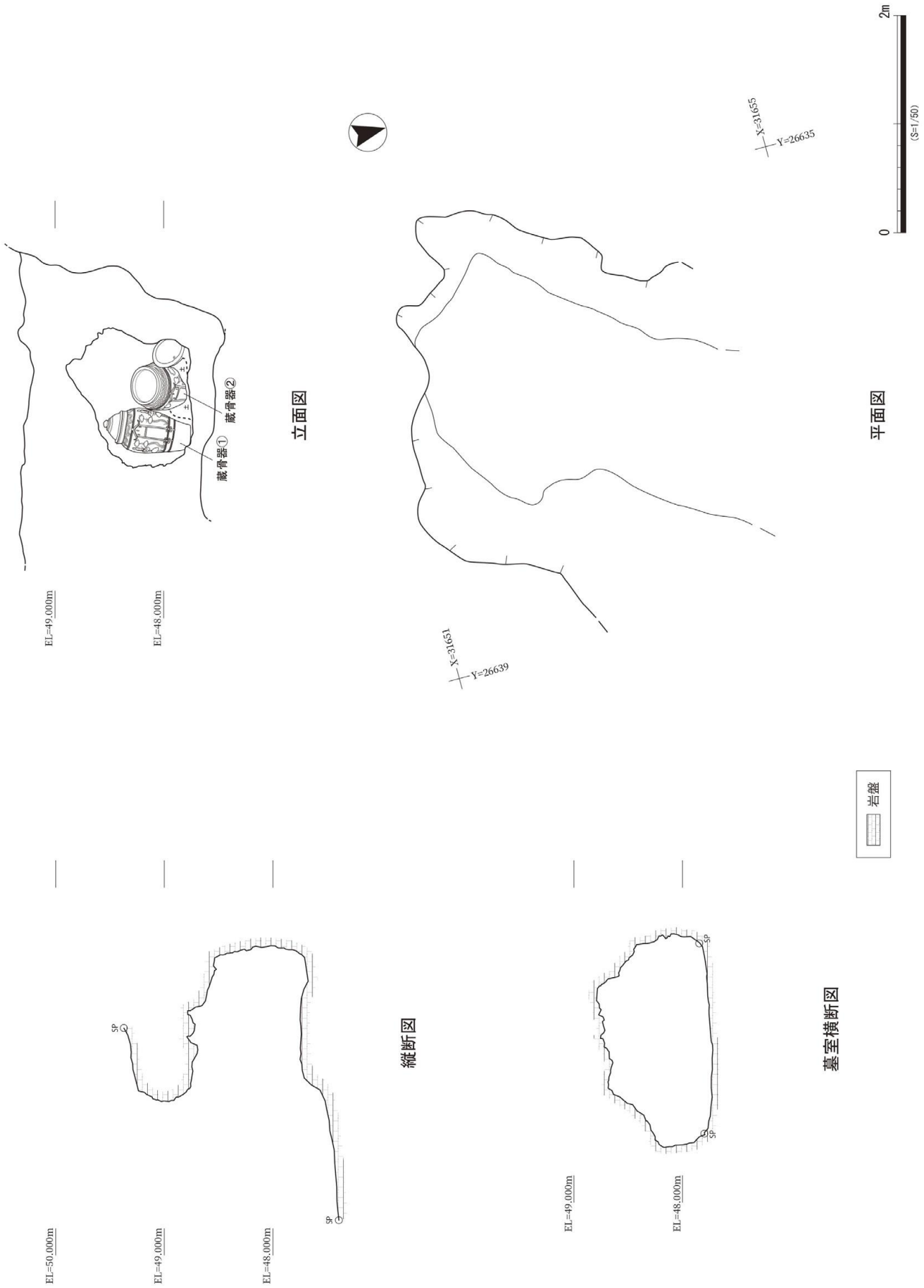
第Ⅳ－１表　遺構観察表

墓番号	墓口	墓室			観察事項
	法量（m）	法量（m）	厨子の有無	タナの有無	
2	高さ　－	高さ　1.1	有	無	向きは北東方向。掘込墓と見られる。天井は残存しているが、墓口付近は破壊されているため、正確な大きさは不明である。墓口が手前の地表よりも上がっているが、支障除去により手前が掘削されたためと見られる。
	幅　－	幅　1.98			
	奥行　－	奥行　1.24			
3	高さ　－	高さ　－	有	無	向きは北方向。墓口と見られる部分に１段石積みが配されている。床面部分以外は破壊されているため、掘込墓か正面に何らかの装飾があったかは不明である。墓口手前を掘り下げると岩盤直上に列石上に並ぶ石灰岩が見られたが、客土中のため転石か墓の造成に関するものかは判断できなかった。
	幅　－	幅　1.25			
	奥行　－	奥行　1.5			
4	高さ　－	高さ　－	有	無	向きは西方向。掘込墓と見られる。厨子甕が安置されている部分が地表面からやや下がっており、窪みになっている。厨子甕は現位置を保っていると見られ、屋門が墓口を向いた状態で3基がまとまって検出されている。
	幅　－	幅　1.02			
	奥行　－	奥行　－			
5	高さ　－	高さ0.88～0.64	有	無	向きは西方向。掘込墓と見られる。天井や墓口は破壊されているが、墓室内の奥は残存しており、岩盤を掘り込んだ様子が確認できる。厨子甕②については屋門が墓口を向いた状態で立っていることから、現位置は保っていると見られる。
	幅　－	幅　1.6～1.4			
	奥行　－	奥行　－			

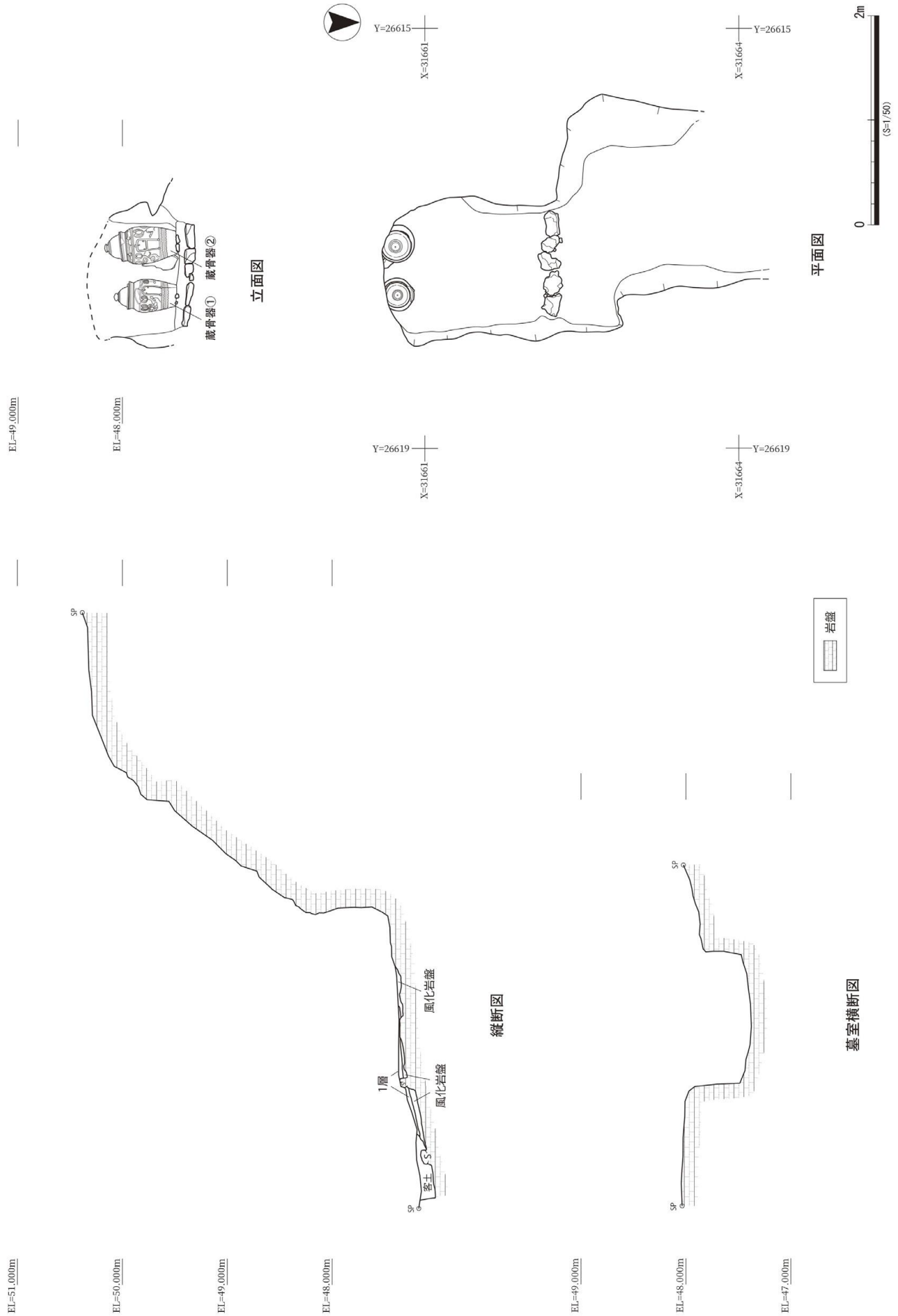
※墓番号は不時発見の順につけた。１号墓は安仁屋・新城イシジャー流域古墓群の79号墓。



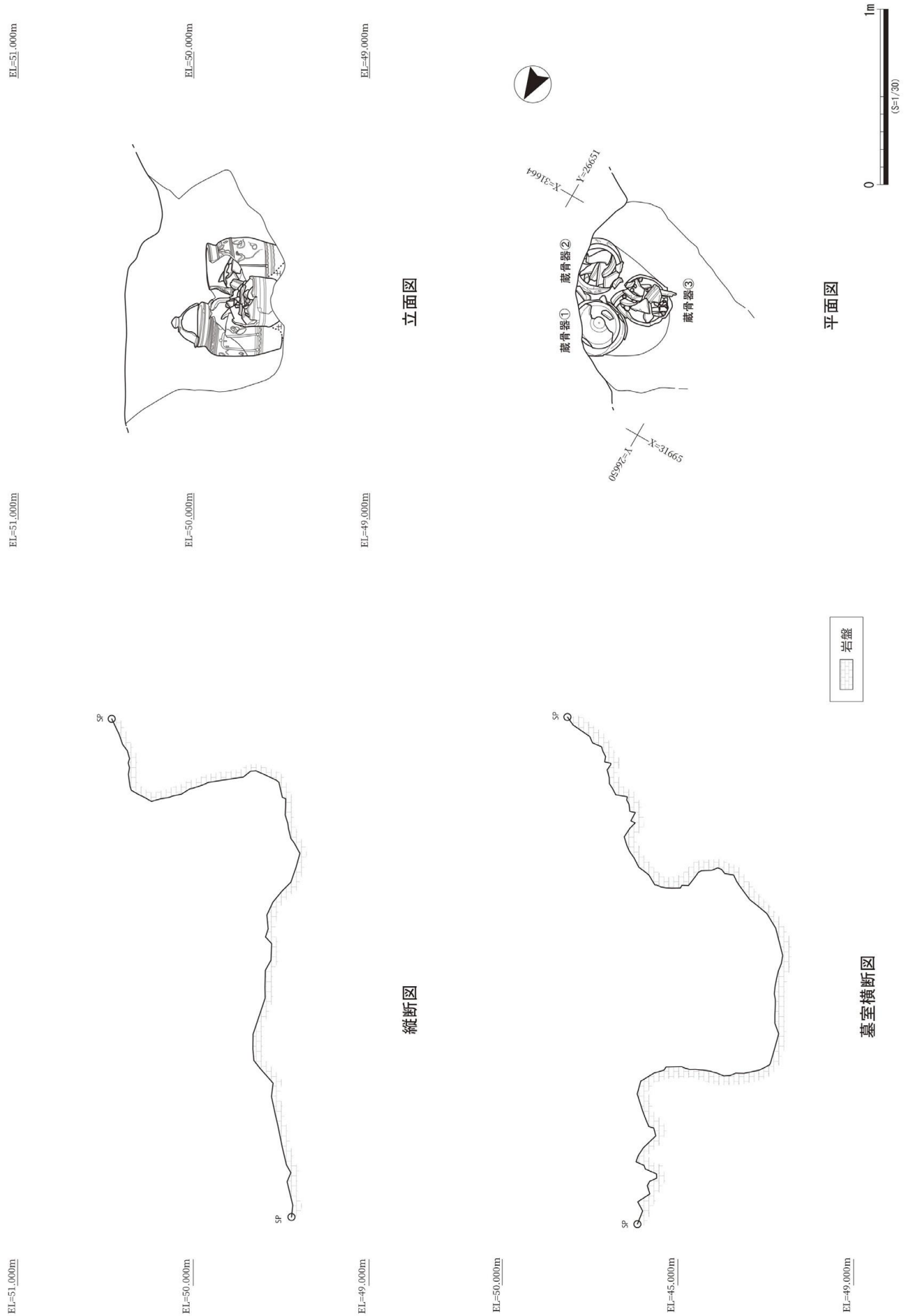
第Ⅳ－２図　喜友名山川原丘陵古墓群 古墓配置図


EL=49.000m
EL=48.000m
蔵骨器①
蔵骨器②
立面図
X=31651
Y=26639
X=31655
Y=26635
平面図
0
2m
(S=1/50)
岩盤
EL=50.000m
EL=49.000m
EL=48.000m
SP
縦断図
EL=49.000m
EL=48.000m
SP
墓室横断図

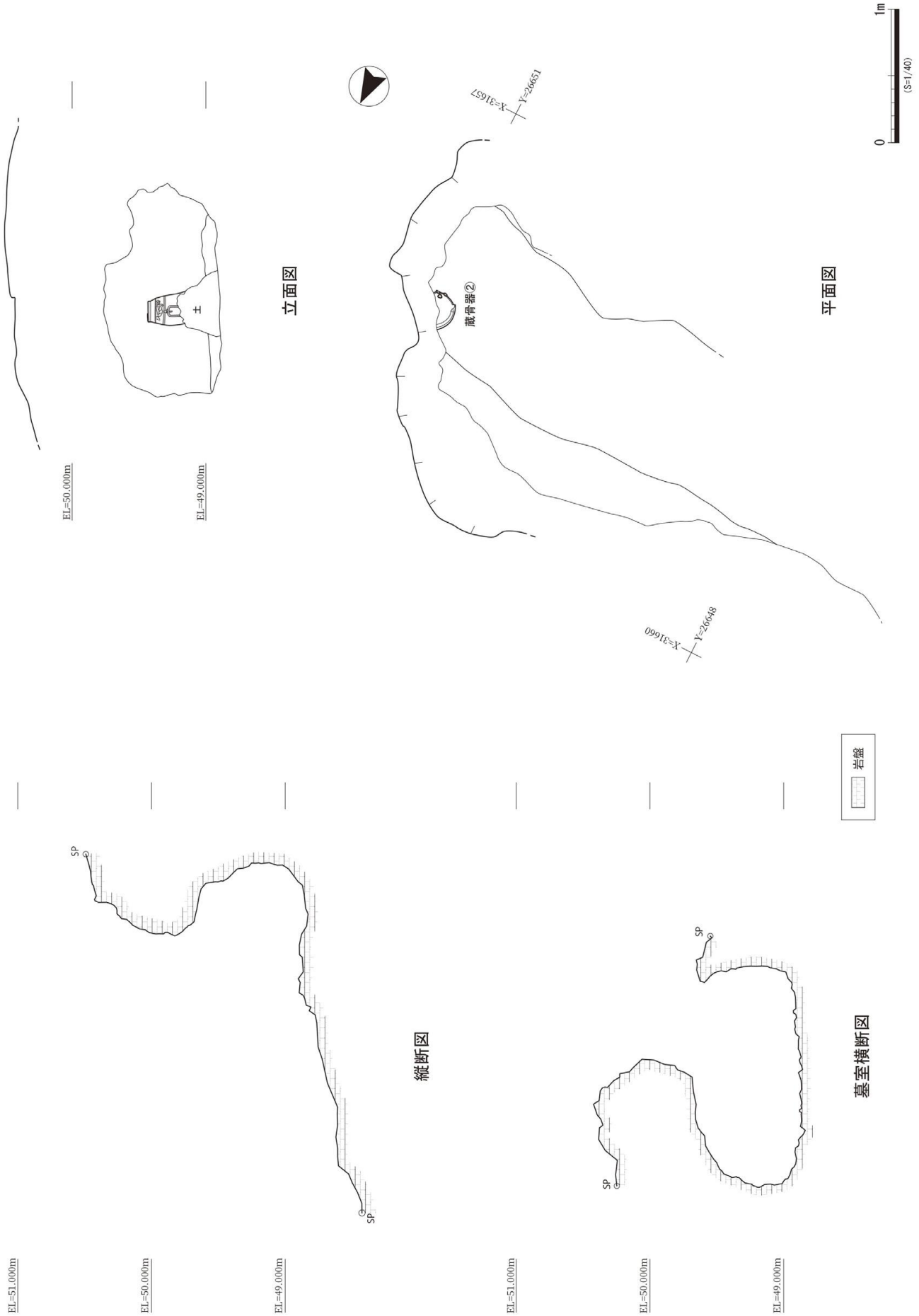
第Ⅳ - 3図　2号墓


立面図
蔵骨器①
蔵骨器②
平面図
Y=26615
X=31661
Y=26615
X=31664
Y=26619
X=31661
Y=26619
X=31664
0
2m
(S=1/50)
EL=49.000m
EL=48.000m
縦断図
SP
1層
風化岩盤
風化岩盤
客土
墓室横断図
岩盤
EL=51.000m
EL=50.000m
EL=49.000m
EL=48.000m
EL=49.000m
EL=48.000m
EL=47.000m

第Ⅳ－４図　３号墓


EL=51.000m
EL=50.000m
EL=49.000m
立面図
EL=51.000m
EL=50.000m
EL=49.000m
蔵骨器①
蔵骨器②
蔵骨器③
X=31664
Y=26651
X=31665
Y=26650
平面図
0
1m
(S=1/30)
岩盤
SP
SP
縦断図
EL=51.000m
EL=50.000m
EL=49.000m
SP
SP
墓室横断図
EL=50.000m
EL=45.000m
EL=49.000m

第Ⅳ - ５図　４号墓


立面図
EL=50.000m
EL=49.000m
土
平面図
蔵骨器②
X=31657
Y=266651
X=31660
Y=266648
0
1m
(S=1/40)
岩盤
縦断図
SP
SP
EL=51.000m
EL=50.000m
EL=49.000m
墓室横断図
SP
SP
EL=51.000m
EL=50.000m
EL=49.000m

第Ⅳ - 6図　5号墓

図版Ⅳ－２　２号墓 検出状況

図版Ⅳ－３　３号墓 検出状況

図版Ⅳ - 4　４号墓 検出状況

図版Ⅳ - 5　５号墓 検出状況

２号墓 調査前現況

２号墓 伐採後状況

２号墓 墓室内検出作業状況

２号墓 検出状況

２号墓 検出状況

２号墓 蔵骨器取り上げ後状況

２号墓 墓室内完掘状況

２号墓 埋め戻し状況

図版Ⅳ - ６　２号墓

3号墓 調査前現況

3号墓 伐採後状況

3号墓 墓室内検出作業状況

3号墓 墓室内検出状況

3号墓 完掘状況

3号墓 完掘状況

3号墓 完掘状況

3号墓 埋戻し完了状況

図版Ⅳ - 7　3号墓

4号墓 調査前現況

4号墓 伐採後状況

4号墓 墓室内検出作業状況

4号墓 墓室内検出状況

4・5号墓 検出状況

4号墓 蔵骨器取り上げ作業状況

4号墓 完掘状況

4号墓 埋め戻し完了状況

図版Ⅳ - 8　4号墓

5号墓 調査前現況

5号墓 伐採後状況

5号墓 墓室内検出作業状況

5号墓 墓室内検出状況

5号墓 墓室内検出状況

5号墓 蔵骨器取り上げ作業状況

5号墓 完掘状況

5号墓 埋め戻し完了状況

図版Ⅳ - 9　5号墓

3. 遺物

遺物は陶器製の厨子甕の身と蓋が中心で、副葬品として金属製品のジーファー（簪）やキセルが出土している。以下遺構別に出土遺物について概説する。

2号墓

12・13は厨子甕である。12は身と蓋のセットで銘書が書かれている。銘書は身の屋門に朱で縦書に「道光二十年庚子四月十九日□□　／　男子山戸我如古妻かめ死去洗骨　／　同二十二歳壬寅七月七日□□」と書かれており、蓋には墨書で「亀川□當□　／　山東ヵ□□」（墨書）「道光二十年庚子四月　／　十九日□□山戸我如古□□　／　死去洗骨同二十二年　／　□寅ヵ七月七日□□□　／　□□□□□□とあり、1840（道光20）年頃に死去し、1842（道光22）年に洗骨を行ったことがわかる。2は身と蓋のセットで屋門に縦書きで「（不鮮明）□年□卯七月□□洗骨　／　佛ヵ骨□□妻ヵ□□」と銘書が墨書されており、蓋には「道光拾壱年辛卯　／　七月亡人□□我如古□□　／　洗骨佛ヵ□□□　／　妻ヵ□人」と墨書されている。

また、副葬品とみられるジーファーが3点出土している。

3号墓

14・15はマンガン掛け厨子である。14は身と蓋のセットで外面全体にマンガン釉が掛かる。4は口縁部から胴部下半までマンガン釉が掛かっている。銘書は見られない。

4号墓

15号墓では身と蓋セットで3個体（16～18）のマンガン掛け焼き締めの厨子甕が検出されている。銘書がみられるのは7の1点のみで「十□日　／　□日死去　／　十六年寅四月　／　洗骨　／　十日ヵ　／　七□ヵ」と墨書されている。干支からみて、光緒16年（明治23年、1890年）の洗骨とみられる。

また、副葬品としてジーファーやキセルなどの金属製品が6点検出されている。

5号墓

5号墓では身1点と蓋2点が検出されている。19は身と蓋のセットで身には屋門に縦書きで「明治廿九年」とあり、口縁に沿って「明治廿九年丁申旧四月八日死去　　喜友名村前□□内ヵ□女子父方ハいヵりヵ城田□（この間不明瞭・文字数不明）□旧十一月十四日」と墨書されている。身の口縁部には内面に放射状に墨書されており、「明治廿九年丁申旧四月八日死去　／　歳ハ四十三　／　喜友名村前□當□蒲女子　／　父方ハいり城田　／　洗骨ハ右世一年旧十一月十四日」とある。この他、記号のような墨痕がある。身と蓋の銘書の情報を合わせると明治29（1896）年の旧歴4月8日に死去した喜友名村の女性であることがわかる。

第Ⅳ－２表　厨子観察表－１

単位：cm

遺物№		分類	機種	上部径 器高 下部径	所見 （器形・成形手法）	文様・銘書 （銘書凡例　□：釈読不可、／：改行位置）	出土地
図版Ⅳ－Ⅳ－7－図10	12	マンガン掛	蓋	12.9 16.5 26.3	成形・調整 ミズビキ成形。 外面：つまみ部回転ヨコナデ、胴部上半回転ヘラケズリ、口縁部回転ヨコナデ。 内面：口縁部回転ヨコナデ。口縁部にカエリあり（高さ1mm）。 つまみ：宝珠型、有孔。頂部に凹みあり。内部は中空。ヘラによる穿孔。 つまみ台：1段。 釉薬：外面全体にマンガン釉。	文様：つまみ台の上面に圏線2条。口縁部カエリに沿って凹線1条。 銘書：内面2ヶ所に書かれる。墨書・朱書1ヶ所ずつ。 「亀川□當□　／　山東ヵ□□」（墨書） 「道光二十年庚子四月　／　十九日□□山戸我如古□□　／　死去洗骨同二十二年　／　□寅／　□寅ヵ七月七日□□□　／　□□□□□□」 この他、記号のような墨書ないし墨痕あり。	2号墓 墓室内
			身	34.7 67.4 26.0	成形・調整 外面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ、胴部下半～底部静止ヘラケズリ。 内面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ。底部静止ヘラケズリ後ナデ。 底部孔：7ヶ所・半月形。 屋門：唐破風型。下端は横帯4まで。柱貫あり。破風・柱・柱貫に凹線各1条。破風頂部および柱基部に玉飾。いずれも貼付後指オサエ。 窓：3ヶ所、方形。 釉薬：外面口縁部～胴部下半にマンガン釉。	文様 頸部：（上から）櫛描波状文5条、沈線1条、櫛描波状文8条、沈線1条、櫛描波状文8条。波状文は施文後に一部ナデ消される。 胴部：型による貼付（花弁・葉）と2条1組の工具による線彫り（茎）の蓮華文。貼花には線刻による細部表現あり。 胴下部：（上から）櫛描波状文8条、沈線4条、櫛描波状文８条。波状文は書き足しあり。波状文→沈線の順に施文。波状文は施文後に一部ナデ消される。 横帯 1：沈線2条、2：突帯1条、3：突帯3条、4：突帯3条。 銘書 屋門に縦書きで朱書。「道光二十年庚子四月十九日□□　／　男子山戸我如古妻かめ死去洗骨　／　同二十二歳壬寅七月七日□□」	
図版Ⅳ－Ⅳ－8－図10	13	マンガン掛	蓋	11.4 16.4 30.4	成形・調整 ミズビキ成形。 外面：つまみ部回転ヨコナデ、胴部下半まで回転ヘラケズリ、口縁部回転ヨコナデ。 内面：口縁部回転ヨコナデ。口縁部にカエリあり（高さ5mm）。 つまみ：宝珠型、有孔。内部は中空。ヘラによる穿孔。 つまみ台：2段。 釉薬：外面全体にマンガン釉。	文様：つまみ台2ヶ所の上面に圏線各2条。胴部に圏線1条。 銘書：内面に放射状に書かれる。 「道光拾壱年辛卯／　七月亡人□□我如古□□　／　洗骨佛ヵ□□□／　妻□人」	2号墓 墓室内
			身	30.5 65.7 25.0	成形・調整 外面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ、胴部下半板ナデ、底部静止ヘラケズリ。 内面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ。底部静止ヘラケズリ後ナデ。 底部孔：5ヶ所・半月形。 屋門：唐破風型。下端は横帯4を貫通する。柱貫あり。破風上部に凹線1条。破風・柱・柱貫に凹線各1条。屋門頂部に1個の玉飾、柱基部に花弁（4弁）を伴う玉飾各1基。各々の花弁には片彫り沈線3条。 窓：3ヶ所。方形。 釉薬：頸部・屋門除く外面全体にマンガン釉。口縁部内面に一部釉垂れあり。	文様 頸部：線彫り（太い）蓮弁文。8単位。背面のみ単位異なる。2条1組の工具による。 胴部：貼付（法師1対、花弁・葉）と線彫り（茎）による文様。貼花は型押し。法師像・花弁には線刻による花や葉の細部表現あり。線彫りは2条1組の工具による。 胴下部：突帯1条（突帯上に沈線2条を巡らす）。 横帯 1：沈線2条、2：突帯1条、3：突帯3条、4：突帯1条（突帯上に沈線2条を巡らす）。 銘書 屋門に縦書きで墨書。「（不鮮明）□年□卯七月□□洗骨　／　佛ヵ骨□□妻ヵ□□」	
図版Ⅳ－Ⅳ－9－図11	14	マンガン掛	蓋	7.2 10.0 19.0	成形・調整 ミズビキ成形。 外面：つまみ部回転ヨコナデ、胴部上半回転ヘラケズリ、胴部下半～口縁部回転ヨコナデ。 内面：口縁部回転ヨコナデ。口縁部にカエリあり（高さ1mm）。 つまみ：宝珠型、有孔。内部は中空。ヘラによる穿孔。 つまみ台：2段。 釉薬：外面全体にマンガン釉。鍔～内面にも部分的に釉の付着あり（指頭の痕跡か）。	文様：つまみ台（上段）の上面に圏線1条。鍔部に圏線1条。 銘書：なし。	3号墓 墓室内
			身	21.7 46.5 19.1	成形・調整 外面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ、胴部下半～底部静止ヘラケズリ。 内面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ。部分的に板ナデ残る。底面静止ヘラケズリ後ナデ。 底部孔：6ヶ所・半円形。 屋門：アーチ型。下端は横帯4まで。柱上面は平坦に面取り。工具痕残る。屋門頂部・柱基部に各1個の玉飾。 窓：3ヶ所。隅丸方形。 釉薬：外面全体にマンガン釉。口縁部内面にも釉垂れあり。	文様 頸部：線彫りによる下向き・三又状の葉文。枝→葉の順に施文。2条1組の工具による。 胴部：線彫りによる蓮華文。2条1組の工具による。 胴下部：（上から）櫛描波状文2条、沈線3条。一部不明瞭。 横帯：1：沈線2条、2：突帯1条、3：沈線3条、4：沈線3条。 銘書 なし。	
図版Ⅳ－Ⅳ－10－図11	15	マンガン掛	身	28.8 54.3 22.1	成形・調整 外面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ、胴部下半回転ヘラケズリ、底部静止ヘラケズリ。 内面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ。底部静止ヘラケズリ後ナデ。 底部孔：6ヶ所・半円形。 屋門：アーチ型。下端は横帯4まで。柱貫あり。柱外縁に沿って凹線1条。屋門頂部・柱基部に各１個の玉飾。貼付後指オサエ。 窓：3ヶ所。隅丸長方形。 釉薬：外面口縁部～胴部下半（屋門銘書面除く）にマンガン釉。口縁部内面に釉による指頭の痕跡あり。	文様 頸部：（上から）線彫りによる下向きの蓮弁文と上向きの草文（6単位）、波状文2条。2条1組の工具による。 胴部：線彫りによる蓮華文。2条1組の工具による。 胴下部：（上から）波状文2条、沈線3条、波状文2条（部分的にナデ消し）。 横帯 1：沈線2条、2：突帯1条、3：沈線3条、4：沈線3条。 銘書 なし。	3号墓 墓室内

（かっこ内は想定値）

第Ⅳ－３表　厨子観察表－2

単位：cm

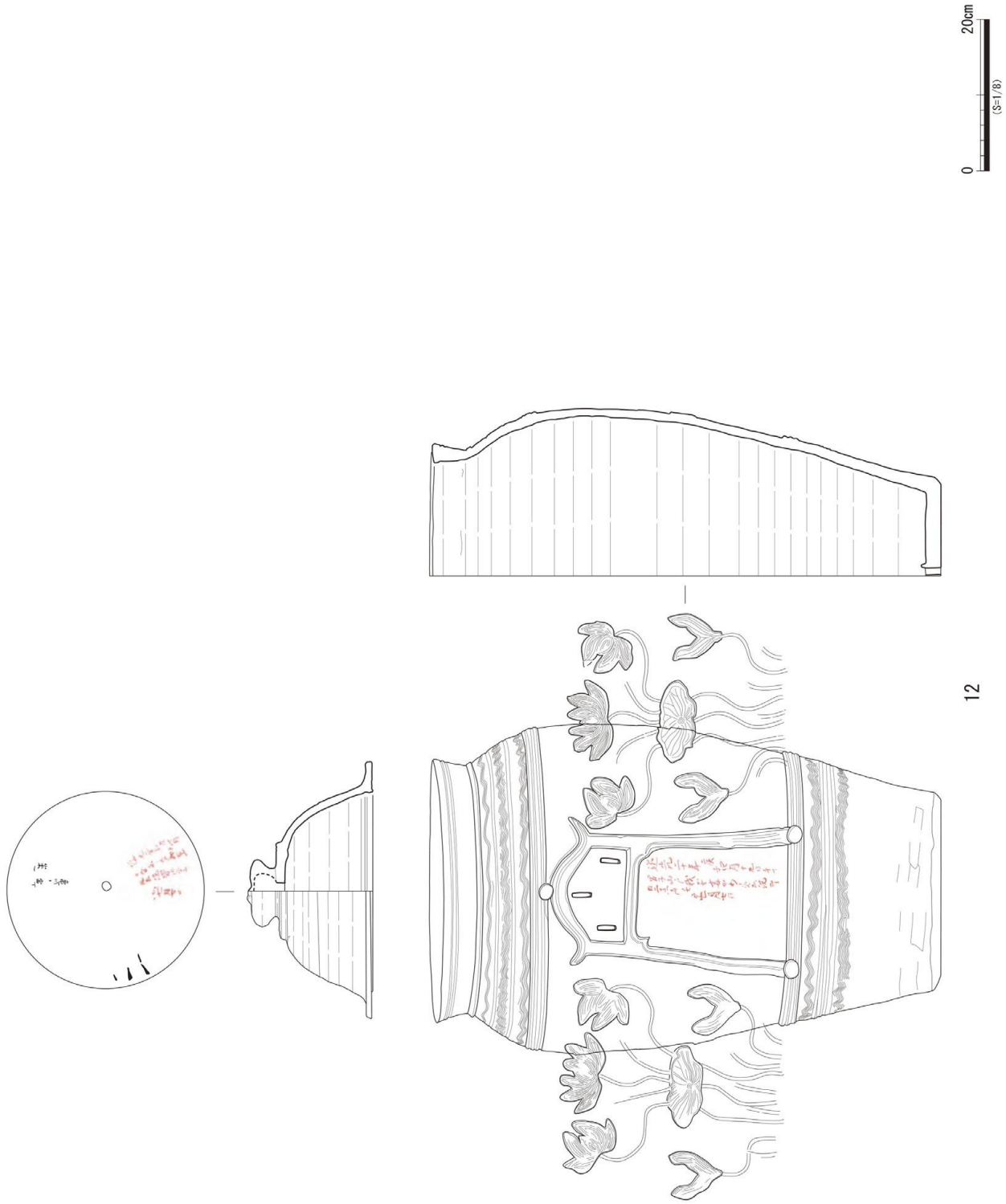
図版№		種別	器種	上部径 器高 下部径	所見 （器形・成形手法）	文様・銘書 （銘書凡例　□：釈読不可、／：改行位置）	出土地
第Ⅳ図版－Ⅳ－11－図12	16	マンガン掛	蓋	10.1 16.0 27.7	成形・調整 ミズビキ成形。 外面：つまみ部回転ヨコナデ、胴部上半回転ヘラケズリ、口縁部回転ヨコナデ。 内面：口縁部・天井部回転ヨコナデ。口縁部にカエリあり（高さ1㎜）。 つまみ：宝珠型、有孔。内部は中空。ヘラによる穿孔。 つまみ台：1段。 釉薬：外面全体にマンガン釉。	文様：なし。 銘書：なし。	4号墓 墓室内
			身	26.3 19.5 50.3	成形・調整 外面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ、胴部下半～底部静止ヘラケズリ。 内面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ。胴部上半に板ナデ痕跡。底部静止ヘラケズリ後ナデ。 底部孔：6ヶ所・半月形。 屋門：アーチ型。下端は横帯4まで。屋門頂部・柱基部に各1個の玉飾。柱とほぼ一体化する。 窓：3ヶ所。方形。 釉薬：外面口縁部～胴部下半（屋門銘書面除く）にマンガン釉。	文様 頸部：（上から）櫛描波状文2条、沈線2条、櫛描波状文2条、沈線2条、櫛描波状文2条。 胴部：線彫りによる蓮華文。2条1組の工具による。 胴下部：（上から）櫛描波状文2条、沈線2条、櫛描波状文2条。 横帯 1：沈線2条、2：突帯1条、3：突帯3条、4：沈線3条 銘書 なし。	
第Ⅳ図版－Ⅳ－12－図12	17	マンガン掛	蓋	11.3 16.2 30.2	成形・調整 ミズビキ成形。 外面：つまみ部回転ヨコナデ、胴部上半回転ヘラケズリ、口縁部回転ヨコナデ。 内面：口縁部回転ヨコナデ。口縁部にカエリあり（高さ2㎜）。 つまみ：宝珠型、有孔。内部は中空。ヘラによる穿孔。 つまみ台：1段。 釉薬：外面全体にマンガン釉。	文様：つまみ台の上面に圏線1条。 銘書：文字はないが、何らかの墨書あり。	4号墓 墓室内
			身	26.4 45.4 17.8	成形・調整 外面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ、胴部下半～底部静止ヘラケズリ。 内面：口縁部～胴部上半回転ヨコナデ。胴部下半板ナデ。底部静止ヘラケズリ後ナデ。 底部孔：10ヶ所・半月形。 屋門：アーチ型。下端は横帯4まで。屋門頂部は面取り。屋門中央に成形時の工具痕残る。柱外縁に沿って凹線1条屋門頂部・柱基部に各1個の玉飾。貼付後指オサエ。 窓：2ヶ所（左右）。方形。 釉薬：外面口縁部～胴部下半にマンガン釉。	文様 頸部：線彫りによる蕉葉文（6単位）。ハの字状、一部三又状。2条1組の工具による。 胴下部：（上から）櫛描波状文2条、沈線2条、櫛描波状文2条。 胴部：線彫りによる蓮華文。2条1組の工具による。 横帯 1：沈線2条、2：突帯1条、3：突帯2条、4：沈線2条。 銘書 なし。	
第Ⅳ図版－Ⅳ－13－図12	18	マンガン掛	蓋	- (8.2) (25.6)	成形・調整 ミズビキ成形。 外面：胴部上半回転ヘラケズリ、口縁部回転ヨコナデ。 内面：口縁部回転ヨコナデ。口縁部にカエリあり（高さ1㎜）。 つまみ：残存せず。 つまみ台：1段以上（基部のみ確認）。 釉薬：外面全体にマンガン釉。	文様：不明。 銘書：内面に放射状に書かれる。 「十□日　／　□日死去　／　十六年寅四月　／　洗骨　／　十日ヵ　／　七□ヵ」	4号墓 墓室内
			身	26.3 47.7 20.0	成形・調整 外面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ、胴部下半～底部静止ヘラケズリ。 内面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ。一部板ナデ残る。 底部孔：底面に14ヶ所・円形。側面に11ヶ所・円形。 屋門：アーチ型か（残存不良）。下端は横帯4まで。柱基部に各1個の玉飾。 窓：左に痕跡のみ残存。方形。 釉薬：外面全体にマンガン釉。	文様 頸部：線彫りによる下向き・三又状の葉文。4単位（推定）。2条1組の工具による 胴部：線彫りによる蓮華文。2条1組の工具による。 胴下部：（上から）波状文2条、沈線1条、波状文2条、沈線2条。 横帯 1：沈線2条、2：突帯1条、3：沈線4条、4：沈線2条 銘書 なし。	
第Ⅳ図版－Ⅳ－14－図13	19	マンガン掛け	蓋	10.3 14.1 27.4	成形・調整 ミズビキ成形。 外面：つまみ部回転ヨコナデ、胴部上半回転ヘラケズリ、口縁部回転ヨコナデ。 内面：口縁部・天井部回転ヨコナデ。口縁部にカエリあり（高さ2㎜）。 つまみ：宝珠型、無孔。内部は中空。ヘラによる穿孔。 つまみ台：2段（緩い）。 釉薬：外面全体にマンガン釉。	文様：つまみ台上段上面・下段側面に圏線各1条。 銘書：内面に放射状に書かれる。 「明治廿九年丁申旧四月八日死去　／　歳ハ四十三　／　喜友名村前□當□蒲女子　／　父方ハいり城田　／　洗骨ハ右世一年旧十一月十四日」 この他、記号のような墨書ないし墨痕あり。	5号墓 墓室内
			身	26.6 54.9 17.9	成形・調整 外面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ、胴部下半回転ヘラケズリ、底部静止ヘラケズリ。 内面：口縁部～胴部下半回転ヨコナデ。底部静止ヘラケズリ後ナデ。 底部孔：底面に15ヶ所・半円形。側面に17ヶ所・半円形、斜め向きに穿孔。 屋門：アーチ型。下端は横帯4まで。柱中央に凹線1条。屋門頂部に1＋3個、柱基部に各1個、柱下部に3個の玉飾。 釉薬：外面全体にマンガン釉。	文様 頸部：（上から）櫛描波状文2条、線彫りによる下向き・三又状の葉文。4単位。2条1組の工具による。 胴部：線彫りによる蓮華文。2条1組の工具による。 胴下部：（上から）櫛描波状文3条、沈線2条、櫛描波状文3条。 横帯 1：沈線2条、2：沈線1条（痕跡のみ）、3：沈線4条、4：沈線5条。 銘書 屋門：縦書きに墨書。「明治廿九年」 口唇上：口縁に沿って墨書。「明治廿九年丁申旧四月八日死去　喜友名村前□□内ヵ□女子父方ハいりヵ城田□（この間不明瞭・文字数不明）□旧十一月十四日」	
	20	マンガン掛け	蓋	9.1 16.1 28.6	成形・調整 ミズビキ成形。 外面：つまみ部回転ヨコナデ、胴部上半回転ヘラケズリ、口縁部回転ヨコナデ。 内面：口縁部・天井部回転ヨコナデ。口縁部にカエリあり（高さ2㎜）。 つまみ：宝珠型、有孔。内部は中空。ヘラによる穿孔。 つまみ台：2段。 釉薬：外面全体にマンガン釉。口縁部内面に釉による指頭の痕跡。	文様：つまみ台上段上面に圏線2条、下段上面に圏線1条。 銘書：なし。	5号墓 墓室内

第Ⅳ－４表　その他の遺物観察表

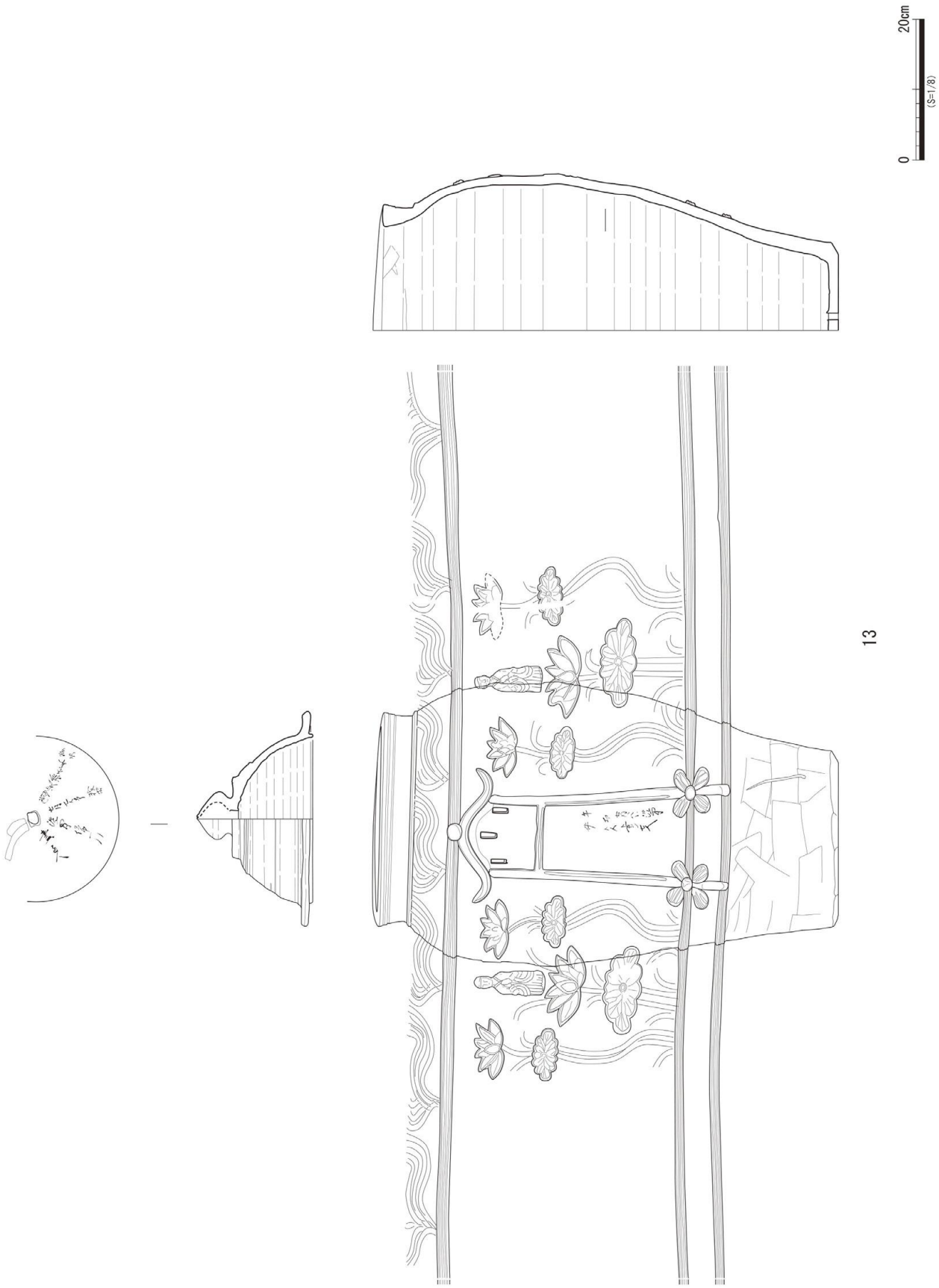
図版№		種別	器種	部位	観察事項	出土地
図版Ⅳ－15－図14	6	金属製品	ジーファー	完形	頂部は花形で、花弁は6枚。弁先の平面形はやや丸みを帯びた三角形。花部は本体から剥離する。首部の断面形は六角形。ムディの断面形は円形で、螺旋状の捻りがみられる。竿部の断面は四角形で、先端は四角錘になる。 重量27.0g、上径部11.6cm、器高1.6cm、下径部2.3cm。	２号墓 墓室内
	7	金属製品	ジーファー	完形	頭部は耳かき型。首部の断面形は円形。竿部の断面は六角形。先端丸い。竿部は湾曲著しい。重量8.9g、上径部18.0cm、器高0.5cm、下径部1.7cm。	２号墓 墓室内
	8	金属製品	ジーファー	花部	本体から遊離した花部。型押しによる成形。花弁は6枚で、弁先の平面形はやや丸みを帯びた三角形。中央の房子は1＋6個で、いずれも外径3mm・内径1mm程度。 重量2.7g、上径部2.5cm、器高0.5cm、下径部2.3cm。	２号墓 墓室内
図版Ⅳ－16－図15	9	金属製品	ジーファー	完形	頭部は耳かき型。頸部の断面形は円形。竿部の断面は六角形。先端尖る。全体に錆の付着が著しい。重量4.6g、上部径9.5cm、器高0.5cm、下部径1.0cm。	４号墓 墓室内
	10	金属製品	ジーファー	完形	頂部は6枚の花弁形で、弁先はやや丸みを帯びる。花部は本体から剥離する。中央は円形に凹む。首部の断面形は六角形。ムディの断面形は円形。竿部の断面は四角形で、先端は四角錘。重量8.5g。上部径10.4cm、器高2.1cm、下部径2.5cm。	４号墓 墓室内
	11	金属製品	ジーファー	完形	頸部は耳かき型。首部の断面形は円形。竿部の断面は六角形。先端丸い。重量6.0g、上部径17.0cm、器高0.3cm、下部径0.5cm。	４号墓 墓室内
	12	金属製品	煙管	吸口	銅板を溶接して作出。外面に3条の沈線と連続する長径3mm程度の楕円形の型押しによる施文。吸口部・羅宇結合部内面に羅宇の木質が一部残存。吸口外径0.7cm、羅宇結合部外径0.9cm、重量3.9ｇ、上部径3.4cm、器高1.0cm、下部径1.0cm。	４号墓 墓室内
				雁首	溶接により作出した棒状の素材を折り曲げて成形。外面に3条の沈線と連続する長径3mm程度の楕円形の型押しによる施文。羅宇結合部内面に羅宇の木質が一部残存する。火皿外径1.1cm、羅宇結合部外径0.9cm、重量5.3g、上部径3.3cm、器高1.6cm、下部径1.2cm。	
	13	金属製品	不明	完形	使用用途不明。平板な棒状の部材の両端に円形の穿孔をおこない、左側の孔には丸く綴じた銅板を挿入する。円柱部分に何かを差し込んで使用したものか。一部で使用による摩耗が認められる。重量3.2g、上部径5.7cm、器高0.7cm、下部径0.7cm。	４号墓 墓室内
図版Ⅳ－16	14	金属製品	指輪	完形	副葬品と見られる青銅製の指輪。幅0.4cm、暑さ0.1cm、直径1.9cm。	５号墓 蔵骨器②
	15	金属製品	指輪	完形	副葬品と見られる青銅製の指輪。16点出土。細い針金状の指輪。出土時まとまった状態だったためひとつの製品と見られる。直径1.7cm。	５号墓 蔵骨器②

第Ⅳ－５表　遺物集計表

種類	部位	2号墓	3号墓			4号墓	5号墓			合計
		墓室内	墓室内	蔵骨器①	蔵骨器②	墓室内	墓室内	蔵骨器②	客土	
マンガン掛　厨子甕	完形	2	2			2	1			7
	口縁～底部					1				1
マンガン掛 厨子甕（蓋）	完形	2	1			2	2			7
	破片					1				1
本土産磁器	口縁～底部	1								1
土器	破片			1	1					2
瓦	破片	2								2
指輪	完形							17		17
1セント硬貨	完形								1	1
簪（ジーファー）	完形	2				3				5
	頭部	1								1
煙管	吸口					1				1
	雁首					1				1
金属製品	不明					1				1
合計		10	3	1	1	12	3	17	1	48

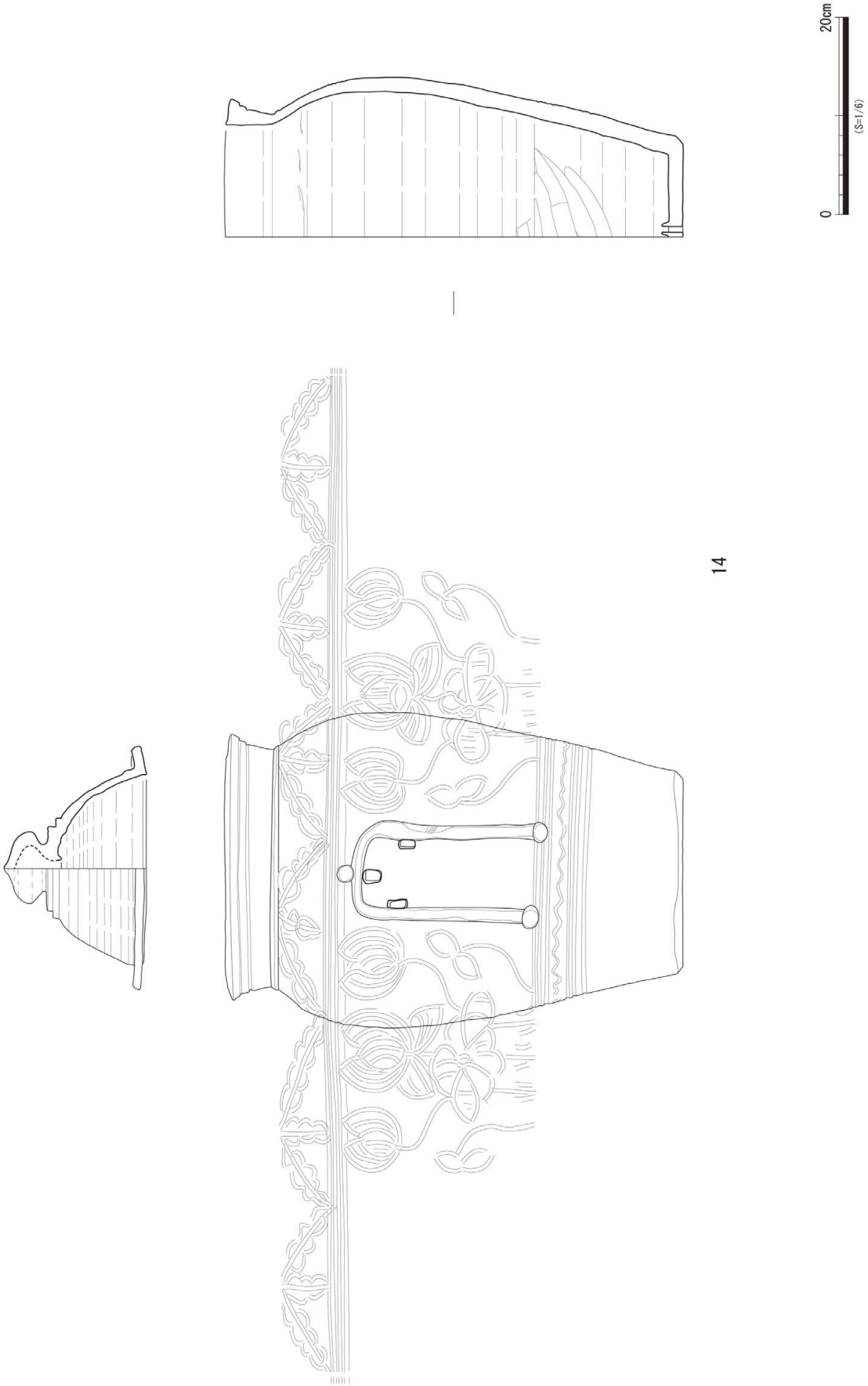


第Ⅳ－７図　２号墓　厨子（蔵骨器：身・蓋）

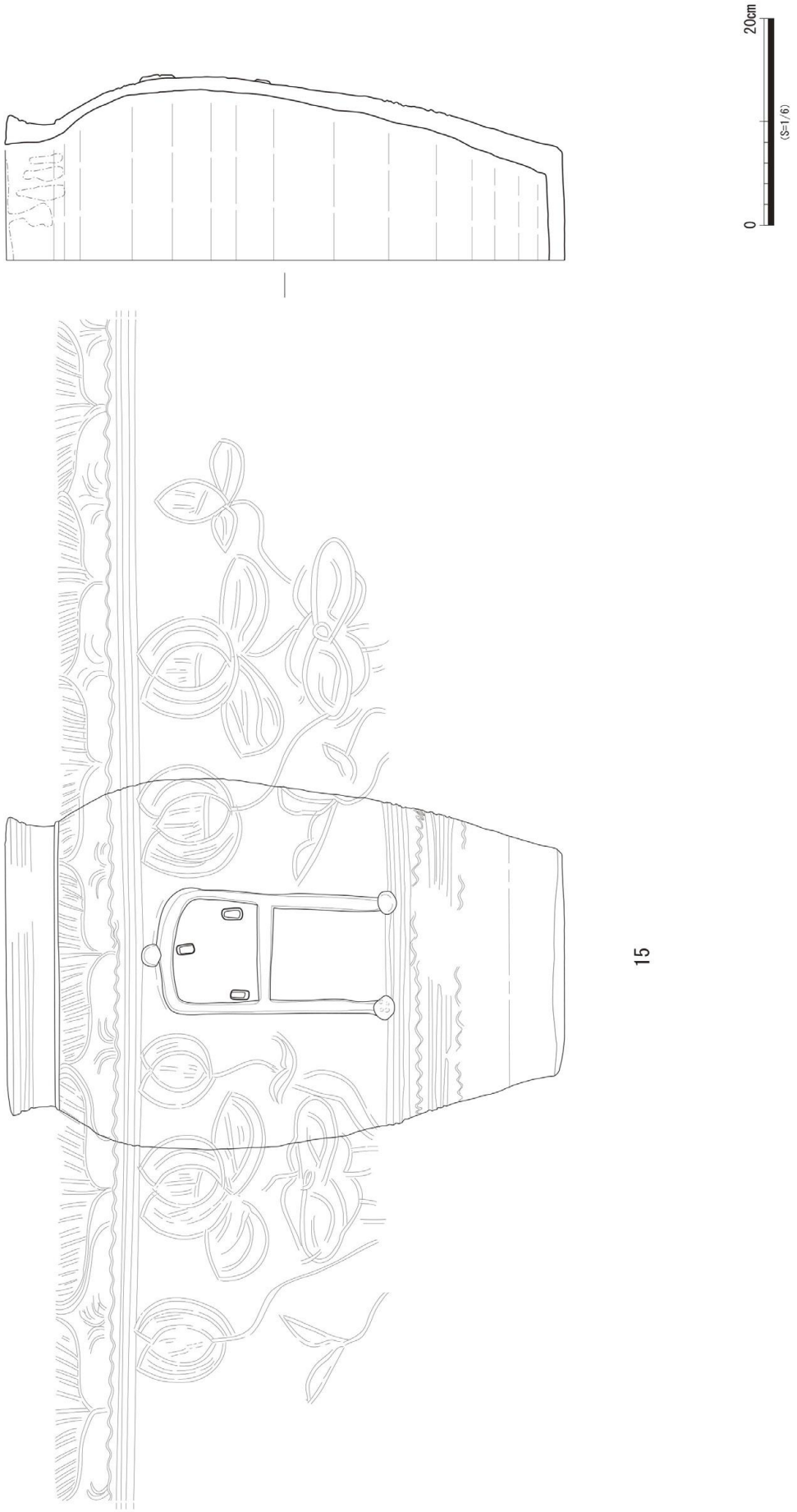


第Ⅳ－８図　２号墓　厨子（蔵骨器：身・蓋）

図版Ⅳ - 10　２号墓　厨子（蔵骨器：身・蓋）

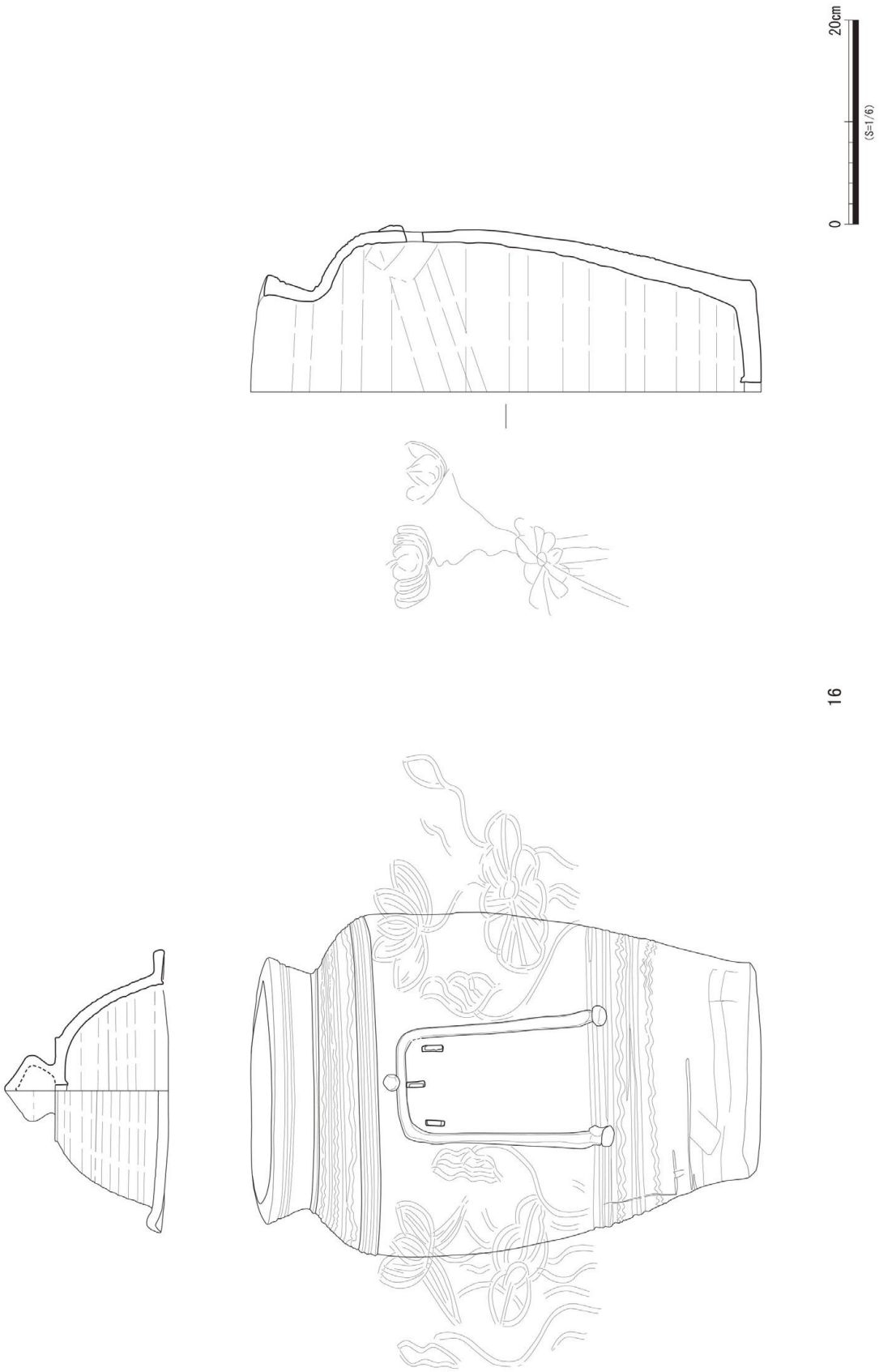


第Ⅳ - ９図　３号墓　厨子（蔵骨器：身・蓋）

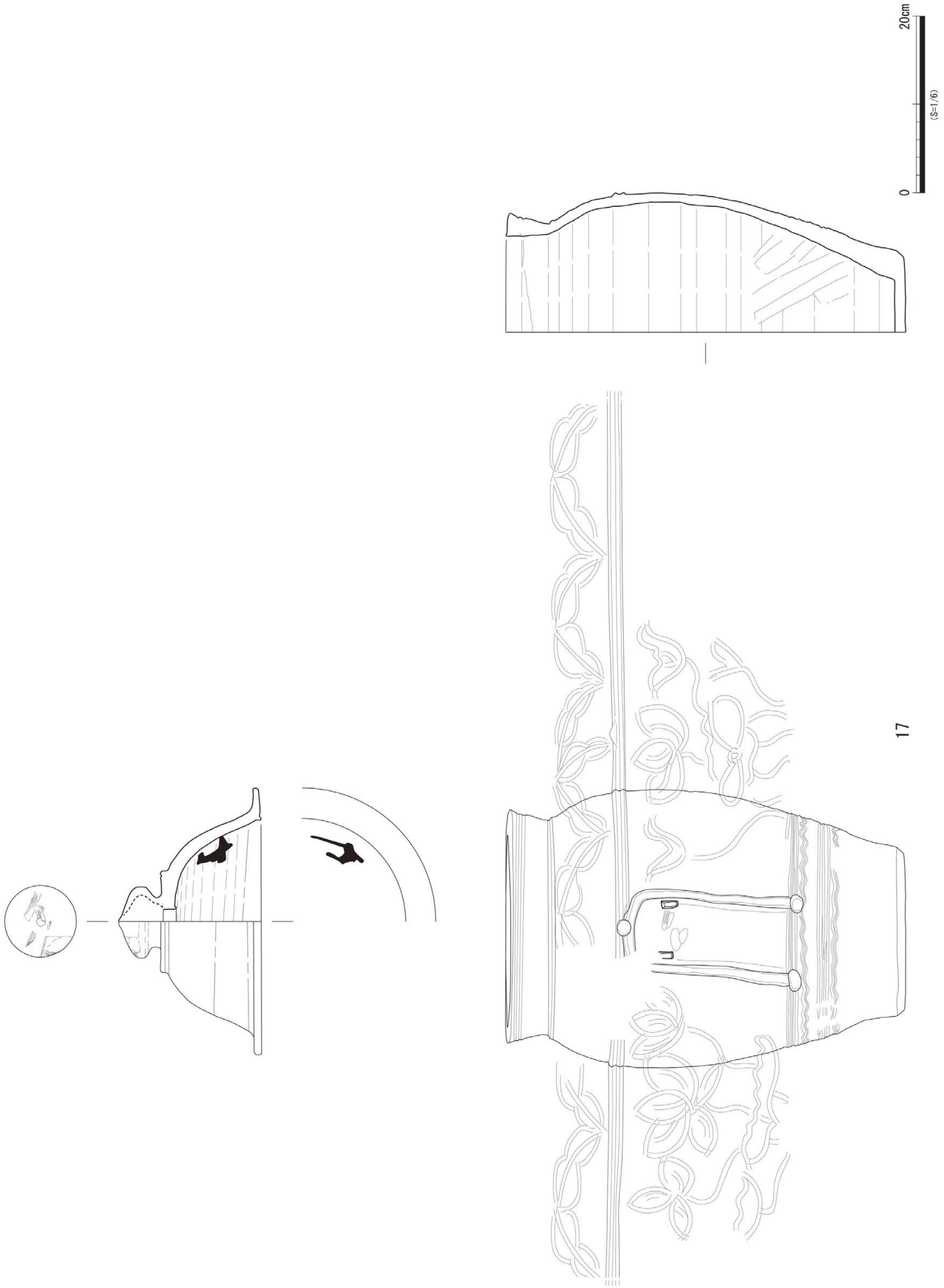


第Ⅳ - 10 図　３号墓　厨子（蔵骨器：身）

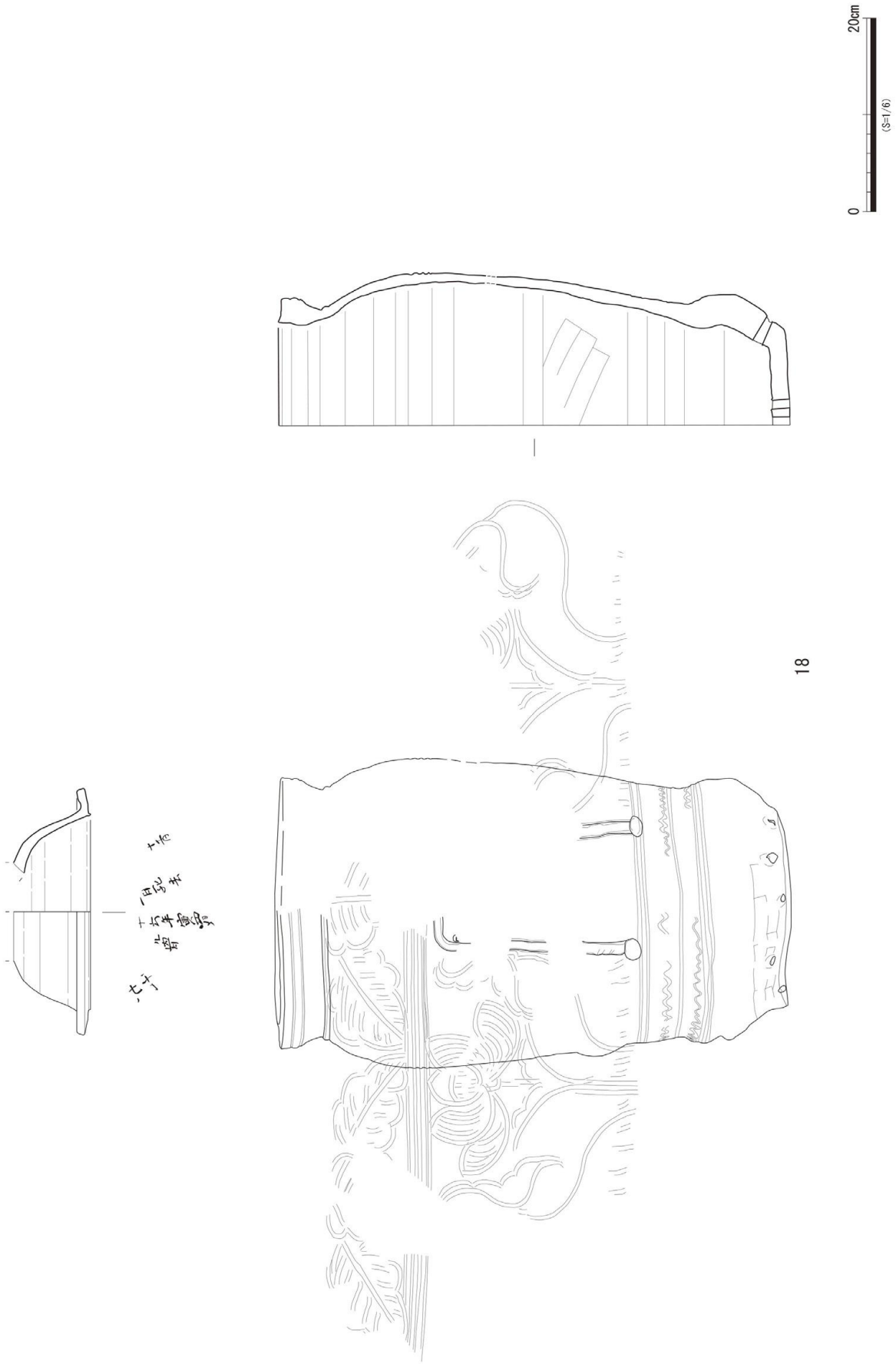
図版Ⅳ - 11　３号墓　蔵骨器　厨子（蔵骨器：身・蓋）



第Ⅳ - 11 図　４号墓　蔵骨器　厨子（蔵骨器：身・蓋）

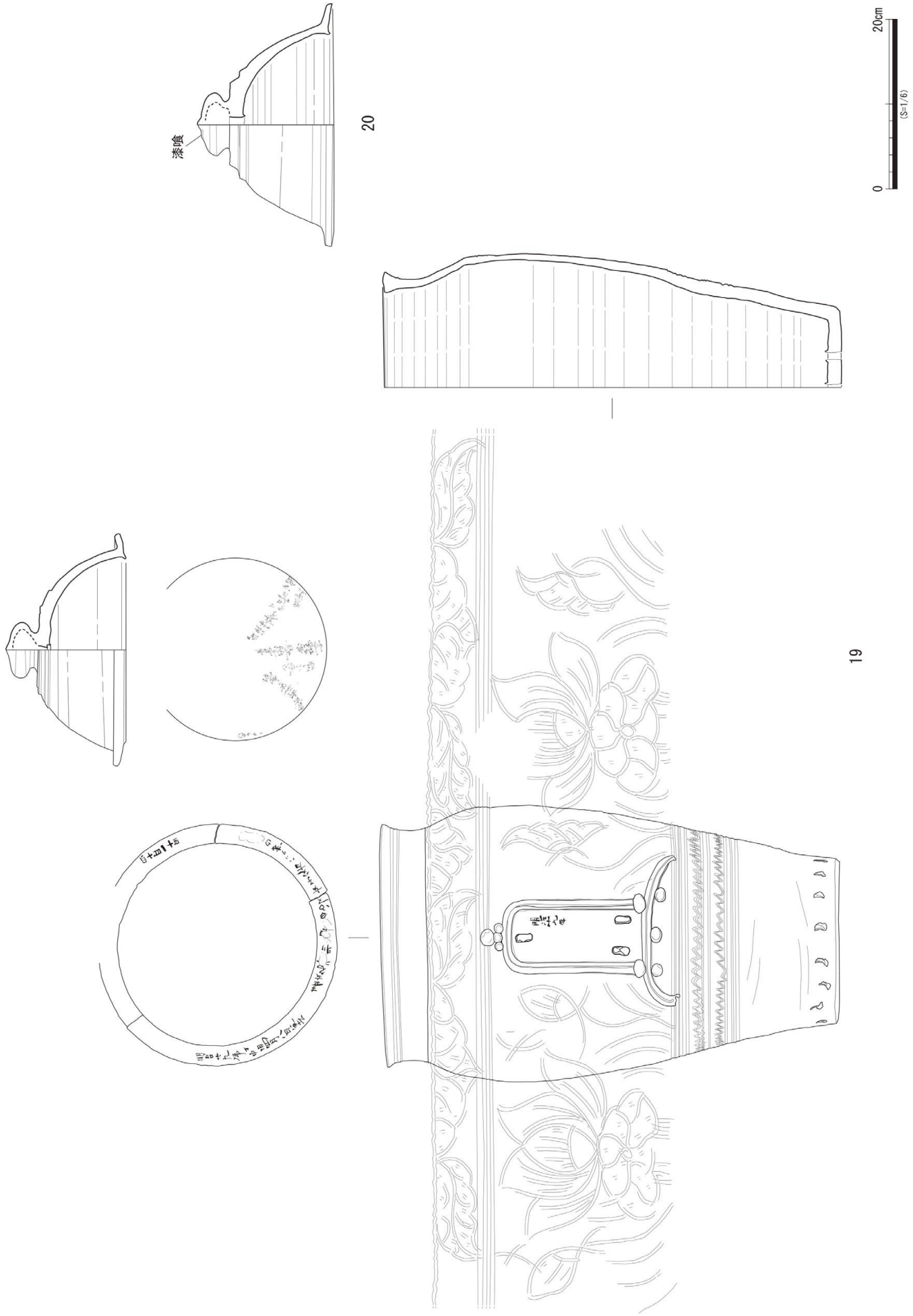


第Ⅳ - 12 図　4 号墓　厨子（蔵骨器：身・蓋）



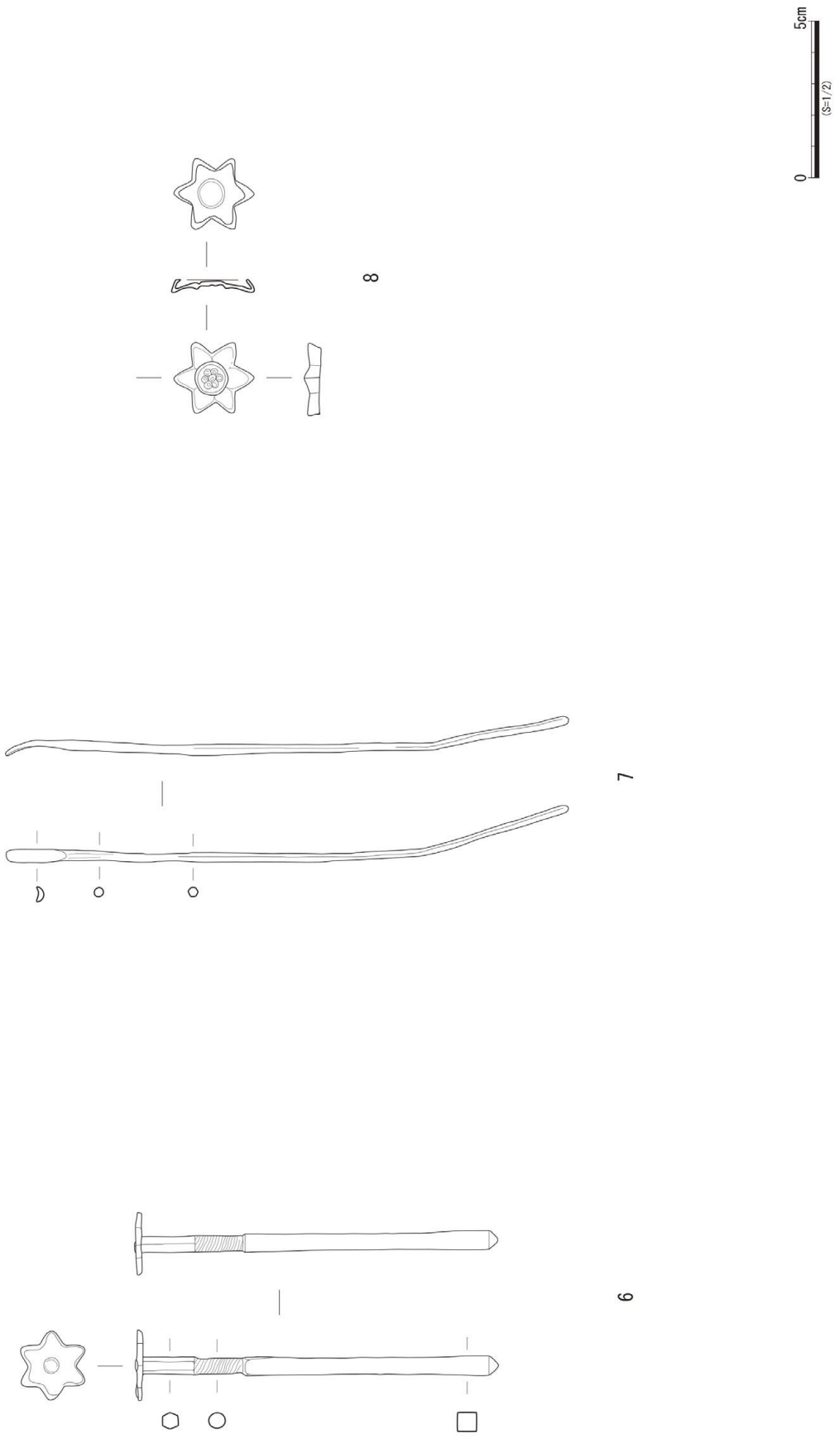
第Ⅳ - 13 図　４号墓　厨子（蔵骨器：身・蓋）

図版Ⅳ - 12　４号墓　厨子（蔵骨器：身・蓋）

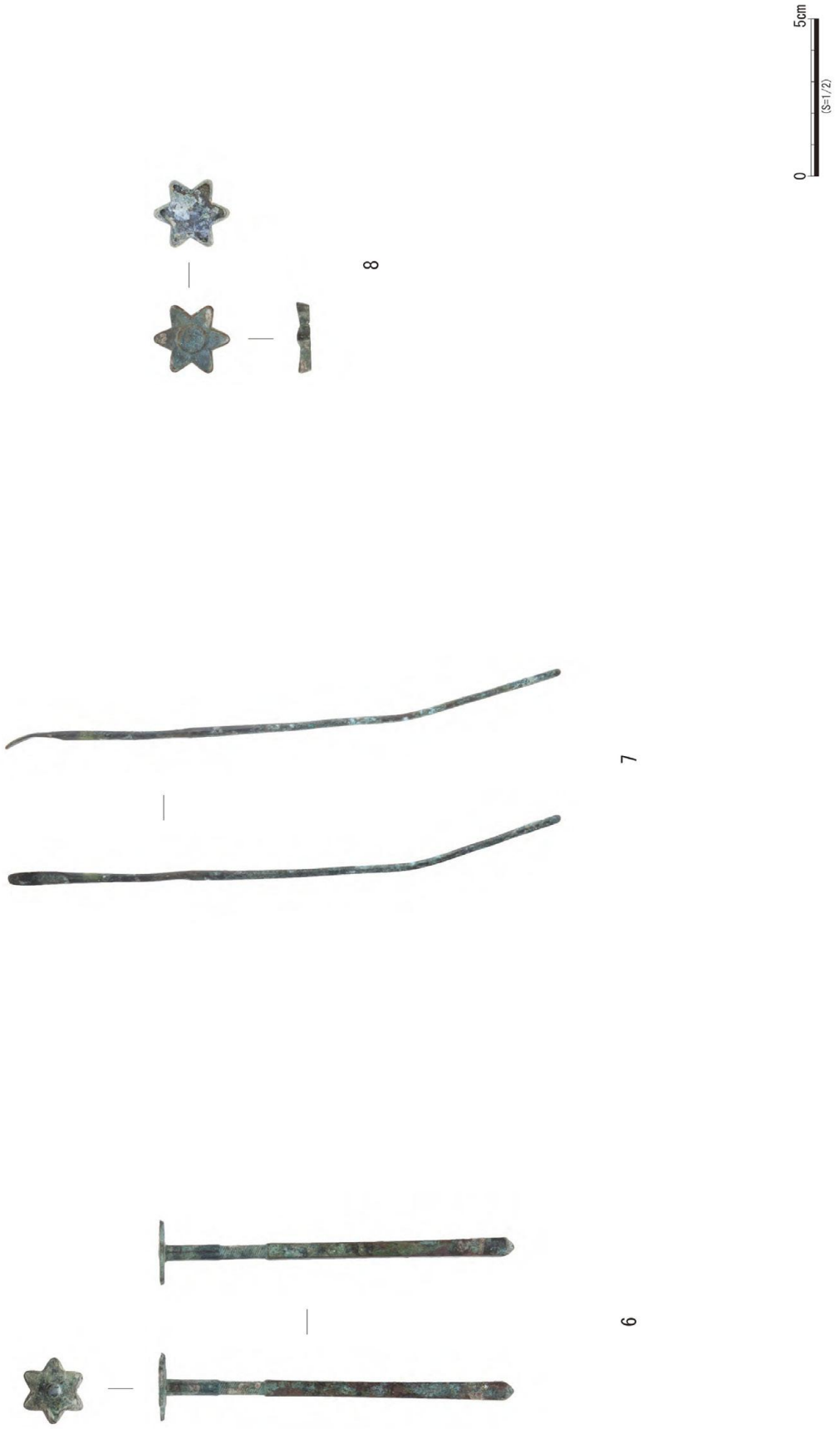


第Ⅳ - 14 図　5号墓　厨子（蔵骨器：身・蓋）

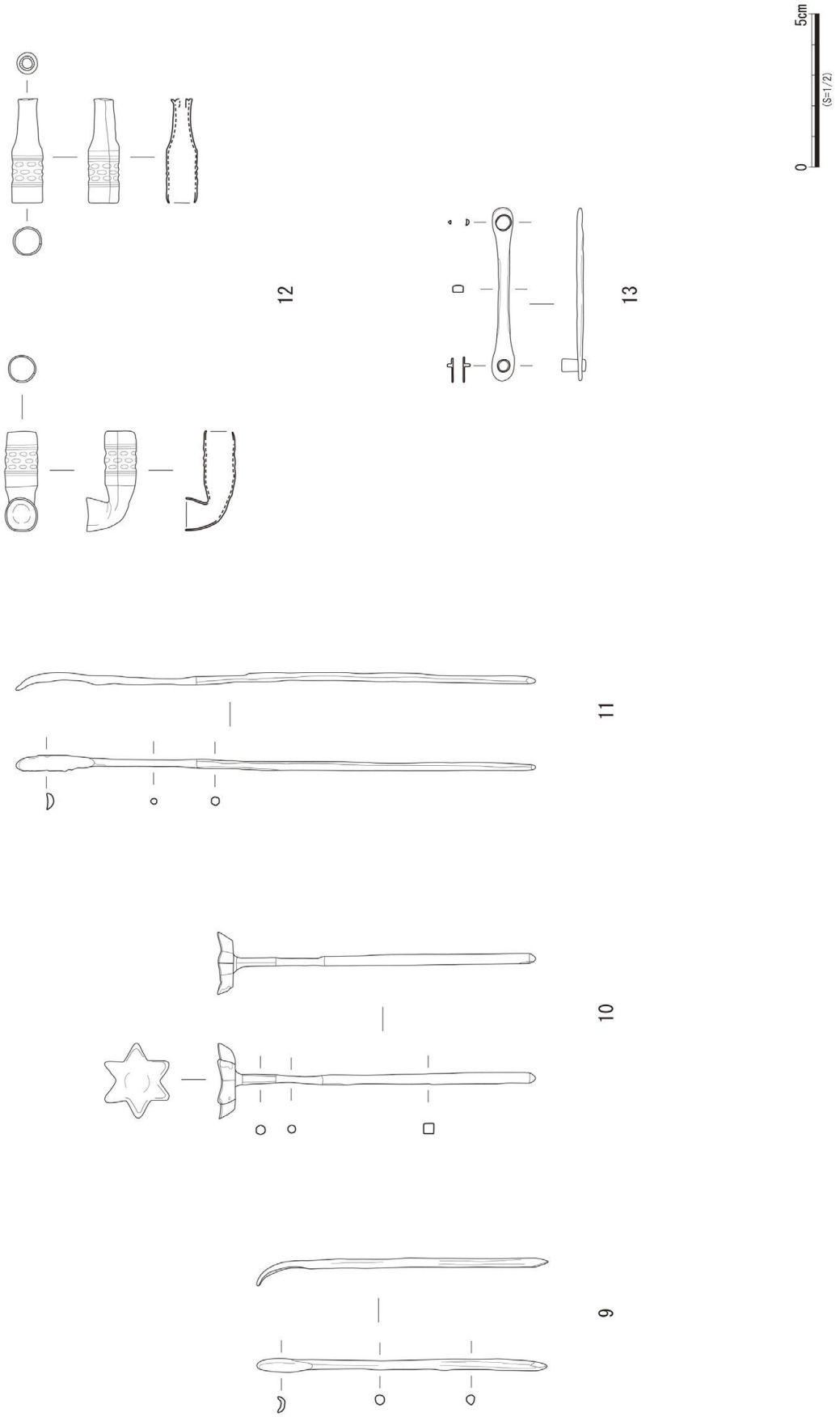
図版Ⅳ - 13　５号墓　厨子（蔵骨器：身・蓋）



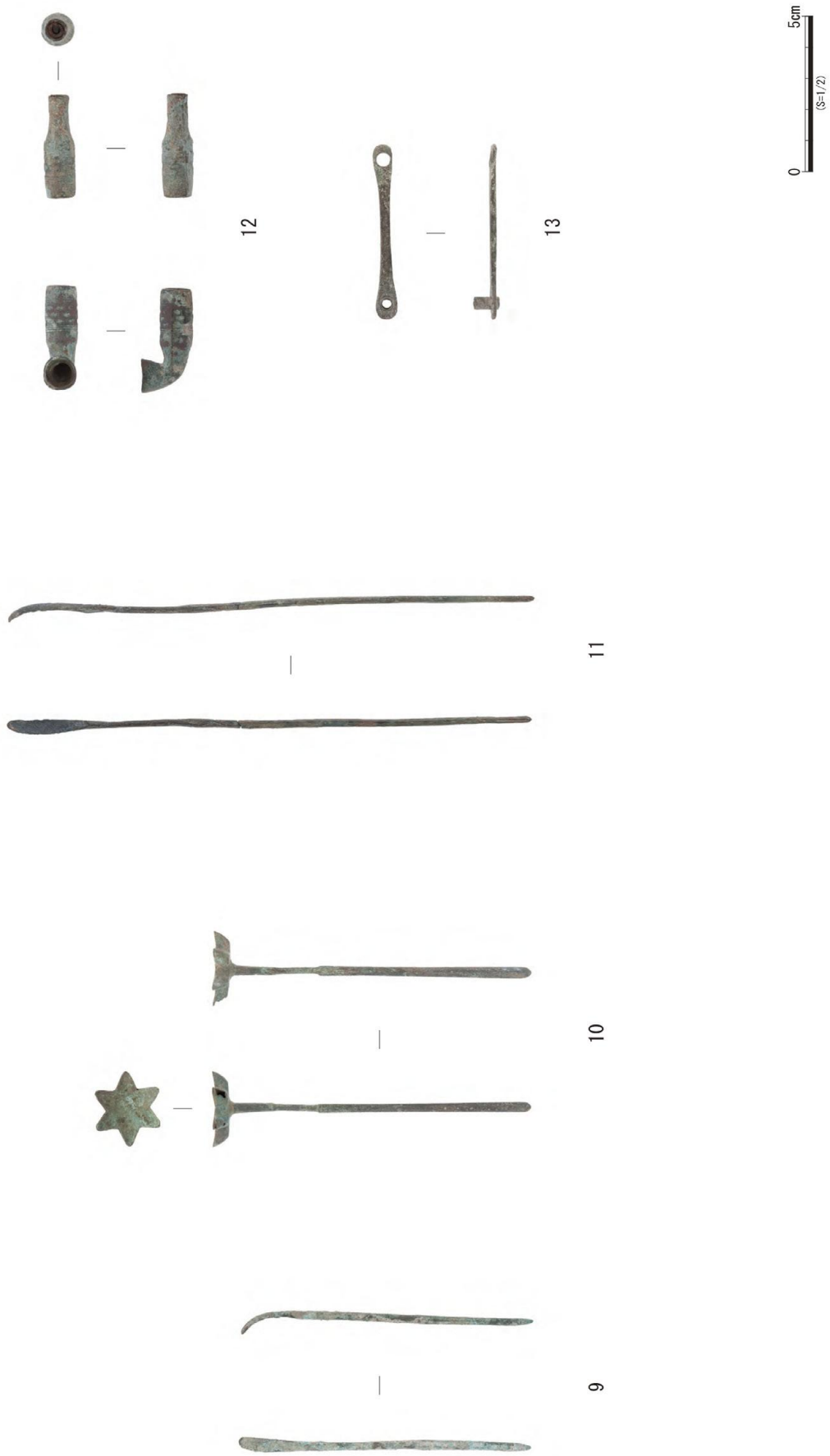
第Ⅳ - 15 図　２号墓　簪（ジーファー）



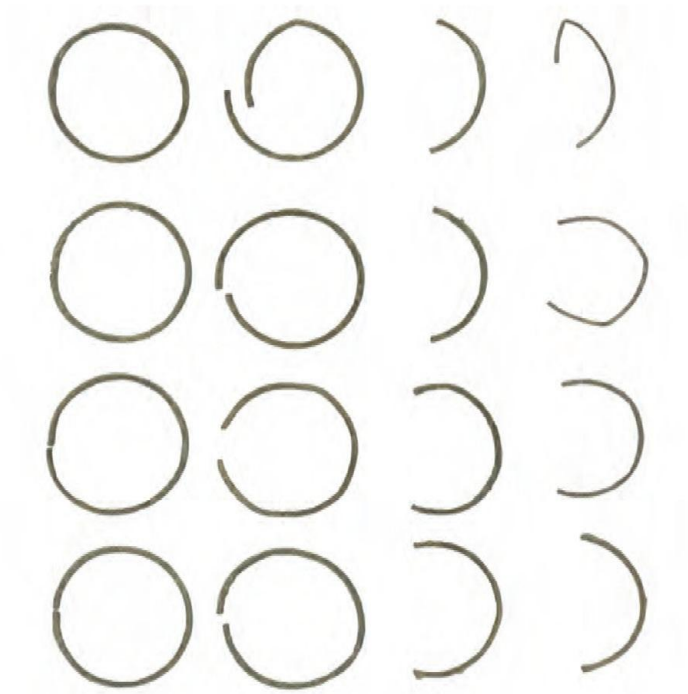
図版Ⅳ - 14　２号墓　簪（ジーファー）



第Ⅳ - 16 図　４号墓　簪（ジーファー）（9 ～ 11）・煙管（キセル）（12）・金属製品（13）



図版Ⅳ-15　４号墓　簪（ジーファー）（9～11）・煙管（キセル）（12）・金属製品（13）



14

15

図版Ⅳ - 16　５号墓　指輪

第Ⅴ章　結語

第Ⅳ章まで安仁屋･新城イシジャー流域古墓群と喜友名山川原丘陵古墓群の調査成果について述べてきた。2つの遺跡は戦前から安仁屋集落と喜友名集落の墓域として知られている。今回調査で対象となった古墓は、基地を造成する際に埋もれてしまい、表面踏査では把握されず、沖縄防衛局の支障除去を機に不時発見された古墓が主体である。

安仁屋・新城イシジャー流域古墓群

安仁屋･新城イシジャー流域古墓群の中心はイシジャーと呼ばれる谷の両岸にある掘込墓（フィンチャー）が主体となっているが、今回調査した場所は遺跡の中心から外れた谷の頂部から連なる丘陵部分となっており、亀甲墓や破風墓などが主体となっているため、比較的新しい墓域と考えられる。

70号墓と71号墓は当初墓口が埋もれており、未改葬と見られていたが、漆喰で固められた墓口を開けると、厨子等がない状態で、改葬済みという事が分かった。墓庭も一部残存しており、70号墓では礫を敷いて平場を造成していることが分かった。

79号墓は未改葬墓であったが、造成などで破壊をうけて墓室内の一部が残存するのみであった。墓室は岩陰を利用し、丁寧に石積みを積んで造られており、裏込めと見られる礫も確認することが出来た。

遺物は厨子等の古墓に関連したものが主体となっている。79号墓では雍正二（1724）年と書かれた石厨子も確認されている。

喜友名山川原丘陵古墓群

喜友名山川原丘陵古墓群は喜友名地域の墓域である。今回調査した古墓は掘込墓（フィンチャー）が主体となっている。ほとんどが屋根や墓口が破壊されているため、正面を装飾していたかは定かではないが、2号墓、4号墓、5号墓はタナを有しない狭い墓室内で、装飾を要しないタイプの古墓であったことが想定できる。3号墓についてはタナはないが、墓室内の床面は平らに整地されている。また、墓口にあたる部分に石列が見られるため、正面に石積み等があった可能性も示唆される。

全ての古墓に石厨子が1～3基入っており､骨も確認できた。遺物は主に厨子等とそれに伴う副葬品となっている。副葬品はジーファーや指輪・煙管が見られた。

以上、今回の調査では7基の不時発見の古墓を対象とした。重機で支障除去を行っていた際の発見であったため、その際に天井の一部や墓庭等がほとんど破壊されてしまったが、古墓群の拡がりを確認できた調査となった。

また、安仁屋・新城イシジャー流域古墓群は1950年代に墓立ち退き命令があったため、その多くが改葬され厨子等が残る墓はほとんどなく、平成26年度の調査では12号墓の厨子の銘書から、古墓群が利用された年代を「乾隆捨四年（1749年）」まで遡ると想定していたが、79号墓では雍正二（1724）年の石厨子が出土しており、安仁屋・新城イシジャー流域古墓群の利用時期が大きく遡ることとなっている。

【参考・引用文献】

上江洲均　1982『沖縄の暮らしと民具』慶友社

浦添市教育委員会　1997『伊祖入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』（浦添市文化財調査研究報告書）

浦添市教育委員会　2006『比嘉門中墓の家族史 / 比嘉門中墓の調査概要』（浦添市文化財調査研究報告書）

河名俊男　1988『琉球列島の地形』沖縄新星図書出版

宜野湾市教育委員会編　1989『土に埋もれた宜野湾』（宜野湾市文化財調査報告書第 10 集）

宜野湾市教育委員会　2017「野嵩上後原古墓群　平成 26 年度野嵩第一公園整備事業に伴う緊急発掘調査」（宜野湾市文化財調査報告書第 54 集）

宜野湾市教育委員会　2019「基地内埋蔵文化財調査報告書 7」（宜野湾市文化財調査報告書第 56 集）

宜野湾市史編集委員会編　1985『宜野湾市史』第四巻資料編三　宜野湾市

宜野湾市史編集委員会編　2000『宜野湾市史』第九巻資料編八　宜野湾市

宜野湾市教育委員会　2012『ぎのわんの地名－内陸部編－』（市民民俗芸能調査報告書）

報告書抄録

ふりがな	あにやあらぐすくいしじゃーりゅういきこぼぐん きゅうなやまがーばるきゅうりょうこぼぐん
書籍	安仁屋・新城イシジャー流域古墓群 喜友名山川原丘陵古墓群
服書名	令和元年度　西普天間住宅地区土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査
巻次	―
シリーズ名	宜野湾市文化財調査報告書
シリーズ番号	第59集
編著者名	金城　りお
発行機関	宜野湾市教育委員会
所在地	〒901-2203　沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号　TEL098-893-4430
発行年月日	2022（令和4）年9月30日

所有遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
安仁屋・新城イシジャー流域古墓群	沖縄県宜野湾市字安仁屋小字東原	472501	057	26°17′3007″	127°46′0342″	20190909～20191225	約162㎡	土地区画整理
喜友名山川原丘陵古墓群	沖縄県宜野湾市字喜友名小字山川原	472501	084	26°17′2201″	127°45′5307″	20190909～20191225	約38㎡	土地区画整理

所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安仁屋・新城イシジャー流域古墓群	墓	近世～近代	亀甲墓	石厨子、厨子(蔵骨器)、煙管、土器、獣骨	
喜友名山川原丘陵古墓群	墓	近世～近代	掘込墓	厨子(蔵骨器)、本土産磁器、煙管、簪獣骨	

要約

安仁屋・新城イシジャー流域古墓群では平成26年度の分布調査で確認された70号墓、71号墓2基と、平成29年度の沖縄防衛局による支障除去作業で不時発見された79号墓の調査を行った。70号墓、71号墓は残存状況が良好で造成土に埋もれていた墓庭やサンミデー、脇墓が確認できた。79号墓は墓口から墓庭にかけては消失しており、墓室内の一部が残存している状況であった。墓室内で確認された石厨子の中には「雍正二年」と記載されたものが確認されている。安仁屋・新城イシジャー流域古墓群という名称であるが、今回確認されたのは銘書から安仁屋地域の人々の墓とみられる。

喜友名山川原丘陵古墓群では平成29年度の沖縄防衛局による支障除去作業で不時発見された古墓4基を調査した。米軍基地の造成で壁面や天井の一部と厨子甕のみが残存する状況であった。厨子甕は計8点確認された。また副葬品とみられる簪や指輪が数点見られた。

今回の調査で、戦前の安仁屋・喜友名地域の人々と墓域の関係を知るうえで貴重な資料を得ることが出来た。

文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権（発行者）の承諾なく、この報告書を複製して利用できます。
なお、利用にあたっては、出典を明記してください。

宜野湾市文化財調査報告書　第59集

安仁屋・新城イシジャー流域古墓群
喜友名山川原丘陵古墓群

令和元年度
西普天間住宅地区土地区画整理事業に係る
埋蔵文化財発掘調査

発行年　2022(令和４)年 ９月30日
編　集
発　行　沖縄県宜野湾市教育委員会
住　所　〒901-2203
沖縄県宜野湾市野嵩１丁目１番２号
TEL 098-893-4430
印　刷　有限会社　大創
TEL　098-892-8287